

見八犬傳 第 輯 卷一



特 別
A13
4304
10



曲亭翁手集
續出

八犬傳第九輯

柳川重信子

繪畫

淮南殘丹
鷄犬升天

文溪堂精刊



八犬傳第九輯自叙



在昔自室町氏走鹿諸侯割据不稟武斷
 於幕下大以駢吞小強以威服弱是以蝸
 角力戰無所不勉狼貪蠶食各不知厭當
 是之時田夫植矛而耕耘山婦掛弓而方
 織人情都賢勇悍不厚於忠孝好名忘死
 屠城薪骨以為愉快且也每莅軍陳為勇

八犬傳第九輯卷一

文溪堂藏

名以知于敵。改姓異名。欲不與衆同者。間有之。所謂若鶉北。六花氏。吉見。八谷黨。里見。八犬士。江子。七馬。九牛。十勇。大内。十杉黨。上秋。十五山黨。朝倉。十八村黨。及山中。狼之。野中牛。助。不遑。擧也。其名。取載軍。記事。實多。不詳。素是史。闕文。歟。以類想像。此則暴虎。憑河之勇。已矣。蓋戰國。澆

漓士風。武勇有餘。而文學不足。徒倡異好。奇為俗。如此。嗚呼。野哉。野哉。文武猶花實也。未見其花。惡得其實。耶。故孔子曰。有文備者。必有武備。若夫其勇有餘。而一文不通。則其行。侏離。譬如沐猴之戴冕。與彼楚人。兇暴。又何異焉。由此思之。三綱無道。亂離世行。似鏡。梟者。雖有記傳。實錄。而不足

八代傳記詳考

卷之...

見矣。是吾所以作八代傳也。然而今之所傳非古之八代士事也。非古之八代士事猶且曰里見八代士其故何也。野史用心假彼名而新其事於是乎善可以勸惡亦足懲果乎君子尋文外隱微而解悟獎導深意婦幼代一日觀場而不覺春日秋夜之長云因茲刊行書賈利市三倍不思作

者之閑與不閑年徵月責所彫鏤五十有餘卷于此既而至第九輯意匠漸疲腹稿有限結局團圓且近抑童蒙等身之書於釋史所罕閱者俚指可復俟輯末之出焉天保五年長月之吉題于著作堂東園菊花深處

蓑笠漁隱



董齋盛義書

申嶽

南總里見八犬傳第九輯上套總目錄

第九十二回

二犬分路資一犬

二犬復讐自本輯第一卷

孤忠携鑣訟眾惡

第九十三回

坐轎守如救主

復讐之二在本卷

隔川孝嗣演志

第九十四回

高嘜板橋道節放戰馬

復讐之三在第二卷

五十子城信乃留姓名

第九十五回

梟頭鎧忠與凱旋

復讐之四尚在本卷

鼓盆悼定正知過

第九十六回

管領容讒疑良臣

復讐之五又在第三卷

御士仗義侯大敵

第九十七回

良將不征而地廣二總

房總話說在本卷

兇賊無心而自訴積惡

四第九十八回

盜從者偷走被盜戮

素藤發迹始自第四卷

宿賊巢強人免賊難

第九十九回

素藤聽鬼語施黃金水

素藤發迹之二在本卷

遠親惑邪說鬧館山坂

第一百回

舊黨應招土民益憂

素藤發迹之三尚在第五卷

返覓異術美人彌奇

第一百一回

老尼薦計舊祠新茸

素藤發迹之四又在第六卷

逆將樹人公子喪衛

第一百二回

伏姬顯靈補破敗

里見侯征賊始自第六卷

義成分兵征逆賊

第一百三回

里見源老侯富山吊亡女

大江神童再出世在本卷

大江親兵衛高峰拉勅寇

第九輯上套六卷總目錄終下套六卷共十二卷陸續刊行



甚田權頭
素藤

八百比丘尼
妙椿

あゝ彼のよるへ乃
 破ふかひのあれと
 みるゑあやあは
 あまれたこぢい
 雷水



神童甫九歳
 筋力捷成人
 不羨甘羅敏
 勇且唯得仁
 著作堂

大江親兵衛
仁

平田張金作
与

砥時願八業堂



と花ののぬ
みまがれの
姫あやれ
くたまる
世あられ
危玄同

伏姫神灵
ふせひめのみ

東六郎辰相
とうろくぢんさう

八代傳九郎辰一

大塚守下辰



創業尚義 守文弥賢
富有房總 九世延延
頼鳥齋散仙因

里見義成朝臣
さとみよしのあき

杉倉武者助
すぎくらむけのすけ
直元

八代傳九郎辰一

大塚守下辰

佐渡相川人石井夏海氏者予故人也。山海隔絕不相見二十有餘年于此。客歲偶有鴻翅其書曰貴著八犬傳一書新奇絕妙。世人所知我孤嶋亦年年流布。雖老圃翁公樵夫鑛匠而未閱為羞。如僕兼燭不知飽愛玩與米石一般。因而為庶幾附驥之僥幸。呈閱賤咏二三。長歌三伏乞賜筆削見許。載諸後輯。則生平望足矣。於戲舊故情願不可辭然若其長歌無餘楮可錄。即取二三短歌以附載焉。歌曰。家々々の看子やうのまゝ人夜をいほのまけ門のぬかき

いぬのぬかの犬のまけひし系なむむ筆のりく綾子はる君かき
あつひかりをみるあとの曇るる不えまゝ宛めてたしとほの毛統後人

右夏海氏所咏其第二歌則取今昔物語載白犬吞繭而鼻中吐絲故事云。與本傳第七輯目錄欄內所圖蠶繭紙糊狗即同意。葦笠陳人又識

南總里見八犬傳第九輯卷之一

東都 曲亭主人編次



第九十二回 二犬路と分ちて一犬と資く 孤忠鏢小携りて衆悪を訟ふ

文明十五年癸卯の春正月二十一日の秋。明小大阪毛野胤智ハ夏年の宿望時至りて父胤のり。度の難言よりけ。籠山逸東太縁連が主君扇谷定正。説薦めて那小田原。北條家。密談。使奉り。副使とせ。電門鍋介。既済。越杉駱。一峯。鯉崎。悪四郎。猛虎。們。い。大石。憲実の家臣。仁田山。晋五。共侶。伴。當許。又。從。て。五十子。の。城内。より。今朝。首途。の。行列。正。小。朝。朝。昇。る。時。候。武。藏。州。品。草。と。大。林。村。の。回。る。鈴。茂。林。を。ま。ま。け。る。波。打。際。を。等。着。て。路。傍。の。樹。陰。より。立。顯。れ。名。告。か。け。て。推。考。ら。け。る。鳥。此。前。銃。り。て。先。小。找。し。縁。連。が。馬。の。首。頭。打。斃。と。走。蒐。ら。籠。山。の。若。黨。四。名。と。殺。伏。さ。る。の。際。縁。連。短。鎗。を。引。提。進。退。場。と。掃。り。て。路。方。

けのあひて、
 た。毛野が敵も足るも、縁連を腕取して、浅夷四五ヶ處負さう。茲と先途と戦
 ぶ。傍り一程、縁連が後方の馬と歩きたる。電門既濟、崎猛虎、這那両個の副使の
 縁連と相距ると、二町許りければ、初より、那隊小遇を、縁連が伴當の慌あも、逃走の
 きて、正あつて、報へ、既濟猛虎うち駭して、現剛才小鳥銃の响、迫り、あつて、
 思ひ、原來、檻見と、る、兵、毎、續、け、喚、り、て、馬、拍、れ、前、後、奔、一、暮、地、馳、着、て、
 縁連が、若黨四名、身首處を異し、馬共、侶、不、し、て、登、時、後、れ、て、従、ひ、來、ぬ。這、副、使、の
 伴當の、後、小、跟、り、立、た、つ、た。縁連が、奴、僕、の、迫、り、の、畔、と、指、さ、す、て、二、位、老、爺、那、商、せ、大、墜、毛
 の、野、と、名、出、り、た。狼、藉、見、へ、那、里、不、在、と、報、る、と、ち、所、に、猛、虎、既、濟、鞆、を、扣、え、信、と、す、て、原
 來、件、の、檻、松、見、へ、尚、立、去、ら、せ、程、近、り、縁、連、數、も、兵、毎、と、西、聲、劇、く、罵、聲、を、馬、を、找
 め、縁、連、と、相、資、も、欲、ま、れ、も、去、向、の、陝、水、田、の、畔、で、一、騎、打、る、進、退、不、便、の、安、危、と、
 料、り、難、く、左、右、を、も、找、め、え、然、と、て、甲、と、踏、渡、ら、せ、鋤、も、甘、薄、水、の、底、見、あ、れ、ぬ、泥

深、け、れ、入、馬、の、脚、の、立、く、誰、何、と、踏、踏、と、れ、を、斬、り、縁、連、の、下、鎗、も、さ、す、
 屢、毛、野、小、數、惱、ま、れ、既、小、危、に、光、景、を、大、家、氣、と、同、む、そ、中、小、猛、虎、怒、り、堪、え、
 意、を、聲、耳、鳴、り、て、電、門、主、を、あ、ら、せ、左、右、の、路、中、に、も、と、廣、げ、れ、多、勢、を、遣、り、和、殿、越
 杉、仁、田、山、の、謀、も、合、を、左、右、の、路、を、多、勢、と、俱、し、て、寄、せ、我、咱、の、獨、中、路、を、那、里、の、危、窮、
 極、へ、先、々、の、い、ち、も、馬、と、因、と、兼、放、り、槍、奴、持、り、鎗、と、槍、合、り、袂、と、そ、の、幅、三、尺、足
 ら、ず、の、水、田、の、畔、と、前、の、似、く、足、不、信、と、ま、り、後、方、不、從、若、黨、奴、隸、皆、後、れ、と、極、の、実、の、一
 粒、並、に、細、路、と、喘、を、り、不、續、け、り、介、程、小、之、隊、を、越、杉、駱、三、仁、田、山、平、五、も、絆、の、異、変、と、知、り、馬、を
 飛、し、て、來、し、れ、既、濟、も、亦、馬、を、寄、せ、那、之、方、も、癖、者、捕、捕、る、隊、配、と、亦、も、急、單、に、火、速、の
 進、退、駱、三、平、五、異、議、も、あ、り、隊、兵、も、あ、ら、せ、と、引、り、左、右、の、畔、路、西、の、方、も、電、門、既、濟、
 東、の、方、へ、越、杉、仁、田、山、隊、兵、各、各、三、十、名、先、小、找、り、引、り、前、の、起、り、鳥、と、共、駭、り、白、路、馬、
 求、食、難、く、朝、西、の、風、を、着、せ、と、翔、り、け、這、之、方、も、寄、る、大、敵、大、阪、萬、夫、の、勇、あ、り、と、脱、れ、ぬ

おと思へど勢いよもその機を既済一峯晋五門の勢を負ひ東西より咄と噴いて直走の
 ちくとも發るる西も東も去向の畔を截し早う東塚の陰より思ひけりも晃りと一度突か
 る鎧既済一峯が馬の大腹馬と串れて這那共必死の一聲嘶りて倒れ禁むらもあ
 るが兩個の武士も共侶互落されて男の身と横らして仰天する登時東西左右の畔を截
 地と推倒して頭を两个の勇士三條路の一對する萌葱威の身甲は細鱗の臂縛筋鐵打の腔
 衣を奇物造の両刀を瑞昂と踏へるも大又の鎧を引提て去向の畔を立塞ぐ面魂は無敵の
 胆勇西と東を聲と合して噫物々たる奸黨が勢を負ひ助劍三昧何処とて路をえは保
 べと豫よりあふりて這西も東塚陰に埋伏して大坂毛野が復讐言と外から成る異姓の弟兄大
 甲小文吾悌順と喚ばれ猛者ぞ知る汝汝電門鍋介を陣外本衣の袖號の煙の字われ猜す
 身起して刃を受よと名告り罵れ東も立る一個の勇士もあつた鎧を横らして汝越杉松
 松松轉轉びと殺去要す後武も馬を杖や大坂毛野が義兄弟大川莊介義任のあつた逃

とも逃を找んと欲するも亦勒の世も足らぬ處あり快く勝負を決せよと勢も怯ま
 武勇の廣言悔りて身も傷れ東西存一稍立向ふ既済一峯東馬と打えり仁
 田山晋五も只一人の敵と思へ懲り不得若黨奴隷と罵励して短兵急不敵んと左の畔を左
 右の戦ひ五十子方の勢といへも尚義勁勇和漢稀多し這天士の鎧頭小誰う二個も當
 る汝東西俱不足と乱れ持する前射る自定る或は鎧を反飛され胸を刺れて伏すも或は
 刀を打落されて水田滾に入るも瞬間俯累りて死者十名有餘る它も刀瘡兒もあ
 ければ西も東も辟易して逃る不快は足曳の山の木並の散るど海邊邊を投て走りけり
 程の西の頭人電門鍋介既済の小文吾と刃を交へて小西時挑まされども大士敵も足る
 めるが水田中へ突倒れて起も揚も命を殞隊兵毎敬馬怕れて皆一辟敗走之小文
 五も逃下を韓盧の狐狸を驅る似く自も吻を趕さけり然り又東の頭人越杉駱三峯へ
 初莊介馬を刺れて落る折る臂を傷りて殆痛楚堪ざり辛きて身を起して仁田山晋五



奸党を鋤く
 畔を隔る二天士
 小文吉

八代傳九郎卷二

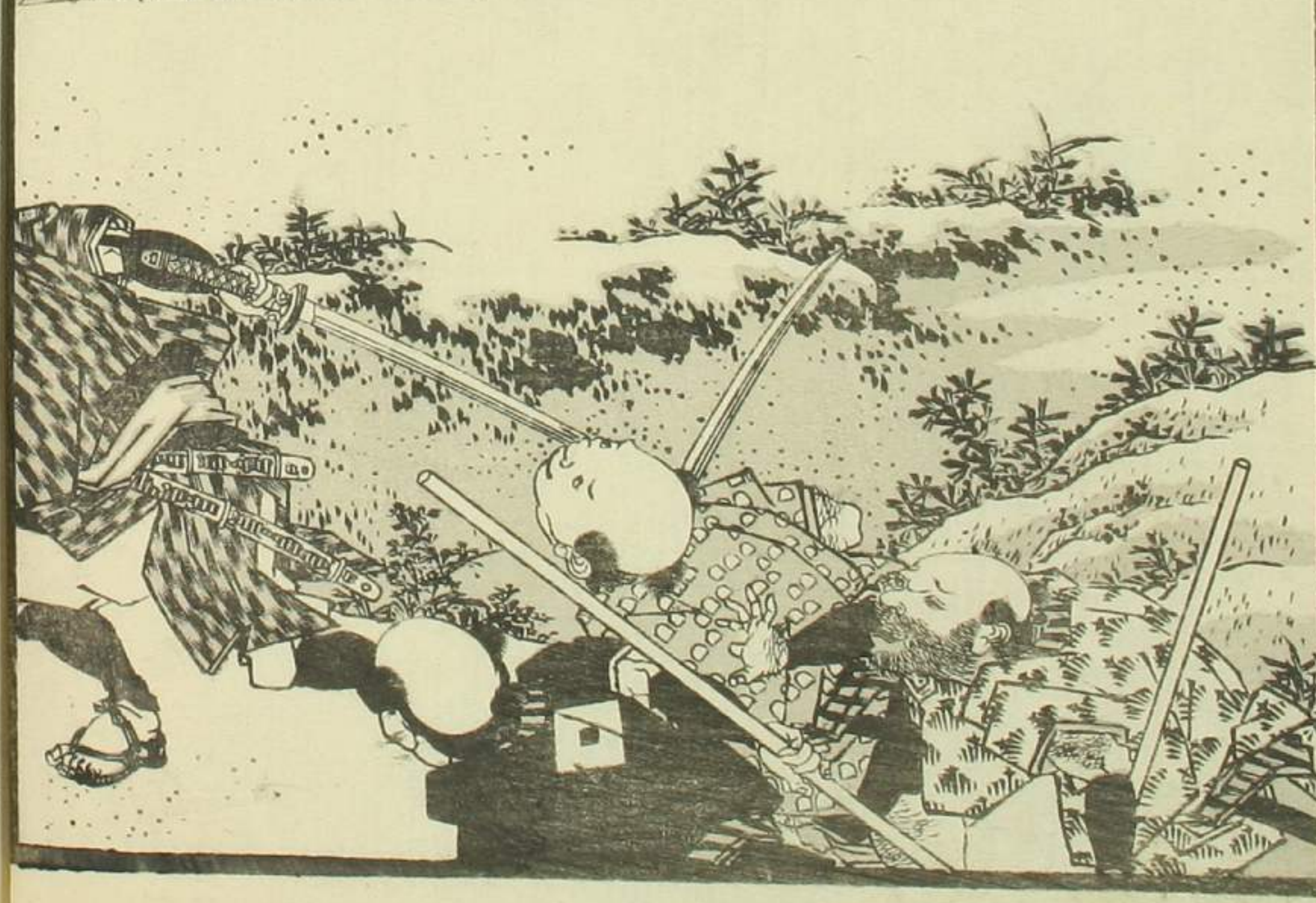
十

大坂の陣



八代傳九郎卷二

大坂の陣



八十八年七月

八十八年七月

兵侶不推捕網を鼓をんとは女は必もあも似て突立られて更も深きをも負いて逃れる身方を推倒
 されれ刺す晋五馬を踏めては曾骨折けて死になりける中仁田山晋五の始り一く馬が去る
 身の後隊まはなりともその莊本が鎗を避く連の小躬方が後めがも群る羊の角を也猛虎を
 突んと馬小似て向ふめ命を頑に逃るも都て血塗れて皆四零八散らる一晋五馬を俱も度を
 失ひて素も鞭拍を逃走るを莊本の不遣りとも勇者聲を鳴りて恥を知らずも必す武士汝の
 裏を戸田河原を我假首と斬鼻を仁田山晋五をうりての鎗頭に席字をの同の知りぬ
 那折戸田河原を戰死する十條力尺八分與然と雲めんぎ返せと罵辱をあらて飛が似く起意
 ま晋五の胆を冷し馬鞍らぬる一所も存心地と連り小鞭を鳴らし命を限りお逃
 たりる空下休題再説是も先小縁連の毛野夫刀風の烈し小身は危く覺し折らし陝田中の
 畔路より鯉崎忠四郎猛虎が自餘の副使小先を葛地の接けま過ぬ喚る鼓耳を耳を小岳山
 主各の心既に前難なる心強み五十子殿正を御門を數戰の功名揚す萬夫無言と喚す

なる鯉崎猛虎が来るを仇めりて宛家とあゝ身の程知らぬ一個の樞杓見虎の餌である大坂とあり
 層層の隙へ突入りて喰ひはすぞ自負廣言且まの且罵りて勢は押し進み緑連はあつちを
 連の呼吸を止めぬ鎗は透回るれども毛野は此方怯る色も既し進み猛虎は後目撃し縁連が
 踏んで刺し鎗の尖兒を閃りと外へ下と敷き刀の刃を縁連の鎗の纏兒研落されて放馬は腰力を振
 んと柄をも握る那時速に這時進。毛野は一聲ブツと激音りて礮と敷き刀の電光縁連は左に
 肩尖研られ苦を叫び果て醫坐を撞と倒れけり程もわづら猛虎は朋輩の仇逃さど救圍猛虎
 と突し鎗は散失を受流して十合あまりを戦ふ大刃筋至勢の大坂を殺立られと術は善謀猛虎
 焦燥して閃りし槍尖は毛野の身と反せ猛虎意を力あまると空突き野の畔を榛の伐株を
 刺串は放馬慌て抜すぞ毛野は透き伐倒と寄せて刀を抗て下と敷き然も巻の狂ひの猛
 虎も亦眼快くぞ伏鎗をち垂れて身と沈しく大坂の脚を躙きて逃走し刀を要哩とせり隊を
 沿らと雨の引柁を眉上叩く掀抗る現這鯉崎猛虎は心樹を直るね幸來敷度戦場を

一番も後れを合ふべし然らば七替力ハ二十許人敵と船を駈けりる泉の親衛鐵門を破り義
 秀伯仲と云ふ本事の違ひを器械合ての義経の中劣らざる大阪毛野をそが刃三拂隊十七
 撥爪を為体肉を餓る鵬の雛猿と捉る小異るべし殺せんと思ひけん撤言依小那這と西三回
 持送りて矢殿軍と掛て投擲せよ毛野(宙)身と因めりて投身を托地と蹴る修煉の白打猛
 虎(右)の腸骨横折れて(射)所の痛癢小靈時(の)堪も(云)とるふ仰反する身(轉)して仆れり登
 時毛野(乗)一楸(て)頭と撥んと猛虎の頭(影)と左(の)膝(へ)程(も)わ(る)鰐(崎)の伴(當)約(莫)八
 九名(後)走(り)跟(て)ま(り)這(光)景(を)驚(か)す(大)家(主)と(敷)せ(り)と(よ)め(り)路(限)け(り)推(並)て(り)找(し)ふ
 申(す)先(立)立(つ)一(個)の(若)黨(刀)と(見)り(と)抜(持)て(走)蒐(り)せ(り)程(小)毛(野)の(性)も(左)の(若)猛(虎)を
 不(厭)て(放)ま(り)右(の)小(石)と(撥)扱(て)耶(と)聲(機)と(托)地(と)擲(つ)寛(以)錯(を)那(若)黨(の)眉(間)を(酷)撃(つ)
 摧(れ)て(叫)び(も)果(死)に(せ)り(大)家(と)れ(不)吉(と)掉(之)找(し)難(さ)る(程)小(毛)野(の)透(す)け(り)壁(近)き(小)石(を)合(さ)り
 復(敷)も(投)術(不)驚(か)さ(る)の(目)若(黨)も(亦)咽(喉)と(敷)傷(れ)鮮(血)と(吐)け(り)本(家)伯(仲)の(伴)

當門(の)跡(を)濺(せ)と(逃)亡(し)て(影)を(不)見(に)せ(り)如(も)毛(野)の(然)も(と)あ(る)べ(り)を(冷)笑(み)腰(を)探(り)短(刀)見
 せ(り)引(抜)け(り)反(復)さ(る)る(向)撥(く)猛(虎)の(影)を(又)引(扱)を(頭)撥(折)て(刀)を(拭)け(り)腰(帯)を(首)級(を)引(提)て
 身(を)起(し)後(方)小(石)と(縁)連(の)折(せ)な(我)復(り)て(放)馬(に)さ(り)腰(刀)と(見)り(と)抜(き)立(あ)り(と)聲
 と(あ)け(り)背(後)より(兩)段(お)ろ(れ)と(敷)つ(刃)の(光)り(身)を(反)ま(り)毛(野)持(ち)猛(虎)の(頭)を(楚)と(受)任
 れ(り)身(も)敷(き)又(振)抗(る)刀(先)を(首)級(の)敷(眼)縁(連)亦(眼)と(打)れ(て)叫(苦)と(る)紅(女)兵(に)さ(り)程
 も(あ)り(身)を(抜)け(敷)き(り)毛(野)を(卷)火(鏡)短(刀)を(敷)き(り)て(叫)び(も)あ(る)筋(斗)れる(縁)連(が)頭(顛)撲(地
 と(滾)滾(と)軀(も)共(れ)仆(れ)け(り)の(時)猛(虎)が(伴)當(に)皆(さ)る(る)逃(亡)せ(り)更(に)近(く)敵(も)あ(り)毛(野)の
 除(小)短(刀)の(鮮)血(を)拭(き)収(め)又(猛)虎(と)組(り)折(指)さ(り)刀(を)合(抗)て(亦)推(拭)け(り)背(帯)を(依)然(と
 去(り)四(下)を(る)小(這)田(の)畔(大)に(る)榛(樹)の(伐)株(小)柄(枝)の(脩)く(出)る(の)是(を)究(竟)と(獨)言(て)先(懐)より
 會(死)ハ(亡)父(の)法(彌)と(寫)着(る)小(卷)幅(を)さ(り)戴(り)推(開)して(伴)の(榛)枝(を)拭(き)然(而)冤(家)縁
 連(の)首(級)と(駈)て(引)提(ま)る(る)水(田)の(氷)と(推)して(塗)れ(鮮)血(を)洗(流)し(て)那(伐)株(を)ち(載)り(親)小

たけり
日向合なるや。往る寛正六年冬十一月馬加常武が奸計を這縁連と戦ふ。先考不滅の
霊を以て今這血食を御養父常武一家の爲に鯛を煮る。吾々の龍山縁連の名を要諦を
埋めし。今に至りて十七年天運をなす楯環して死を復せざるを願ふ。義母の遺言を
兄の玉枕の助を皆共侶の影向とて這血食を觀て生前の恨を養育と先夫人と在天堂の生
あひひの弥陀佛弥勒佛と唱へ。更亦実母の法師を念と復讐の責任を討つ。考
子の誠心送れる隈る。哀歎文吐は涙を拂ひあま。綾羅錦綉たるを捨てて姑且を合
あつて。釋さるけり。浩外は是然と近づく人の足响を毛野の急なるは是則別人を
あけり。三士莊小文吾之登時毛野の邊へ。小巻幅を巻收め。身を起り。笑ひ。寄る
遅しと断迎へ。あと思ひけり。大田主天川王も。俱に怪我の有り。飲什磨いふ。と縁し。
けの復讐意を知られけん。御向の寛家の方人們が。東西二條の畔路より。縁連を援け。折和
君們中途埋伏して。遮り留めて。鬻果し。あや残黨と類れる。あ支の爲体と。迫り目撃せられたる。

其の亦縁連們と開戦の最中をけられ。討り多し。云々と支向の迫る。いへ。既和君們の補助が
よて。三方より敵を受て。寛家縁連が爲の助剣を。鯨崎悪四郎猛虎と。喚做を武吉。槍法
力量は。敵のあは。そのも。漏れ。鬻果し。終に縁連の首級を獲る。その折和の
伴當們の後走。未幾とも。開け。亦某が。投石。鬻果れ。駭怖れて。一個も送る。逃亡。介後近
つ敵も。け。寛家の首級。亡父の向。果。折和君們。這里。か。来。疑。釋
よ。宿因。錯。料。次。け。便宜。神の示現。ひ。依佛の利益。を。後。更
謝。所。を。知。か。ま。意。外。の。再。會。を。欲。し。喜。び。ち。思。ひ。一。期。の。業。を。何。支。り。亦。あ。れ。小
優。を。免。感。嘆。の外。を。誠。の。珍。重。と。誦。復。し。終。に。演。れ。小。文。吾。在。介。合。笑。を。點。頭。で
如。右。の。理。り。疑。る。も。亦。所。以。り。既。和。殿。見。られ。と。我。們。の。那。縁。連。助。劍。せ。て。競。い
本。の。敵。と。東。西。不。遑。留。め。那。五。十。子。の。副。使。を。一。電。門。既。濟。越。杉。一。峯。と。喚。做。を。這。那
二。名。を。鬻。捕。り。て。逃。る。仁。田。山。晋。五。門。を。透。ま。連。り。不。遑。蒐。る。晋。五。門。騎。馬。之。伴。當。們。も。皆

逃走の快けれ。往方も知まらざり。然も兵法小弱冠の追ふべきもの敬言もあるれば。遠く涉獵らば。提垂て和殿の安危を知らず。欲しきうち連立てかり来る折又七八個の敵のひいた目今和殿の徳々と報ひいふよ。そ思ひ合へ。他門の縁連猛虎們が伴當て和殿の投石立足も。遠くも逃て来るる。那折折つた。知らぬも。うちも。闇死奴們を。らね。我門二名推並ひて。路を塞ぎて突立。を三四人。刺果たり。その餘は。も。逃亡。を。其首より引返して。急とまれ。是等の故。方僅か。る。と。和殿の與。那助。劍。們之。般。梯。を。昨夜。も。偷。す。の。隊。配。せ。し。我。門。の。三。名。は。大。飼。犬。村。勇。士。の。隊。兵。三。名。を。從へ。便。宜。の。処。に。伏。て。在。り。あ。る。萬。一。の。與。ま。れ。ば。の。義。我。及。び。る。故。も。和。殿。の。對。面。は。約。莫。り。の。進。退。は。大。山。大。塚。の。謀。り。の。處。を。多。く。猜。せ。し。獨。大。山。道。が。即。の。智。計。も。な。れ。ば。也。這。里。の。四。方。より。見。耳。さ。れ。て。長。談。の。軍。が。卒。々。那。里。の。茂。林。林。蔭。に。退。れ。て。決。の。意。衷。と。書。ま。す。よ。と。よ。こ。く。と。の。を。せ。送。代。の。物。語。ら。い。木。ま。る。水。の。大。川。と。舌。り。く。畹。を。大。田。の。辨。論。も。皆。意。表。は。

鬼神不測の隊配も。毛野の半信半疑を。今犬村と秋野え。亦その人のあやも。向きほく思も。現這里の甲申中。敵の推寄来る。と。防戦の與便宜。あ。の。理。を。さ。げ。敢。異。淺。せ。點。頭。く。原。來。和。君。們。の。と。ま。り。自。餘。の。犬。士。も。我。與。俱。力。を。勤。せ。そ。隊。配。あ。り。の。少。奇。々。然。に。那。首。退。れ。て。決。餘。餘。談。と。盡。ま。す。と。心。を。な。ら。し。め。連。立。て。鈴。の。茂。林。邊。に。赴。く。程。朝。日。を。登。り。影。刺。昇。り。て。辰。の。初。め。の。け。り。看。官。熟。思。ひ。か。あ。の。日。毛。野。莊。介。小。文。吾。們。が。敵。と。三。處。の。挑。戦。は。皆。是。同。時。の。ゆ。え。長。譚。緩。語。の。上。の。あ。ら。ま。各。々。其。首。の。刃。と。交。へ。勝。者。の。捷。負。者。の。輸。奔。者。の。走。り。逐。者。の。趕。り。の。都。々。小。雲。集。時。の。も。れ。も。是。を。文。の。終。る。と。い。ひ。形。容。あ。り。語。勢。あ。り。三。方。四。方。と。一。緒。合。合。と。寫。し。給。へ。は。あ。ら。ぬ。れ。ば。也。あ。の。似。長。く。る。れ。ば。也。信。の。あ。ら。ぬ。と。の。あ。ら。ぬ。今。の。初。め。の。け。り。只。瞬。息。の。ま。ま。も。數。萬。言。の。終。れ。る。則。是。文。字。不。在。り。又。數。百。年。の。長。々。の。記。を。數。行。の。筆。小。約。舒。る。も。亦。是。文。字。の。う。か。わ。ず。と。思。ふ。目。前。の。理。と。推。考。者。の。古。語。云。琴。柱。の。膠。を。る。

一話除敵系。介程小仁田山晋五の大川莊介小駱一趕れ。既小危ふりけるを
 幸ひなく乗る馬の脚強ければ逃延る。間迫るより快五十子へ走りかへてより
 注進まばれと尋思とあつる不走走る馬小劣る一個の伴當喘々後かく。主僕谷山の頭
 多も来り程小一取敵系は樹間より。誰か知れぬ前晋五の肩と射られて馬より
 榎と落し六伴當吐嗟とさう小駭慌て逃んとし。四下とらる程小もあつて又突然と
 僕二の箭前足と射られて仆れり。登時件の樹蔭より。雑兵四五名走り多つ仁田山主
 僕と起しも立まぬと奔々と索と搦て宙吊あつておどおどする。その中一個の雑兵晋五が
 馬の駭走ると昔奮地小趕近着て鉤索閃りと投擲て馬足小膝多牽駐り人馬ひと
 多生拘の用場佳妙と悄語て一霎時あつて皆共侶小故の樹蔭へ退たり。話
 介両頭是より先小五十子の城内小緑連并小既済一峯猛虎們が伴當の逃走快り。頭
 幾名歎漸々かゝる多中途の異変と訴ると有司們駭驚をさうし所小御高鈴の茂林の頭

おて大阪毛野嵐智と歎喚做る。一個の樞杵見埋伏し樹蔭小在り。正使竜山免太
 夫の昔名と喚び谷仇多免さ下と推乃さける鳥背銃の竜山生れ乗る馬。鼓を
 去反落させて刀と接て走り寄る折竜山の若黨三四名推隔捕網て連り小法に戦ひ。那犬
 飯の物とせせ矢庭小四名と殺伏さし任りければ竜山生れ幸ふと恙をければ稍身起し鎗を
 引提て水田の畔退りて提多毛野と戦ふ程小迫後方小緩歩せり。副使の甲し知りて俱多
 勅せと馬と飛と来りければ路狭ければ找む便ず。故小猛可小隊配を三方小立りて
 崎生小中路より又電門越杉仁田山の人々左右の畔より馬を找めて鼓も果さんて急死し小思ひ
 かける左右の畔より又那毛野が助劍の猛者三名あり。その一個大甲小文吾一個大川莊介と名告
 であつた。これこれと名告り。越杉電門の馬と刺槍し立塞りて其勢小抗多戦を
 敵の三名も過されも俱も小煨鍊の猛者多一騎打ちの畔で且三方小別れる。御方の隊
 配り合期せ。信れ提し攪んと。輒かさうも先快く其の速と報あつると思ふより小走り

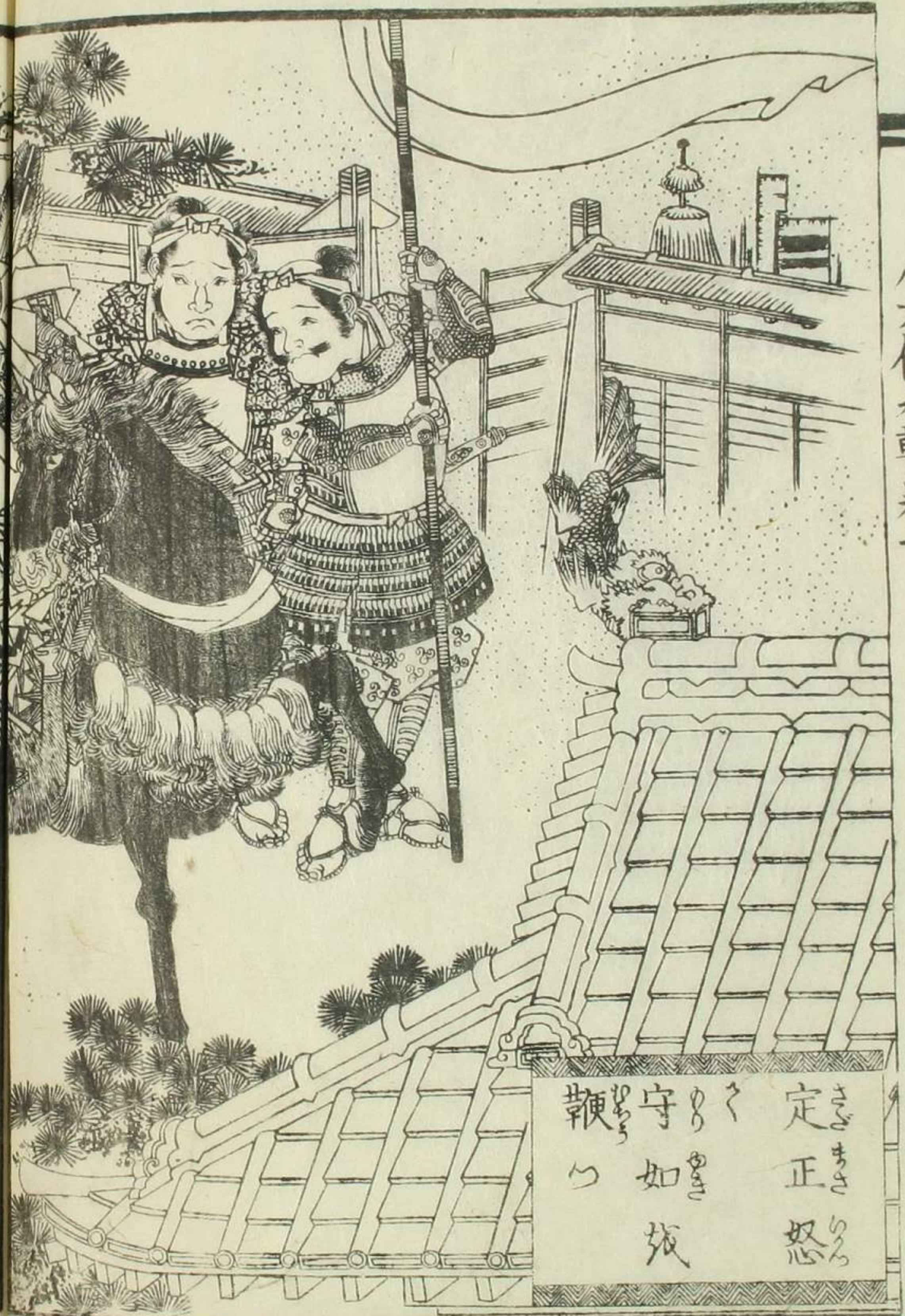
うへ。わきちあちあ。いとちて。ま。ちとさち。みまも。ね。ふ。
 還り。と喘。と注進。ある。と人。遅速。あり。と。都。て此。も。差池。存。れ。大。家。俱。不。胸。と。涙。と。と。
 主君。の。言。上。ま。登。時。扇。谷。修理。太。夫。定。正。主。の。件。の。と。打。听。て。謀。定。る。氣。色。も。多。く。そ。の。亦。不。慮。を。
 多。ら。非。除。を。慥。見。門。の。暴。な。る。野。緒。の。勇。あ。り。と。躬。方。の。言。勢。力。敵。せん。況。難。崎。悪。四。郎。猛。
 虎。の。器。械。會。て。向。ふ。前。を。三。十。人。の。旗。力。あり。且。既。濟。一。峯。門。の。皆。軍。陣。は。熟。さ。り。め。れ。お。
 加。ふ。大。石。の。陪。臣。仁。田。山。田。百。五。十。餘。個。の。士。卒。が。三。個。の。敵。を。威。怖。れ。不。覺。と。取。る。べ。く。
 ね。程。も。多。く。殺。鎮。め。て。再。度。の。注。進。あ。り。と。遮。莫。用。心。の。與。る。れ。加。勢。の。士。卒。を。調。へ。後。の。
 便。宜。不。儘。せ。よ。と。支。輒。氣。命。せ。ら。有。司。們。を。兼。養。り。て。忠。心。あ。り。め。の。各。壯。裏。不。思。さ。う。そ。
 大。阪。と。ち。ら。が。與。縁。連。の。親。の。仇。を。寡。さ。り。と。衆。敵。さ。り。と。神。明。佛。陀。の。真。助。も。あ。り。と。縦。
 真。の。復。讐。言。う。て。隣。國。敵。地。の。回。者。も。せ。と。縁。連。其。首。命。を。殞。す。他。が。只。顧。京。一。薦。め。て。
 既。不。使。と。奉。り。た。北。條。家。と。和。議。是。上。破。れ。ん。然。心。の。物。幸。ひ。是。不。優。さ。る。王。を。あ。り。と。平。
 縁。連。鼓。れ。よ。と。躬。方。は。輪。を。祈。る。も。あ。り。又。縁。連。と。同。意。の。め。の。大。く。さ。り。と。鼓。鳴。噪。を。さ。る。慥。心。

兒。們。の。三。石。を。飲。み。伏。兵。の。言。を。依。伏。又。詳。々。成。る。最。後。中。の。御。軍。配。加。勢。の。士。卒。那。期。の。
 遇。さ。後。悔。胸。を。嘔。む。も。甲。斐。卒。と。多。か。ん。下。知。あ。れ。か。と。咳。く。め。の。も。言。り。け。り。左。右。を。程。不。那。伴。
 當。の。數。を。漏。さ。る。の。又。幾。名。殺。各。痛。疾。を。負。る。皆。五。十。子。の。城。逃。て。來。り。有。司。們。と。鞆。
 る。縁。連。并。不。猛。虎。の。那。大。阪。毛。野。の。敵。を。又。電。門。既。濟。越。松。一。峯。大。川。莊。介。大。甲。小。支。音。の。敵。
 獨。大。石。の。家。臣。仁。田。山。田。百。五。十。餘。個。の。士。卒。が。三。個。の。敵。を。威。怖。れ。不。覺。と。取。る。べ。く。
 る。恥。て。這。里。の。方。へ。傳。馳。て。大。塚。還。り。飲。を。我。り。知。ら。む。と。再。度。の。注。進。支。分。明。敗。北。の。
 山。免。太。夫。の。大。阪。奴。の。仇。と。我。使。を。奉。り。て。小。原。赴。く。首。途。他。の。と。副。使。們。を。遣。は。し。て。
 當。黒。井。皆。數。を。し。て。他。他。獨。走。る。武。門。の。恥。辱。隣。國。を。必。死。れ。ん。料。る。不。那。奴。們。勇。
 悍。と。い。ふ。も。數。刻。の。苦。戦。身。を。疲。れ。て。遠。く。去。り。て。我。み。が。り。趕。甚。鬼。て。搦。捕。と。誅。
 戮。せん。兵。每。を。馬。を。牽。ら。む。と。甚。や。と。敦。圍。り。最。も。劇。烈。君。命。誰。う。一。個。も。礙。誤。



定正

〆〆



鞭	守	定
〆	如	正
	城	怒

去に美りぬと心づ。甲撥る間もあは隊の軍兵その勢約三百名畧武具小器械合て成廣
 庭の羅列あり。當下大將定正の純絳錦の戦袍の紫糸の好葉子鏡の尚可已時あり。未だ同
 由るく着下あき。龍頭の兜の緒を締め。藤巻と名ける。當家重代の太刀の虎皮の尻鞘
 拭き。腰お跨へ九寸五分。刺撃の七首と挿副て三尺五寸の小眉尖刀と脇挾を精好の
 奴袴のあけさきと音まき。裾短の穿做。勢ひ猛く出て来。縁頬近く牽居る馬
 閃りとうち乗りと。さちちおんとせられ。程の縁連們が横死のさちち後堂へもつえり。く
 鮮虫目の前の仰ふより。虚実を尋すさちち。河鯉權佐守如く求あける。定正の大阪毛
 野們をみか。征伐あらんと。さちち陣の折るけれ。守如吐嗟とうち敬馬にて。迹の跟
 廣庭を走下す。定正の馬の鑣面と推駐めて。詞意迫り諫る。さちち物体さ。我君の物
 多狂ひゆえ。願ひぬ怒り鎮めぬ。稟ま。聞召れ。那縁連の圍を賣。身れ
 利と揣る侍人るれ。然と知召れ。壁の月の明も。櫓の浮雲不掩れて。遂に光り

失ふ如く漫ふ他が便毎利口の説。誠心されぬ。専那議を任されて。今番北條氏と宛和議
 只是千慮の一失。飲素より良善の死計策。いひぬ。の故。を議と否。稟ま。折る。忠
 臣も遠ざけられ。又縁連の媚もの。功なき。時。鮮虫目の前も。是。の。思。苦。く。思。召。せ
 ぬ。女調の謂と憚り。諫難きを。さちち。況。數。多。守。如。多。稟。ま。折。る。さ。ち。ち。
 うち歎けての。い。ひ。が。今。ま。の。折。り。及。び。犯。七。諫。め。ま。忠。義。の。本。意。を。差。ふ。似。る。ま。ま。
 知召れ。那縁連の千葉家の昔臣。龜山逸東太と喚れ。折馬加常武の哄誘され。千
 葉家の忠臣粟飯原首と杉戸の松原を詐欺り。害と逐電して下野。世に潜ひ。那首の
 妖人假赤岩一角が徒弟と。その大刀筋を受。う。假一角の吹擧。ま。長尾景春
 主の仕。亦復狂せる罪。わ。亡命して當家来れ。然。件。の。大阪毛野の粟飯原首が
 送腹の子。同盟義士數人。親の怨を雪。え。と。情。々。地。の。縁。連。を。索。居。り。その。顛
 末と知。る。の。あ。り。風。聲。は。這。里。も。穿。え。ぬ。縁。連。當。家。の。仕。下。り。御。信。用。淺。く。な。れ。

言路塞りてその昔悪と云々と稟き申ゆれば心も心も深死淵に臨む如く薄氷
 氷と踏ふ似て戦々兢々の思ひ己がかりし當家の御武運を不慮に縁連ハ那身の仇る。
 大阪毛野胤智とやらハ敷かれ又縁連の悪と資けハ猛虎既済一峯ハ俱小命と煩
 きて是より那和議整へて人の下風立あらざり當家の幸ひするもの願ふ鼻祖の大神
 武武峯の神助より鉄蟹目の前の初母の湯嶋の神の加護ありて那奸佞を鋤れり
 今多々使遣されて大阪毛野門を去る地方を遠くも去る在るハ孝義を譽て城内より召
 迎高禄も留められ他の君の寛仁大度と感て忠義を盡す下然らば縁連猛虎
 們的士卒幾十名と喪ひ多とも損あはれとて多た益ありとの議を容ませぬか。といせ
 も果は定正の怒れる鼓耳と苛立ちやれ守如推參之猿竜山縁連ハ那大阪奴ハ仇も
 せ。復讐言の折申あるは我正使とて小田原の北條氏遣を折這五十子より程遠か
 らぬ鈴の茂林に埋伏し獨縁連の来るハ副使并伴當門を大とるハ縁連果を果すと

阿容々々として擗捕らざる當家の威風衰へりとも是より隣國を悔られ憶ふ縁連
 功と媚むおわらぬぞの然るも思ひ始より何ぞ一言も諫ざる目今那死と悟らば及んで昔
 悪とのあまのさ叨ふ他人の武勇を稱へ君と不吉なる不義失敬其首退せと敷園に暴
 く持る鞭を振抗て西三番榎守如の額破れて鮮血を面と浸せども命を懸て
 由放さぬゆゑに鼓耳と勵てあま情負君の御短慮微臣日屬縁連の奸佞邪智を知
 るといふもその非を言えお難ハ御信用深きより遠く他中られて甲斐多らんと思へ
 今今今朝も幸ひ縁連ハ敷る中忠臣に飲んども君の怒感に醒させぬ他
 與ハ大阪毛野門をめぐり擗捕せんと遂に千金の死身とされて今危を臨むハ林野
 多らざるもその恨も那大阪門の和漢を稀る是世の英雄也異姓の兄弟數人あり影の
 形小従ハ如く相資ると縁より听するもの山然ハ又勢カハむも悔らるハ強敵を
 その免を知り召れね一時の怒り任ぬて連ハ我を折吉の難義我ハ独是も亦

知るべきは微臣の職なればも。君の御名代として。士卒をば。若し那里に赴きて。大坂毛野に
 猶在るべし。定正を討て。俱くあつべし。若し那里に立去るべし。其の往方知れども。速く士卒を分
 り。隈もよく。驅逐獵り。まゝ遇せしむ。とあるべし。此の義を許さぬか。と涙を流し。詞を
 盡して。肝胆を吐く。孤忠の諫言。定正をく耳に達して。堪ぬ。怒り。小聲を惜まぬ。守如を無
 詩言の折。折所聞く。暇ある。汝も。元小胆見。那大坂。助劍。あれ。定正。軍將。とて。うち
 向ふも。捷く。かゝんと。悔り。思ふ。奇怪。然も。不更。を。詰す。本。事。と。せん。覚。期。と。せ。よ。
 と罵り。忽地の。鎧を。抗て。礮と。蹴る。憐む。守如。の。胸。を。蹴。り。何。と。ぞ。の。死。活。の
 知ら。ま。兵。兵。に。殿。居。居。榎。と。俯。け。け。定。正。れ。を。も。く。く。兵。兵。毎。續。け。と。馳。馬。の。鞭。を。鳴
 り。々。突。然。と。西。の。城。門。より。走。り。ま。れ。從。士。卒。二。三。百。名。皆。後。れ。と。身。を。起。り。勇。小。脱
 鬼の勢。を。お。の。朝。日。の。高。瞰。ら。ち。出。て。ま。れ。寄。る。法。海。狂。衛。の。友。と。竹。の。雀。の。家。の
 花。號。軍。旗。旗。幟。色。を。え。て。競。入。馬。の。塵。埃。洞。空。を。霞。散。り。て。死。けり。

第九十二回 川を隔々 孝嗣志と演ぶ

再説。扇谷。定正。河。鯉。守。如。の。諫。言。を。用。ひ。鎧。を。無。し。礮。を。揚。て。守。如。を。蹴。り。西。の。城。門。より。走
 ら。ま。る。馬。の。前。後。不。相。從。ふ。隊。の。上。卒。二。三。百。餘。名。旗。を。扱。り。器。械。を。見。め。り。て。操。小。操。を。い。そ。る。素
 上の。軍。勢。の。癖。を。敵。の。勇。士。の。ま。え。わ。れ。も。練。三。個。過。ぎ。と。思。へ。聊。も。小。心。を。先。に。争。ひ。隊。伍。を。乱
 ら。せ。と。高。瞰。ら。ち。浦。曲。過。り。哉。町。於。地。方。身。は。品。草。も。後。の。驛。路。も。あ。鈴。の。茂。林。邊。近
 つ。程。前。面。に。敏。速。に。樹。木。の。内。に。伏。る。一。隊。の。敵。あり。忽。地。揚。る。周。の。聲。研。小。响。て。野。に。頭。れ。る
 その。隊。の。軍。勢。但。見。る。士。卒。二。四。十。名。去。向。の。路。を。横。断。る。小。敵。も。も。噪。を。乱。れ。深。山。に。本。集。鶴。の
 燕。雀。と。搏。つ。勢。あり。そ。が。中。の。兩。個。頭。領。黒。草。威。の。身。甲。小。細。餘。の。掩。膊。士。頭。の。脛。衣。を。長。尺。兩
 刀。を。跨。へ。對。の。武。具。勇。は。九。尺。柄。雙。枝。槍。と。兩。の。合。ひ。を。向。魂。凜。々。と。四。下。に。拂。ふ。風。も
 對。の。兩。聲。高。く。來。る。其。隊。の。大。將。の。扇。谷。定。正。於。往。る。丁。酉。の。夏。四月。十三。日。池。袋。に。戰

大傳九傳卷一

いふ汝がぬ滅亡せしめ煉馬平左衛門尉倍盛主の舊臣多。大山道即忠與がけ復讐の第一
陣。這個異姓の義兄弟大飼現八信。道大村大角。礼儀が。這里に候し。と知るや。找きて勝負を決
せよと。指招に冷笑ひて。大路を陝しと立す。定正をうらめて。原來這地。狼籍見の。衛尉縁連。們を
撃も果した。那大阪毛野。とらひ。その三名の。も。豊嶋煉馬の。殘黨も。亦那隊。も存る。も。遮莫。看る
が。長の。知れる。鳥合の。小敵。躬方の。身勢。比れ。看算。あも。足ら。推捕。綱て。敷。と。連り。不
采幣。中ら。揮て。躬方。と。將。大將。の下。知。從。先鋒。の。頭。人。地。織。平。末。廣。仁。本。太。一。百。餘。個。の。雜。兵。を。魚
鱗。備。吐。噓。て。三。七。王。の。敷。も。ん。登。時。現。八。大。角。の。躬。方。と。信。と。と。兵。每。中。割。れ。を。聲。と。り。共
侶。鎗。を。括。て。近。く。敵。の。瞬。息。間。に。鎗。伏。せ。る。勇。將。の。下。弱。卒。を。れ。る。隊。の。雜。兵。三。千。許。名。各。敵。を。引
受。て。一。人。も。と。西。入。の。當。ら。ぬ。の。入。亂。れ。戰。ひ。介。程。現。八。の。地。織。平。と。鎗。と。交。え。又。大。角。の。末。廣
仁。本。太。と。雌。雄。を。争。ふ。戰。ひ。の。盛。る。定。正。の。後。陣。の。敵。の。伏。勢。猛。り。起。り。先。手。找。し。一。個。の。大。將。是
其。る。打。粉。を。紺。の。糸。の。甲。火。秋。打。る。甲。の。緒。を。掃。四。八。子。り。わ。け。大。刀。落。し。廿。四。抽。る。中。黒。の。征。前。甘。み

身又平
井作
古記の載
法西典
同

馳。做。一。本。鐵。筋。の。言。は。真。中。に。揮。持。て。桃。花。馬。の。太。逞。に。雲。珠。鞍。措。て。乘。り。天。地。响。け。聲。も。火。も。お。れ。管
領。上。杉。定。正。先。亡。煉。馬。の。一。老。臣。大。山。道。策。を。嫡。男。の。大。山。道。節。忠。與。の。あり。裏。表。白。井。の。相。敷。の。巨。目
助。茶。裏。と。書。は。て。我。計。畧。は。れ。も。手。年。の。執。懐。は。不。至。れ。刃。と。受。よ。馬。の。隊。勢。を。找。せ。攻。ま。れ。定。正。酷
く。驚。び。て。原。來。敵。の。伏。勢。も。快。一。方。を。破。り。退。か。せ。と。喚。聲。も。聲。も。先。手。肩。合。の。主。卒。一。驚
慌。て。退。ん。欲。ま。れ。後。の。道。節。の。勁。敵。あり。又。進。ん。欲。ま。れ。前。手。大。飼。大。村。の。兩。雄。あり。且。左。足。跡。を。な
る。大。洋。に。右。の。樹。木。限。の。ま。れ。路。陝。を。進。退。便。多。前。後。の。敵。を。探。立。ら。せ。敷。る。の。め。を。言。う。け。是
より。先。手。地。上。織。平。の。大。飼。現。八。と。鎗。と。合。し。て。小。雲。時。の。挑。戰。の。腕。を。衰。て。既。に。淺。疾。を。肩。ひ。か。逃。は。し。不
透。間。の。折。り。敵。の。伏。兵。の。後。方。を。起。り。ぬ。ら。程。を。あ。れ。後。陣。も。共。に。亂。れ。織。平。の。胆。落。て。引。外。え
と。せ。程。不。現。八。咽。喉。と。刺。れ。仰。及。仆。れ。死。せ。け。り。又。大。角。と。鎗。と。交。え。末。廣。仁。本。太。の。躬。方。猛。り。敗。走。り。地。上
織。平。も。敷。ま。れ。か。驚。怖。れ。逃。は。せ。大。角。透。さ。鎗。伏。せ。て。首。を。雜。兵。に。捕。せ。る。介。程。不。定。正。の。則。後。敵。の
攻。敗。れ。既。に。危。き。け。り。有。係。主。の。命。代。之。死。す。兵。多。く。わ。れ。僅。か。一。方。を。殺。披。て。相。從。近。習。八。九

大傳九傳卷一

三

大傳九傳卷一



あまの
品草の原
道節定正と
赶ふ

現大角雙で大敵と破る



大坂の陣

大坂の陣

名馬の左右成す。品草の走り程。道節の只一騎。衆先馬も飛して。其處地に趕。鬼も迫り。聲も立ち。管領定正。其處も敵小舟を。多し。復を忠。與分。怨の征。前受。て。不。成。す。ち。あ。り。あ。の。喚。掛。て。公。前。路。近。く。る。隨。ふ。三。つ。満。月。の。似。く。事。固。めて。矢。敵。耳。火。く。彈。と。射。る。修。煉。差。生。定。正。の。盛。の。不。成。す。射。摧。たる。並。前。咆。と。共。信。の。偷。縮。之。弗。と。斷。離。れ。て。度。無。地。上。亦。隊。を。け。り。定。正。吐。嗟。と。胸。を。決。し。と。韓。局。の。俯。し。頭。と。抱。て。其。首。も。も。逃。走。る。と。道。節。も。不。遣。り。と。馬。小。拍。れ。趕。り。勢。以。免。る。べ。し。も。わ。さ。ま。定。正。の。近。臣。三。四。名。足。非。多。路。踏。留。て。齊。一。防。戦。ひ。と。道。節。の。物。も。其。左。右。に。挾。む。右。に。力。を。抜。因。り。く。近。く。敵。を。伏。し。遠。く。馬。の。蹄。踏。掛。て。或。は。蹴。返。蹂。躪。り。に。縦。横。身。の。勇。士。の。突。戦。獅。を。奮。奮。の。勢。以。虎。彪。も。用。る。如。る。然。し。も。四。個。の。近。習。の。母。悍。り。所。も。わ。ね。る。思。ふ。も。似。を。度。を。失。ひ。て。或。は。頭。願。り。ろ。ち。か。と。あ。い。ふ。で。二。は。敷。も。落。され。或。は。深。浅。の。堪。ぞ。と。仆。る。も。あ。る。所。も。鮮。栗。馬。蹄。の。漫。たる。多。程。亦。定。正。辛。く。虎。口。を。落。ち。延。て。稍。品。草。の。原。を。走。來。け。り。休。題。更。説。落。船。與。之。有。種。の。御。前。道。節。論。議。せ。り。那。隊。亦。加。さ。る。と。海。戦。の。戦。飯。と。炊。與。ふ。と。留。置。れ。四。五。名。の。雜。兵。們。と。共。信。の。高。嶮。の。浦。の。船。中。在。り。既。し。く。定。正。兵。か。う。隊。兵。許。多。

品草の茂材の方馬を走らせし軍装を看ると分明なり。その那里の戦ひも敗れて敵の走るとか。雑兵の逃るる。慌しく五十里を走る。有種迫りこれを。肚裏の思ふ。料も優る。けの戦ひ定正。城より出で。躬方の勝利を。大山王の誠あり。我安然と。這船。成り。這奴。們を敷き。武士も甲斐の。兵。も。あ。ら。ず。一。人。も。擇。討。敵。を。捕。て。我。亦。亡。君。志。成。致。さ。れ。と。尋。思。と。多。く。怪。々。と。雜。兵。并。不。戦。ひ。好。む。船。主。們。の。意。裏。示。し。武。具。着。せ。て。情。々。地。陸。上。登。る。隊。の。兵。卒。七。八。名。程。は。樹。林。蔭。に。立。躲。れ。て。落。着。敵。の。旗。を。在。り。危。る。べ。し。知。り。も。兵。船。公。定。正。僅。不。殘。る。近。習。と。俱。と。品。草。の。原。を。走。る。程。亦。亦。復。安。り。と。頭。れ。る。一。隊。の。敵。も。先。手。找。り。一。個。の。頭。人。を。鎗。に。即。ち。命。組。み。耳。に。串。し。聲。高。く。來。さ。れ。り。是。定。正。殺。着。る。鎧。の。威。毛。も。飛。た。馬。を。我。も。知。る。先。君。豐。嶋。勘。解。由。左。衛。門。尉。信。盛。朝。臣。の。奉。為。死。心。と。雪。入。覚。期。と。母。と。喚。り。追。近。つ。て。面。も。ゆ。も。走。て。鬼。れ。定。正。主。從。驚。慌。て。敢。亦。勝。負。の。好。ま。且。戦。且。走。り。有。種。の。隊。兵。を。烈。く。找。め。息。も。養。れ。痛。痕。を。負。て。走。難。る。敵。面。を。數。捕。ら。れ。信。れ。れ。も。定。正。僅。九。死。を。免。れ。て。

八代傳九卷一

高嶽まで落て来て初め息を絶て後方迫り来る相従ふ近習の人多く路を敷き
 二階堂高四郎三浦三左吉郎と喚ぶる。只這西側近臣の死を憐れむ他も敷介所痛癢
 肩て全身鮮血淋漓。如定正憶を嗟嘆して。徳宗我一是怒おの堪む。哀を好む。河鯉權佐
 守如の諫を聴く。其の期小賢。今百遍悔を申す。快五十子の城を還る。寄る敵を防ぐを
 又八町走らる。五子子の城の黒烟空を焦して。兵火既お煽り。主従是又驚愕。那ハ行麼と
 呆れて馬を駐ゆる。浩然。現大角の敵の大將を撃ち捕んと。猛卒十餘人を相俱く。捷徑を經て
 於て。目今定正。正從二名。停止する。推捕細敷を。定正必死の空窮。免るべし。而
 二階堂高四郎三浦三左吉郎。定正馬前。立塞る。敵を柱を。現大角の敵。小程。定正
 近着く。敵の雜兵を殺拂。路傍の車馬馳走。腹を斫る。覚期の折。忽然と。一隊。六軍兵
 阜の後より走らる。それ。勢。千餘人。新隊。似。殊。亦。訝。只。一。挺。の。轡。雜。兵。四
 名。昇。先。心。帷。持。河。鯉。權。佐。守。如。大。本。上。馬。り。定。正。を。走。ら。せ。て。原。來。敵。の。由

り。向。我。生。不。勝。の。勢。阜。馬。を。乘。下。あり。定。正。一。騎。を。小。あり。守。如。救。を。喚。り。其。勢。の。中。馳
 へ。け。登。時。現。大。角。三。浦。三。階。堂。之。敵。を。捕。て。又。定。正。と。趕。へ。せ。り。敵。は。援。の。兵。を。走。ら。せ。主。君。守
 護。を。為。さ。中。小。四。五。人。定。正。に。從。ひ。て。柴。浦。の。く。ま。走。り。其。餘。の。件。の。轡。子。小。川。の。前。面。向。り。印
 多。て。救。せ。と。て。如。を。然。現。大。角。門。の。敵。は。援。の。兵。の。來。り。を。怕。れ。お。あ。ね。ど。件。の。新。隊。の。頭。人。豫
 知。守。如。且。轡。子。を。乘。り。是。か。を。詭。の。計。を。と。り。守。思。と。り。躬。方。と。林。示。を。敷。も。蒐。ら
 せ。蒐。れ。ぬ。甘。み。あ。ら。も。猶。豫。を。し。佳。う。程。の。道。即。定。正。の。近。習。四。名。と。二。個。も。漏。れ。て。敷。も。果。ん
 且。射。落。る。定。正。の。盔。を。雜。兵。が。持。り。を。漏。れ。て。直。理。小。原。生。を。本。不。ける。折。落。點。と。之。七。有
 種。の。敵。の。敗。北。を。猜。し。船。も。り。定。正。の。去。向。を。渡。り。攻。戦。を。其。後。類。と。敷。も。捕。り。て。不。定。正。と。趕
 ん。と。る。料。も。遺。遭。け。り。又。大。阪。毛。野。嵐。智。柳。宗。井。小。文。吾。們。と。共。侶。小。西。の。林。樹。原。を。退。れ。て。料。ら
 ず。助。劍。せ。れる。緣。由。と。初。め。昨。日。湯。嶋。の。社。頭。守。如。と。密。談。し。道。節。を。偷。聞。せ。り。不。思。議。お
 幫助。せ。る。及。道。節。の。折。を。君。父。の。仇。を。定。正。と。敷。も。ん。と。欲。ま。け。の。隊。配。り。又。大。村。大。角。礼。慶。の

後のちに方の僅よ面の會ひまるとしては、侍のれが和の殿のまれかまれ小弟のけの戰ひに定正主と趕ふか。
 かまらず然らんど況ん河の鯉の氏を是の義の赴く所にて和殿と疎る思ふまあらず備思意もて揣
 りん定正主の既に走るの程も今中に及ぶべし然らんど今あらず河の鯉氏を敷くべ三合を避て
 那の孤忠と空しらせらるも武士の情を他も敷く鬼は是非及び所を折離雄と決すも。
 怯しと誰ういふは這誒をあつて進退を定めぬ後悔あらず、怖ろ要るたると言ふと詞を書すと
 諫れが只管勇道節も言の道理は通られ、又いふもるもと然らずと感き井小文吾就中
 現大角の毛野が談論をあらしめて俱小感嘆の聲をあらしめるも名告はて大阪主我們の
 大飼現八信道大村大角礼儀を外に御當の大大塚の密談をあらしめ、和殿の與敵の助劍を
 禦んと隊兵三千許名と從へ程よた樹蔭に伏隠れ、姑且勝負を現し、大田大川三勇が
 那助劍を殺散らして後をまり、我們の下を及ぶ、折らず管領定正主があらず
 城とりあらずて鈴の茂林邊にあらずけれ、更亦大山の與小寄敵と戰ふ、北を趕ふ捷徑

上の剛才這里にあらず、今の毛野に恭小現大角の對ひて、大飼主大村主とあらず、
 我復離言の本意と遂に皆是諸彦の賜のり、稍安知之感謝、勝を宿因の致を所
 致九慮の前知矣、不あらず誠に幸いふ、其致を演ずる有種も亦找毛野對ひて
 名告と多、料も諸大士の愛顧を受ける身の致を詞短く告げ、間近に敵と措をる、肩も
 甚うけ、這大士の回答と側聞せ、雜兵們支且感下且次で現英雄の胆魂を格別として、諸語
 此の馬を思ひけり然らんど折敵射方の相距ると遠くもあらず、間一條の溝川に絶不板橋と
 架す敵の殊き小勢を他も橋を引て、現大角の回答談論の那里もあらず、忽ち
 地敵の隊伍中に年尚青に一個の武者小橋威の鎧を着て、眉刀を挟み、川の上に杖をたて、聲高
 ちと喚ぶ、其方の陣の大阪毛野流智の名を大山氏もいはさず、公まり不し、其のをわれ
 俱に這方に找ふ、惟の不月を見、河鯉權佐守如く獨子也、河鯉佐太郎孝嗣と喚ぶ、其願
 ふと、其の

大坂の陣

いそがしき馬より内へ下きて一個の雑兵を捉て毛野之儀は遠方の岸に離れ立て名告りて依太郎孝嗣
と對面を當下孝嗣阿容る色なき毛野道節們より對して小子尚弱冠の身は親代を蒙
傑們と今問答及至と敢て求る小あを争何せ權依の今朝より猛胸痛の病着あり行步
辯舌不如意され則轎子扶乘して昇と俱と來ぬ言空りいふも今此隱と不申也
親の中心信他小異され御前君夫人解虫目前の内命を尊奉す當家の與の大毒患也君を
團々買那縁連們的奸佞人を除くと思折多昨日湯嶋の社頭で料も大阪氏の義侠劇
孟判荷勝れる家傑多と知覺と惜地は胸臆さし諦那縁連們を敷果さるけの便
宜と相譚ひ小堂思んや縁連大阪氏與下も親の仇をりされがそ異議もなき未引れはそ
支の頼末小子も親の密語より知知とされ今諺も傳へる要す然らば我親の忠謀果
あそこの圖の中と大阪氏の借と君の與の毒毒を除けその物にたれも我君の縁連は罷
任の感に醒るをその報ありより叔父堪大坂氏們をみかす搦捕んと士卒二百餘名を率

猛可出馬の準備あり親の竊に敬馬真皮にてそれる小利害を演り連の諫言せし君侯震怒
酷く騎馬の鎧の折檻を親守如その疾車今も不臥轎子お在。然而我君出馬の後敗
軍の雜兵脱れかて支佐と報へ城内の士卒駭謀して快加勢の兵をみかすと相罵り
準備小とも素素折大山氏們的義兄弟大塚信乃成考とすを勇士の為謀られて五十五城を
火攻せられ烈に魔風小きも城廓灰燼なきけり敵の隊勢されも躬方猛火お辟易
敷られるの跡も餘士卒後にも威落して往方を知る我胸痛小も臥在。忽
地小身と起し小子と喚迫着け大阪氏と密謀の趣筒様々を解し我初胤智と義侠の豪傑
この思ひ小誰も知る他も亦我君と仇を寛重嶋煉馬の殘黨も大山忠與と支當堂
我機密と忠與們の報知を俱謀り然る館の大支及て遂に城を後れ我忠心の還
るる不忠なる縦縁連們を除くと主君と敵小敷る枝を隱て花散角を斫牛を殺
そとの鄙語も方々然りと汝死と急を身軍もも戰場走るも我君の危窮を救ひ

大坂の陣

大坂の陣

尚又その期は遇が便捷と旋り胤智と刺錯て其首を死ねるが親の過を聊補ふかと思ふ。この
 餘のあり箇様々と教訓可寧ろされ小子の意をなれ然と親を垂置て燔死せんかと思ふ。こ
 ゝ轎子も扶乗せ思義の士卒千餘名と謀し令ら轎子と昇て這里未走の處で思ふが我君の死を
 救ひまゐるも然ら我親子二名此の難兵を從て敵を防ぎ我君後安く落しまゐると思ひ決り
 今までも只死と極ゆる存りけり和殿們も亦左右き鬼兵後れて未も大坂氏の大軍議を知り初て
 對面二言の顛末洩て這里もゆえ六聊恨と釋し似れを言訊らるる大山氏に申して我親と
 大坂氏密談とぞ知るとぞ隊配もあつた。知る絶の隊兵を大敵と掃るるは問て益多とぞ
 ら親の疑惑と承弁え與小先との一義及ぶのこゝれ感も毛野も道節胤智の答と等ぞ
 らの領を如右思ふ。宜し以我の憶も湯嶋の社頭と徘徊と那密談と偷听もあつた折生
 て大坂との面と認めれども是宿因の係所異姓の弟兄もと思ひ合せ證もあれは復難其趣を
 義兄弟們も告知豫毛野と相識する大田大川二人をも。情多地縁連も助劍の叔們を防

せらあ便宜より我のり大坂の五十子の城内へ寄るが加勢の士卒もあつた。その處を覗ひ短
 兵急小城と技は仇を屠りて亡君亡父の向ふと胸の軍議と定め大塚大飼大村們俱も舊
 好の兵を從て便宜の地方小隊配り城の虚實を覗ひ思ふも倍て造化精妙定正かろう大坂
 們を追捕へんそ士卒も從漫小城よりあつた。因て猛京部と易て天塚信乃小城を攻め酒家
 大飼大村と東西不立され不立景起と管領を挾きて攻戦もかと思ひ依る勝軍を我定正射
 たれどもその前も兇と權の裏缺りけり盛と母と仇の命と免れられ大坂のし。我軍
 界を知れよりあらんや。他へ他が難言と敷て河鯉氏と約束と違へむ我の我怨と盡め思
 と孝とを盡すの。欲も所各異と只恨ら我馬疲れて定正漏り。あれも透さる起り敷
 ともあるが敵も加勢の頭へ肩谷の大忠臣河鯉權佐守如と寫せ小幡も衆兄弟大坂們が云々
 議論小時の程りけり。いふもと思ひ一仇の命運も盡さるあらんぞ定正走とあらん。和郎們親
 子に敷るん要す。まの迹を尋ねてその故もあつた。いふも孝嗣らも言送るも義吉明辨那疑い

釋とくれども然しかまて不義理ふぎりと違ちがひなき。皇義すめみこと不ふ豊嶋とよしまと煉馬ねりまの人々野心ののこふと討果うちされぬ獨我君ひとりごを。山内やまうちの管領家くわんりやうけも同意どういふと合戦くわせんあり。和殿わだんの只ただ管我君くわんがきみを。仇あやと執念しやくねん深こほく恨うらみは是これを。註しゆれが道節みちせつ冷笑れいせうしてそのつらさ。豊嶋とよしま煉馬ねりまの滅亡めつじやうの當時たうじ定正じやうじやうの軍界ぐんがいも。巨田こつた持資ぢし。大将たいしやうより山内やまうち頭定かぶぢやうぢやうも千葉ちやうせん津宮つみやうと將しやうと加勢かぜの軍兵ぐんべいあり。主客しゆかくの勢せいも同どうく。是これ。扇谷あふやうの正敵せいぢき也。山内やまうちの傍仇はうき昔唐せきたう晋しんの趙しやう恤しゆ魏ゑい氏し韓かん氏しと謀まうし合老あうらう。鼓こをて智伯ちはく滅めつし。あつに豫讓よじやうの知伯ちはくの讎しゆんも獨趙どくぢやう氏しを仇きと。冤えんをて韓魏かんゑいと怨うらみとせ。是これ。趙しやう氏し正敵せいぢき也。韓魏かんゑいも傍仇はうき也。仇あやれが我定がぢやう正せい仇きと。山内やまうちを怨うらみとせ。支情しぢやうの相似しやうじ也。和郎わらう們らが知しると。毛野けのの推謀すいばう也。孝嗣けうじのち對たいして不佞ふべい素すより。大山おほやまの内うちに居ゐせ。趣しゆを既すでに會得けいとくせ。れ。上かみの餘談よだんを不似ふにれ。守如しゆにょ王わうの馮ほうれ。我がのちと面めんと認にんむ。敵てきを斬ざんて。鼓こをり。わんや。素すの徳とくを。今いまも。大山おほやまの方人かたうぢと。和殿わだんの大人おとなの對面たいめん也。是これ。是これの意い味み。報はうも。再會さいけい也。送恨しやうこん。病臥びやうふしの對面たいめん不便ふべん也。の。許もとの。他事たじも。異議いぎも。及および。心こゝろも。急いそぐ。後のちも。

不ふつと。その轎子かづこと。這方こゝろと。招まねく。難がた兵へいあり。轎子かづこと。拾ひろけ。川畔かわほと近ちかく。屏居びやうきあり。登時とんじ仇太郎きやうたうらう孝嗣けうじの大阪おほさか毛野けののち對たいして。請こゝろより。の推辭すいじも。親おやと。這方こゝろ招まねく。素す病臥びやうふしの為ために。許もとあり。の。軀かみと。轎子かづこの引ひを。推おし用もちく。毛野けの道節みちせつの共侶ともぢも。斬ざん守如しゆにょの腹はら極ごく。破やぶり。亡骸むじがたの衣裳いさうの鮮血せんけつも。深こほく。思おもひ。け。光景くわうけいも。毛野けののちと。道みちの即すなはち。あ。く。什しち麼まと。不ふ共とも小景せうけいも。支し回かい詞ことばも。小景せうけい時ときも。け。登時とんじ河鯉かゝい孝嗣けうじの落涙らくなみも。振ふる交かも。喃なん大阪おほさか主親しゆしんの。自みづか殺ころの計けいり。ま。岩いわ齧かひる。恨うらみも。又また。我がの。父ちちの。目めも。鮮あま目め前まへも。救すくふ。奸佞けんべい人ひと們らを。誅つとむ。守如しゆにょの。あ。く。出で。不ふ定ぢやうぢやうの坐敷ざしきの師しと。討うち。馮ほうれ。還かへて。敵てきの便べん宜いと。君きみの危あや窮きゆうも。及および。刺城せきじやうを。破やぶれ。孰たゞの路みちも。我君がきみも。向むかひ。面めんも。切きり。君きみも。先まへも。死して。我が。這こゝろ赤せき心こゝろ也。後のちも。知しせ。果はたち。夫つま人の終焉しゆげんも。我身がみも。火ひ中ちゆうも。葉はん。の。惜おぼし。亦また。俱とも不ふ死しき。親おやの遺言いごも。鮮あま目め前まへの死し亡骸むじがたも。先轎子せんかづこも。無なき。世よも。亦また。諒りやうも。煙けむりも。紛まれ。後のちも。辛からく。却かへて。其その後のちも。親おやの亡骸むじがたも。火ひ中ちゆうも。葉はん。の。惜おぼし。亦また。

轎子に程一乗と昇て這果来りける亡骸と我君の死馬前を父子共保つて屍を曝し
 是は切てのりる事と思ひしは違ふも約束違ふ大阪まで貳死心と知て初の恨を悔くも
 飲くも我君の危窮を救ひしは是孝嗣が功なり死との後も敵の英氣を折くは親の
 忠那死す孔明が生る仲連を走らせりとのいひて傳へ唐山の諺あり及ばぬも子とて
 上はるは中もあつたけり。死すは既に盡ぬ事なり。因果も理義も賢に諸大に刃を
 交えり。素より願ふ所也。思の隨に戦死す親の遺訓を稱ふ。君辱らば時ハ臣死すとの取
 賢の教を恥するもあらん卒遠方より渡え欲其方より鬼らるや。雌雄を決ねと詞雄々
 多死と急忠と孝と敷嶋の日本魂深に那親のてあの手あり宜不可惜後生に今般も果と何
 せん健氣るるは愛も毛野道節の倒れ。怯れるあはれも望かぬ戦ひを推辞て去らん。吾
 感嘆の外なきけり。段々も盡すも楮數ある不定限ある巻と更て這次を解分ると聴ぬか。
 南總里見八犬傳第九輯卷之一終

南總里見八犬傳第九輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第九十四回

高嶮の板橋は道節戦馬を放つ
五十子の城小信乃姓名を留む

そのとれたけの。あつた。うらつ。高嶮の板橋は道節戦馬を放つ。五十子の城小信乃姓名を留む。
 當下毛野の慨然と孝嗣と對して浦の河鯉生恩の與命を擲ち雙の爲す枕
 とは是戰國の慣を死との名に後小貽さ武士の欲を所されども亦時宜は依るる和殿
 血氣の男の負も退く退く羞むる爲に戦死す欲するも大山のうう大人氣を和殿と刃を父
 名嗚呼痛い守如更忠勇智計傳稀之主君の與奸黨を其父除んと欲するも其策
 可といふも原是機変を承れ仇を知らず魔障も夫君を愛して乱を怕れを其父未だ中查と
 よく奸佞を除くも則是忠臣を承れも謀る所正理あり機変を言せず故その策成
 る不及て反て君を危くして身殺去蓄害ある蟹目前の賢も俱死然と云ふは是

隠匿の祟あるを。蓋天道の善福七必降禍を。淫の密謀東隱匿之君の惑ひを醒難て。
 已とゆるを。彼らも。乃所機変を。衆麻の祟を争何に。况校見世才。貞智
 樹と旨と。密謀隠匿せざる。一旦その利ありといふ。機変の所以。支の破れ。至らば。の
 孰うあらん。那揚震が四知の誠守。後悔多き。その理。信地を。解目前。先叟の如。の
 機変の破れ。支一。宅も私欲。苦節孤忠の所。乃。香。身。後。送。然。然
 名。死。その福あり。生。といふ。恥。其。福鬼の来路。推。其。定。正。主。招。所。只。利。の。好。ま。く
 飽。え。られ。その身。怨。相。愜。人。の。親。愛。賢。妻。忠。臣。の。諫。と。聽。武。毛。信。越。の。四。个
 國。を。有。ち。る。一。百。許。人。の。敵。追。れ。城。に。陥。れ。士。卒。咸。離。散。賢。妻。忠。臣。又。伏。し。ぬ。み
 かつ。菲。薄。を。省。て。持。資。親。子。用。以。官。領。の。只。名。を。其。家。是。よ。衰。和。殿。の。理。成。と。く
 悟。り。這。里。を。戰。致。去。存。命。主。君。不。仕。諫。め。主。君。の。惑。ひ。を。覚。意。忠。孝。兩。多。全。ら。る
 べ。助。言。必。然。我。苟。も。守。如。便。と。一。面。の。交。り。あ。り。その。子。の。與。理。を。推。り。の。る。と。は。い。ふ。

現。る。の。う。ち。大。阪。主。和。も。漢。も。今。も。昔。も。敵。の。為。に。給。れ。命。を。預。け。ん。仇。の。為。に。論。さ。れ。て
 死。す。る。と。い。ふ。か。え。ん。未。曾。有。の。好。意。な。れ。ば。後。に。死。す。る。や。ら。ず。這。里。に。留。り。隊。兵。の。皆。腹。心。の。毎
 ち。我。親。の。忠。義。を。死。せ。し。と。惜。む。と。い。ふ。る。一。信。れ。今。ま。の。向。答。憚。る。と。い。ふ。る。既。和。殿。の
 い。れ。る。那。揚。震。が。四。知。と。い。ふ。小。子。敵。と。對。陣。あ。る。征。前。一。條。も。射。せ。ま。及。て。長。談。緩。語。を
 之。の。休。立。の。別。れ。と。知。る。者。あ。り。主。君。の。真。意。を。忽。地。に。疑。れ。罪。を。多。し。所。に。あ。る。尚。少。冤。屈。の
 罪。を。沈。む。獄。卒。の。も。死。し。折。這。里。を。戰。致。せ。り。と。後悔。を。も。及。ん。と。推。辞。む。と。毛。野。の。云。と。
 る。不。論。と。い。ふ。と。道。節。愜。を。聲。せ。り。て。其。頭。の。遠。慮。ハ。然。る。と。さ。る。定。正。の。惑。ひ。を。醒。

此。這。里。を。陣。致。す。る。と。い。ふ。と。の。義。烈。心。を。我。け。の。戰。い。不。く。敵。を。殺。せ。し。獨。管。領。定
 正。の。敵。果。去。れ。與。る。と。漏。れ。て。幾。千。人。奴。を。た。り。と。我。心。不。嘸。ん。や。渡。莫。定。正。を。い。ふ。

我。子。盈。首。を。捕。り。及。豫。讓。が。刺。さ。衣。不。優。去。和。郎。死。す。い。か。ら。死。ね。我。大。刀。の。雙。言。較。り。



八代傳九郎卷三

四

文英堂藏

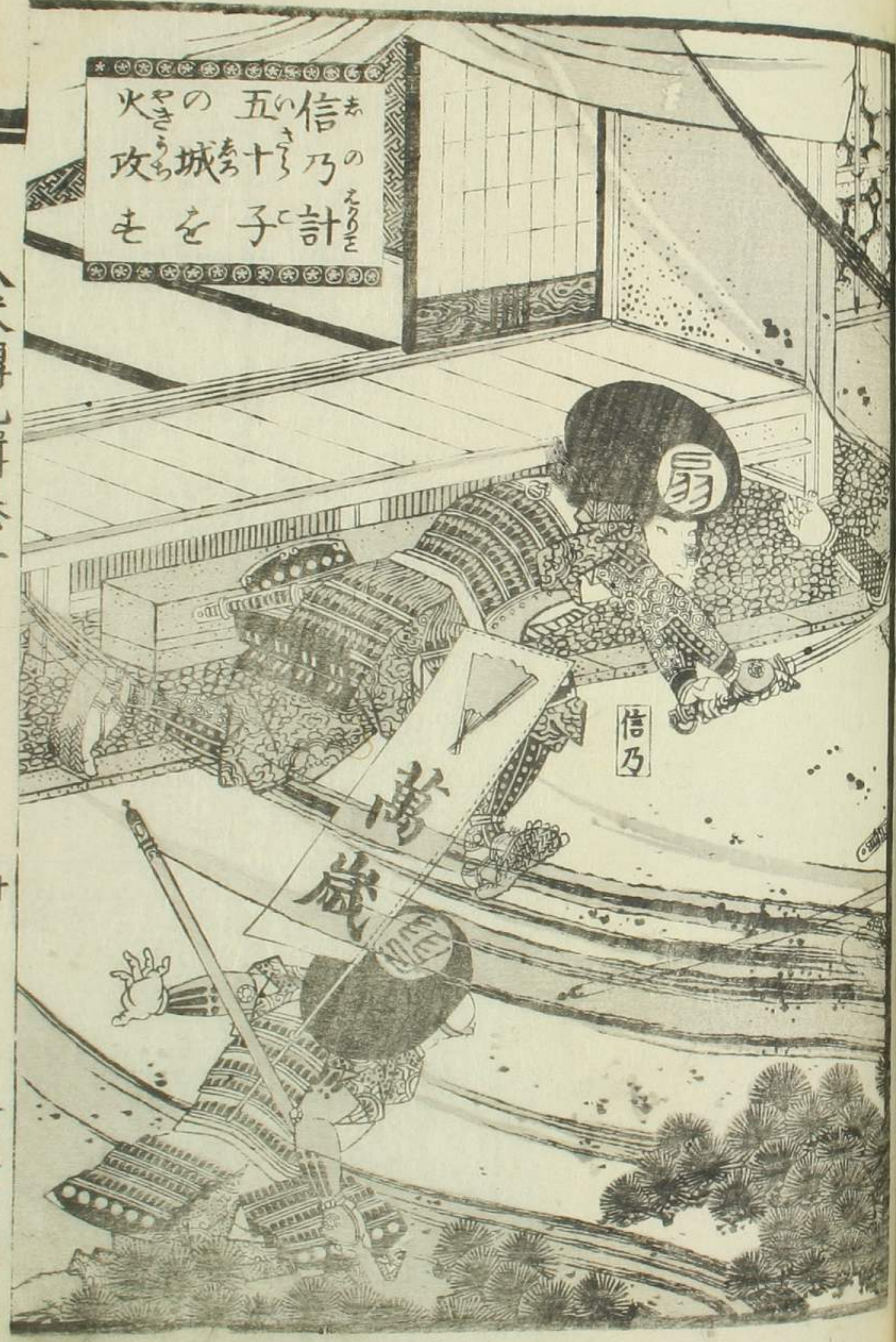


石野

三郎

文英堂藏

信乃の五の火
攻め城を計
を子に



八代将軍

十

大坂の陣



八代将軍

大坂の陣

よろこびとくまをあり。と。こへる。まそ終る衆人の送る面を注ぐ。速の答難ら。信乃の毒もその意を猜して微笑ら。論ま。若們今救ふ我賜と受るといふも。舊の城王のからる外不遇んと。首鼠兩端の思ひと做れ。米錢の若們が妻と鬻鬻子と賣るて。苛刻の童斂の調。我當城を攻陷。一霎時も當城の在ると死の金錢米穀の。若們も亦我民。我一日の父母と。不這民を憐さん。今我獲る東西を。宅も犯す。散して民を賑ま。誰う否まの。且這庫中る米錢の兵火焼るべ。若們の聚來。消防勉るを。遂不恙る。その功も亦賞。道理の徳地。尚占む。せん。腰る墨を。故鎌倉管領足利持氏朝臣兩公子。春王安王小傳。大塚近作。三戌之嫡子大塚番作一戌之獨男大塚信乃。戌考。以精兵才。數行の文を大家しく仰瞻る。故鎌倉管領足利持氏朝臣兩公子。春王安王小傳。大塚近作。三戌之嫡子大塚番作一戌之獨男大塚信乃。戌考。以精兵才。

二十名。來攻本城。須臾拔之。以與父祖。雪先君舊怨者也。是併同盟義士。犬山道節亦欲復君父之讐。是舉在資助其大義矣。吾既已拔城。毫無所犯。蓋以民者國基也。雖有金城石墉。然無民其與誰共守焉。即開倉廩而賑窮民。錄數行以留姓名。一日。主人公亦是民之父母也。累世國司。益憐汝之民。儻有咎民之受于吾者。吾復來而屠城。勿悔。

文明十五年癸卯春正月二十一日

諭示

とを寫さる。里正坊賈。莊客們。其仁言。所這諭書。看て。孰く雀躍せる。齊月。頼つ。恩と謝。俱。戰栗庫。うち。開。一座。十五間。多。の。五庫。あり。各。米。粟。三千。苞。あり。と。公。都。て。一。萬。五。千。苞。る。又。宝。藏。の。金。錢。あり。雜。貨。庫。の。酒。あり。餅。あり。乾。魚。あり。枚。擧。る。不。違。わ。る。當。下。信。乃。又。下。知。し。酒。の。尊。等。益。を。打。除。せ。餅。の。殘。燼。不。欠。し。衆。人。并。不。

その身の隊兵降参の城兵も酒まれ餅まれ好ま儘一七飲一もあつて其の身儘も
纏腰戦飯と披れて飢餓と繕ひけり。介程衆人の部と走りか。近御隣村を告知し馬を
牽せ車と推さるる件米錢と運寄るも或の燬と免れる城の衆馬と借用米と駝と
牽出まも然し山做米と錢を統半响する程送る運盡し登時信乃里正と
故老を誡めて約莫我賑給へ這里取聚會ひけり。總て這城隸られる村落も
莊園も坊賈とわく農戸と多。田圃戸口の多寡合して漏さる配分せ。若們倘一毫私
心あり異日我決して饒さ。あるは言示せ大地上拜伏して仰うけり。後任仁
慈の賜を誰が私仕らん。明日より君が生祠を村毎建戸々祭りて御恩と子孫傳へまらん
噫ふと。喜びめでと身暇とあつて。別を告て皆共侶うち連立り退りけり。

第九十五回 頭鑑を鼻く忠與凱旋ま 鼓盆の悼と定正過を知る

此の道節の莊介小文五現八大角們と共侶の隊兵六七十名を従へ。五十子の城小來ぬ
ければ信乃の隨便隊兵の城門を閉り迎入れて却城攻め其の顛末計策を圖當て一戰
全勝する。及倉庫と用て窮民を賑。其の趣并降参の城兵を饒。其の
まもその崖略を報。此道節の莊介們の四大士とて各々も听ひ。欽約莫舊君の復
讎言の酒家本人といふも軍功と論まれば大塚及その。今より一級と降らば
正の然し然し思ひやと口管不感激と己まれば莊介們的四大士も且感。且銘と共
稱賛する。且道節の信乃うち對ひ。定正敗北の爲体及河鯉佐太郎考
嗣が忠孝解目目前と權佐守如が自殺の事。又毛野の河鯉守如が知己の義を思ふの故に
辞して當城へ來り。他が遠慮の議論も箇様々と解示。我定正と趕ひ一析
才の盛と射落して裏缺を。送恨を和殿の巢穴と攻破して民の困乏を賑せ
た。実の愉快の。然し。堀と毀ち斬と埋めて火を滅。其の降参們を

敵りて武を赫しめざるも、緩かりて怨を起し、信乃の諫を以て、古井の仁人志士、残る
 勝殺を祛けて、化育を天地と等しくせむと、然るに、この戦ひ、多く人を殺せり、一個の仇は
 敵まん輿の兵を宣定の内、思ふるも、今、不仇を敷き漏せしと、怒を起して、城を毀ち降れり
 兵を敵らば、口は是暴と、約のその考、その義、我何処あるや、悍を以て、武を以て、暴を以て、勇を
 以て、近世楠正行、主、足利義詮、卿を敵き、走して、舊都、中、折佐、木道、園、を
 第一、燔るも、唐山、秦の蒙恬、の趙の降卒、四十萬を、宛めて、竟、詭死の田原、の當城、千、白
 士卒の如し、の忠も、勇も、俱、命を惜むが、與、命を喪ふの、其、中、の、鮮、目
 前、の、又、守、如、親、子、の、那、主、從、の、死、を、今、初、て、少、く、尾、碓、の、中、の、碎、け、る、玉、と、を、わ、ん、悼、む
 べ、信、れ、ば、那、賢、室、と、忠、臣、の、與、り、も、屏、を、毀、き、斬、り、埋、め、る、這、降、卒、の、成、り、て、人、の、命、を、お
 儘、し、て、我、と、も、の、勇、と、も、の、め、思、ひ、の、碎、言、る、を、後、の、備、を、な、れ、大、角、の、管、嘆
 唱、七、大、塚、主、の、宏、論、を、金、を、お、し、る、昔、保、元、の、猛、將、を、朝、主、の、武、勇、強、言、傳、稀、と、な、れ

どの、當、面、の、敵、と、射、て、相、逆、へ、敵、と、射、し、常、神、佛、と、尊、信、と、皇、威、を、惶、と、し、め、世、の
 良、將、と、稱、し、る、為、朝、尚、の、約、ひ、り、一、暴、雄、を、過、る、の、世、の、常、言、の、窮、鳥、懐、か、入、は
 と、の、獨、夫、も、れ、を、捉、ら、れ、何、を、降、参、の、城、兵、を、誅、を、死、繼、堀、を、毀、り、斬、り、埋、り、も、我、們、は
 這、里、と、立、去、り、六、日、も、又、修、復、せ、れ、音、領、必、か、つ、住、ん、然、ら、ず、勞、と、切、る、る、と、い、ふ、又、其、不
 小、文、吾、現、八、も、道、節、と、俱、諫、め、大、塚、犬、村、兩、兄、弟、の、既、も、理、盡、され、る、從、人、と、勿、論、を
 る、一、衛、大、阪、を、遠、慮、の、近、世、の、諸、城、も、加、勢、を、な、し、と、い、は、れ、凱、陣、を、急、に、今、今、
 速、く、退、く、と、全、勝、と、な、る、の、長、詮、議、の、益、無、く、似、る、快、く、凱、陣、を、な、し、異、口、同、音、く、寬、釋
 去、り、道、節、を、思、ひ、返、し、と、ち、微、笑、り、點、頭、に、有、理、と、衆、議、小、從、人、一、衛、大、阪、の、仇、を、敷、漏
 せ、し、も、焦、燥、し、心、を、不、休、く、を、要、る、言、を、費、し、る、士、の、爭、友、を、な、し、身、命、を、失、つ、と、い、ふ
 聖、教、今、我、ら、へ、來、る、も、亦、ゆ、る、死、幸、ひ、る、る、譬、大、阪、毛、野、の、如、く、未、生、の、時、も、兩、個、の、冤、家
 あり、并、し、その、面、を、認、り、と、い、ふ、果、し、と、我、仇、大、諸、侯、を、尤、近、く、死

易らばり。言裏より白井の郊外を刺す。刺すをゆるり。仇をわて。贖物へ今三四の義兄
 弟及落鮎們的幫助あり。且隊兵さへ多く。是等策ゆれば。既十二分の利運に至り。逃る寛
 家射れる。口その頭鎧を獲て。首級を獲る。亦命たたる。昨日大阪が我を相と
 意仲。風怒あり。謀計遂げ。遂ぎて。遂る。如く。般も果さず。その仇死を公のハ
 真の妙訣を成敗。前より定ふ。似ら。昔唐山晋陽。豫讓の仇。趙無恤を殺し。果さず。
 才仇の衣を刺す。竟刃を伏せ。隊讓の義士。さる。不害。我の隊讓。優べ。仇を射
 その盛を獲ち。則れ。首級を代え。高嶮の濱。小鼻。君の神。霊を慰。今。天。と。論。不。文。極。め
 と。卿言が。く。ち。不。誤。て。心。も。後。方。多。戰。粟。庫。と。又。と。剛。才。信。乃。寫。る。論。不。文。極。め
 面。三。番。讀。復。し。信。乃。對。以。和。殿。這。城。後。越。姓。名。と。留。る。る。意。その。文。極。め
 妙。我。の。才。及。び。左。方。の。筆。加。ん。も。魁。甲。の。合。領。より。蠟。墨。と。合。合。亦。白。辟。不
 寫。者。と。大家。俱。不。閱。る。か。

復讐言。雪死心。非忠。與。孝。耶。以。寡。克。衆。非。智。耶。拔。城。不。思。地。非。禮。耶。
 不。誅。降。卒。而。賑。民。非。仁。耶。為。憐。賢。良。自。及。不。毀。郭。非。義。耶。進。退
 以。一。日。非。信。耶。捐。功。不。利。己。非。悌。耶。吾。有。這。八。行。兄。弟。可。以。敵
 百萬。騎。也。誰。蔑。如。八。行。者。弒。君。奪。職。兩。管。領。先。世。後。嗣。其。幸。可
 知。犬。山。忠。與。追。書。と。寫。さ。け。大。家。これ。小。貞。を。以。て。大。塚。と。の。大。山。と。の。此。
 是。風。流。の。虛。文。不。あ。る。簡。約。し。て。言。分。明。勇。士。の。本。意。不。稱。う。と。俱。は。歎。唱。あ。ら。う。が。
 幾。十。個。の。隊。兵。さ。し。の。救。ひ。勇。を。燒。刀。の。稜。打。拍。と。共。侶。と。發。る。勝。鬨。の。一。霎。時。の。鳴。も
 已。ぶ。り。の。既。不。と。道。即。們。の。隊。兵。と。得。て。隊。伍。と。救。引。退。ん。と。せ。程。信。乃。那。外。道。二。が。
 躬。方。の。與。不。忠。あ。れ。い。と。賞。せん。と。尋。る。不。他。の。近。に。錢。財。を。奪。略。ん。と。思。ひ。け。ん。漫。深。入。
 あ。ら。う。煙。不。包。れて。死。さ。け。る。その。亡。骸。と。降。卒。們。が。稍。又。出。し。七。倍。々。と。報。る。と。信。乃。ら。う。ち
 听。く。憶。も。嗟。嘆。不。堪。む。那。外。道。二。奴。隸。也。忠。誠。義。烈。の。徒。さ。ね。と。只。その。命。を。惜。む。が

與不忽地敵の間者とわろ城と階せし眞罰觀面の賞禄を受はと身の兵火の
 燔れよる難小臨て心術反覆敵の幫助の終の恁をあらはれそ件の支の趣道
 節們の解示其餘の四大士も那志報の速るも嘆けの愆而信乃道節即其小文吾現八
 大角の俱小數十個の隊兵を從へて高嶮と投て退く程の五十子の城下より那嶮邊に至
 るまでその通路の坊賈莊客們の信乃が賑給の徳を稱へて俱小路傍の迎へ各々草食
 壺漿と薦めと勧びと演るの信乃の道節もその慰めて東西を受は是より
 先小道節即五十子の城の末なる折隊兵十名許り分付て躬方の戦死あると尋ね及那
 谷山の頭小生拘措たる仁田山晋五の又敵の首級と梟くは準備せよと遣ければ
 這時件の隊兵們の共小所役と做一果て高嶮の濱の存の既中と道節即們的件の濱
 邊退は先晋五と誅せんとも面則小幸出さる晋五の御高小道節即射らま
 膚小る折谷山の麓の樹幹小切結着られて才小一個の雜兵の守られて久小在り

方絶の濱小幸寄せられて自及下小位むといふ矢傷の疼楚は勝りて頭を低よ
 のを登時道節即の発見を放りて仁田山晋五小立向ひ佐と疾視て汝の御高小戸田河原を
 丁田町進の加勢とあて寃屋の罪人額之藏們を追捕えとある折我並日第の舊僕なる
 燒雪與四郎が兩個の兒子十條カ二郎尺八が戦疲れと轍を捕りし素よりのその身の職
 分めて主の與のせよまれも虚名と求め采利を掃りカ二尺八が首級とめて額藏信乃
 と偽唱て鼻首とて主と給兒の勸賞小重用せられて大石の家の家宰と做登り小
 人の天を怕れ奸計と罪と免る所あらんや那額藏の我我兄弟這る大川莊小大
 塚信乃もあ小在り汝が緝捕する人なるは汝の所奸曲るは這大川は趕敷まで遂小我
 前小傷られん則造化の配劑也自業自得といふの先我の自頭敷を落て十條
 カ二尺八が與不忽と雲んぞ觀念せよと責罵ま晋五の魂身小肩を連り小戦慄は在
 下実小罪と知れり命を饒ませのひかといふせも果ぞ道節が抜刃を刃の牙小敷られて滾



老心 七
 晋五之 誅
 七犬士 俱
 小 帰
 帆 毛



道節

扇谷定正

玄九五

十七



信乃

大角

莊介

小文吾

八代傳九郎卷二

○ 芳澤堂藏

六仁田山並五首八托地と落小けり。その傳不看る信乃莊介小文吾も現八も六松歴小ける
 戸田河原の危窮とあふ思ひ出でせ元井山境の夢の迹借平が音立目か。曳を置小即の
 往方之心不かる潮曇り濱邊小立る松小吹く風の便りも絶果て垂存懐ひをいへる品出踰
 去侍小友衛。當時小遇ぬ大角も善悪之心報任とそ人と思へ身も形多く慰難て愀然
 たる。中道公即ハ徐小又と拭ひ敘めて御京那隊兵が樹を伐りて造り立る島首言室小
 敵の大將扇谷定正の盛と第一番小島さう次小仁田山並五首級并敵を捕る仇の從
 類地上織平末廣仁本六二階堂高四郎三浦三佐吉郎們の侍の頭顯二十
 餘級定正と首とそその姓名の知れる牌小寫し推立て征伐の終りか即便這頭
 浦人の長めたる二名招れよと示さう。我ハ先亡煉馬殿の殘黨也。大山道節一喚
 做まの之ハ復讐の戦ハ大利を敵を捕る首二十餘級方僅梟て這里小在る恨
 ひく定正の敵を漏らされ射てその屍を獲る小り。權且首級小代とぞ若門浦人

進代り小守りて偷見ゆる本傳れ。明日夙め人ありて。這里盛合る。とあふ。若門浦人
 与ねが。その折まぞ悔る。と町寧小分付れ。浦人們ハ駭怕れて沙小額と穿埋め。異議
 言承ま。然ハ凱陣まけれ。澳の。看且ま。船の這頭小あふ。此米浦の
 澳小えまけり。あれよう道節ハ餘の五夫士と共侶隊兵們をいそが立て浦曲小走ると七
 八町及ぶ程。澳よりもをぞ。躬て船小漕寄せけり。登時陸多隊兵們ハ始のぞ相別れて二
 三艘の船さうち乗り。道節并小餘の五夫士。毛野有種們と同船を。其の勢のふもあふ。
 道節ハ先有種。躬方の戦殺金瘡兒の。誰何と尋問小有種。彼て然ハ。御向小
 命せられ。雜兵們。素ね浦邊小打ちて來ぬ。躬方の金瘡兒ハ八名。深癩多れ。も。躬
 所小あ。戦殺一人も。隨便金瘡兒們。準備の其と飲せ瘡を果。勳り。昨宵在
 下さうち乘來ぬ。快船小扶棄せ。看病奴一名。傳て穗北。還し。を報。道節即點頭。
 そ。計ひ。船ハ高嶮の浦小と約束と。那里小あふ。這里寄せ。甚

りんや大阪主の文あり武あり。その學術の廣博多。陰陽卜筮説相までよせせよと云ふ。真
 實の軍師の才之則是禽中の亦鳥鳳毛裡の麒麟といふもの。且大山の剛毅ありて。決断の
 速き。大川の行婦塚大飼の芳流関を才武武多の。又大田八能を頭は。已ことと云
 ぎて。做と云ふ。必是妙處あり。仍徳の角能石濱の窮厄是之。又大村の謹慎老実言
 寡くして。仍ひ小取篤から。實は是君子の入り。人心同トク。猶人面トク。といふも。眼
 横つる鼻の直に。孰も亦異るべ。あれを統る。八竹の徳各々一個を。ゆるふ。庶に我義兄
 弟不在のといふ。然れれば。今也。孰を長と。孰を短と。是れ論まれば。釋迦の説經孔子の
 語道相似れども。あまの太く。答らうか。苦に隨ふ。といふ。大家感服して。その美定私論
 あり。這面才子微り。妙批妙評。听易く。身の程々の玉恥。仍状々。相慎む。優
 慮あり。トは。大與一。亦復餘談。及びけり。姑く。て。莊介の道節。は。情語。く。大阪主の遠
 慮。は。就。胸。安。く。ぬ。り。を。い。落。點。生。が。陸。小。登。り。て。口。草。中。で。敵。と。戦。ひ。折。名。告。楨。で。戦。ひ

た。その。人。は。是。御。士。の。女。婿。我。們。と。同。か。ら。莊。園。居。宅。と。敵。方。不。知。の。あり。と。云。ふ。が。あ。ら。ん
 中。救。後。禍。と。運。ま。似。る。の。を。言。母。の。あ。ら。ん。と。い。ふ。道。節。眉。を。擡。り。め。て。そ。の。心。つ。ら。い。快
 与。之。と。吸。ぶ。げ。れ。と。答。て。後。方。と。云。ふ。毛。野。の。聰。も。側。聞。き。道。節。を。推。林。の。大。山。主。の
 あり。る。落。點。生。の。向。ふ。も。及。ぶ。べ。し。の。美。酒。家。心。つ。て。那。人。の。母。が。敵。向。ひ。て。名。告
 志。する。一。口。舊。君。豊。嶋。殿。の。與。然。と。雲。る。と。吸。く。る。の。を。い。ふ。必。し。心。安。く。は。と。報。す。莊
 介。道。節。の。共。侶。の。ち。笑。て。何。れ。を。脱。落。る。機。轉。か。て。感。た。る。折。り。落。點。有。種。別
 船。を。炊。く。戰。飯。と。酒。餚。を。処。陝。を。安。排。て。七。大。士。不。薦。れ。別。船。を。隊。兵。們。の。漏。り。の
 る。飲。食。を。送。り。け。の。勝。軍。の。祝。壽。を。做。し。程。船。の。羽。田。澳。に。來。り。け。是。より。七。大
 士。有。種。の。圍。坐。如。く。は。漏。り。の。毛。野。の。知。り。の。は。大。法。師。の。甲。斐。を
 考。り。結。城。不。赴。く。ゆ。え。縁。由。又。蛭。崎。十。郎。照。文。の。安。房。へ。還。り。し。を。由。解。示。す。と
 中。小。文。吾。と。其。介。那。石。龜。屋。次。圖。太。及。卿。子。が。云。云。と。い。ふ。て。大。阪。主。の。妙。方。便

御馬前也。屍と曝さんと思ひどりの空を危加躬と極ひまうり六追鬼敵と挂
 與高駿の東盡処多細小川を前して止する士卒十餘名俱必死を極め敵の左右
 る敷も鬼らも相睨て存程敵の士卒の勢あるを道節并毛野小文吾共介と
 後にも聚合ひる。毛野の道節君と相敷の計較と知を迭その名を写す所の
 去の折初て對面口誼具す。徳れ那風聞の實事まを昨日湯嶋の密談と道節
 が偷聞を君と犯まのり。又同もて分明を以て思ひ以縁連を誅せんと毛野談討
 多ふされ上様の死に於て只計策密を仇は偷聞せられる。守如が疎忽の罪の稟
 去解をのまれば臣も只戦殺の覚期の外に毛野の同志の勇士們と備道節即を
 共と諫め守如が忠誠と相憐む工夫する。道節も亦思ひかけ川を隔て對陣を
 登時臣休難屢敵を喚りて戦ひ討め。他們的鋒を交えと欲せし只同答不及
 のとせ且道節即仁田山平五と虜あせ折不獲まるとの馬と放ちて還す。然勢ひか
 るれば是非及び立別れて伴の馬より跨り君の死後と昔亦ひまうり。當城へ来る折則
 親の亡骸と路の傍る道場を預置て御安不を伺ひ。御病臥のより咄えり。御痊
 可をなまらえ。與不遠侍候ひて。昨宵を暗ゆい。敵の進退心不推れ未明馬より跨り
 五十子へ赴く程先高駿へ馬を找めて。濱邊を看早い。斬梟れる。躬方の首二十餘
 級あり。その中我君の死盛もたえれば最惶ゆ。合卸て。を携て五十子の城の光景を
 由ててくる。敵の頭人犬塚信乃。一日も在城せず。倉庫をうち開て。飽まふ民を施す。その
 義を白壁に寫着て。姓名を留め。次道節即追書もあ。その文の箇様々々。任々
 ゆひ死す。一字も忘れず。誦ると一遍誦果て。又稟を。任れば既小五十子の大城あり
 敵一人もあ。離散せ。躬方の士卒のか。来るもの二三百名。四門を成り。ひひ死す。まか加勢
 士卒と遣されて。後の非常と敬言め。い。命惜も。當城小免れ。ま。あ
 ち。上様刃伏の。大阪毛野。道節の。又黨る。と思召。口一筋の赤心。れ。あ

八代傳九卷二
 御馬前也。屍と曝さんと思ひどりの空を危加躬と極ひまうり六追鬼敵と挂
 與高駿の東盡処多細小川を前して止する士卒十餘名俱必死を極め敵の左右
 る敷も鬼らも相睨て存程敵の士卒の勢あるを道節并毛野小文吾共介と
 後にも聚合ひる。毛野の道節君と相敷の計較と知を迭その名を写す所の
 去の折初て對面口誼具す。徳れ那風聞の實事まを昨日湯嶋の密談と道節
 が偷聞を君と犯まのり。又同もて分明を以て思ひ以縁連を誅せんと毛野談討
 多ふされ上様の死に於て只計策密を仇は偷聞せられる。守如が疎忽の罪の稟
 去解をのまれば臣も只戦殺の覚期の外に毛野の同志の勇士們と備道節即を
 共と諫め守如が忠誠と相憐む工夫する。道節も亦思ひかけ川を隔て對陣を
 登時臣休難屢敵を喚りて戦ひ討め。他們的鋒を交えと欲せし只同答不及
 のとせ且道節即仁田山平五と虜あせ折不獲まるとの馬と放ちて還す。然勢ひか
 るれば是非及び立別れて伴の馬より跨り君の死後と昔亦ひまうり。當城へ来る折則
 親の亡骸と路の傍る道場を預置て御安不を伺ひ。御病臥のより咄えり。御痊
 可をなまらえ。與不遠侍候ひて。昨宵を暗ゆい。敵の進退心不推れ未明馬より跨り
 五十子へ赴く程先高駿へ馬を找めて。濱邊を看早い。斬梟れる。躬方の首二十餘
 級あり。その中我君の死盛もたえれば最惶ゆ。合卸て。を携て五十子の城の光景を
 由ててくる。敵の頭人犬塚信乃。一日も在城せず。倉庫をうち開て。飽まふ民を施す。その
 義を白壁に寫着て。姓名を留め。次道節即追書もあ。その文の箇様々々。任々
 ゆひ死す。一字も忘れず。誦ると一遍誦果て。又稟を。任れば既小五十子の大城あり
 敵一人もあ。離散せ。躬方の士卒のか。来るもの二三百名。四門を成り。ひひ死す。まか加勢
 士卒と遣されて。後の非常と敬言め。い。命惜も。當城小免れ。ま。あ
 ち。上様刃伏の。大阪毛野。道節の。又黨る。と思召。口一筋の赤心。れ。あ

船中枉死の虚実を糾せしむる夏都て奇異ありて扇魔の火驗灼然する凡疑の
 事ゆれ専作只顧駭嘆とて隨便媪内と船中枯首と斬首との時既小島の暮暮け
 事作們八件の首級を高懸の濱邊へりて然而斬鼻を躬方首級威令卸
 事その頭髪毎一隻の小石と結着て情々地海投沈め更又媪内と船中兩箇の首
 級を鼻首臺に雙鼻け他們が背に記される罪惡の趣と牌に寫着け建置て大家五十
 子の城還りけ次の朝より是とるの或訝り或冷笑て惡評のく罵言を何人又
 ありけん建る牌一枚の短冊と糊添て又落頰と寫し其詞の
 あく醜即も美男あるん首の入れ替とあけの例の人は癖多し夏扇谷の墨吏們の兒
 戲の拙策も成るといふは折媪内船中罪惡のせし頭れ亦是造化の默契終畢竟
 二兇鼻首せむ後話説甚麼をそ次の巻小解分るを聽絲か

南總里見八犬傳第九輯卷之二終

南總里見八犬傳第九輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第九十回

御士義小仗大敵と俟つ

却説元栗專作の當晩野兵を従へて五十子の城のあつて城頭人根角谷中麗
 簾の宿所へ赴き強人媪内船中が首をもて躬方の首級と鼻替くる夏の趣と報
 る折又那美田取蘭二專作が反命と心のきく思ひ谷中二が宿所來り更
 爾るまを等て在り當下專作八件の兩個上職們の情語を御士仰示され此
 濱の奇談の卑職堅定とひひその言甚分明と扇魔の火驗疑ふは因
 那媪内と船中枯首と研りて高懸へりて躬方の斬首二十餘級を令卸鼻
 替て却那強人夫婦の背に記される罪惡と更又牌に騰録し舊の牌と建替る事

粟と飽を民分令とて。道節毛野の隊と二隊を以て。往方と知る退折の
高畷を仁田山晋五と誅戮せしめ。餘城方の首干餘級を皆濱表(梟)れとの
支詳をせしめ。その後又來ぬもの鮮目(鮮)の自殺の。河鯉守如親子の。這那を
く報し。憲重を色と失ひて。衛那那里の遠烟と民の失火と思ひ。加勢遲滞及び
あまかまも不覚を五子子の敵退くも。那里を成る士卒する。後の鮮子料が。多
城番の隊を遣へ。と下知を程。又五子子より來ぬもの。五子子の城内に殘兵既
立る。來て。偲(四)門を成る。二三百名ありとの。偲れ。その。亦復後れ。と。面目
け。の。故。憲重の病着あり。と。偽唱。て。日を経。ま。出仕。を。次の。目。忍。固。使。者。を。
定正の恙を祝。且。鮮目。前の。悼。を。演。て。悄。々。地。定正。左。右。侍。臣。們。東。西。を。餽。
補助。と。求。め。て。奇。異。を。ゆ。り。か。今。戰。粟。の。催。促。を。倒。子。欺。ひ。て。往。日。の。行。心。を。補。
よ。め。る。れ。が。と。求。め。ら。れ。る。數。も。も。多。く。戰。粟。を。運。送。し。て。五。子。子。の。城。へ。入。れ。け。り。然。る。に。道

回の怠慢の獨憲重の。石濱赤塚の城。と。藻。塩。火。多。め。と。相。錯。て。援。無。
出。し。や。と。後。悔。の。折。五。子。子。の。戰。粟。の。徵。あり。と。異。議。及。び。を。察。し。て。を。備。け。て。
け。是。中。の。谷。中。二。門。の。末。の。二。匠。と。多。く。取。合。て。城。の。修。復。と。急。が。る。城。隸。の。民。每。
敵。より。米。錢。と。受。え。と。不。耐。く。思。ひ。飽。き。て。課。役。を。被。り。責。使。と。苛。刻。
更。の。臨。時。の。租。税。と。命。と。合。債。も。亦。多。し。の。故。小。莊。客。們。の。信。乃。が。仁。心。を。
追。慕。し。と。あ。る。谷。中。二。割。薄。き。最。恨。く。思。へ。却。あ。る。夜。ま。
く。日。を。驅。使。れ。て。修。復。の。役。を。果。し。け。り。介。程。は。定。正。二。月。下。旬。不。忍。圖。り。五。子。子。歸。
城。し。て。谷。中。二。取。蘭。二。の。次。々。も。有。司。の。功。を。賞。め。祿。を。増。て。逃。れ。め。と。賤。し。ま。る。又。
犬。山。道。節。們。の。隱。宅。を。知。る。の。あ。つ。悄。々。地。訴。す。と。百。貫。文。の。賞。錢。を。掛。り。那。
這。徇。示。せ。か。も。信。乃。が。德。と。首。を。公。民。に。官。府。を。假。り。と。已。が。利。を。欲。す。殘。忍。
を。賴。の。破。落。戸。も。道。節。們。が。在。る。地。方。と。實。に。知。る。り。ま。り。け。ん。久。く。る。ま。と。云。と。告。

許すのりらけり。倭て又定正の河鯉佐太郎孝嗣が功を思ひ才の急ぎて親の喪居
ることを許さざれば幾日あつて召出して近習の倅として使はる。孝嗣も亦思ひ感して日
夜の勤勞致ふところ。最正首の仕下り。初縁連と同意入ける。奸黨の秋。縁連の
敷かれ。他が親守如く鮮目前と誘稟して大阪毛野のものを借り。うらと。那密計を
歩知りて。快を思ひ。謀合言を設けて折を觸る。孝嗣と誘言する。その言
り。定正の歩流して。二重時。横念せり。一。謀。諸既小度累りて。那衆口金を
鏢し。市子三虎を致はると。唐人の壁諭漏れ。定正を見疑ひて。孝嗣と心む
あろあり。程多外様退けて。罷辱を地と易ふ。孝嗣も亦その意と猜し。七。怕れ
病病の假托して。久しく仕せざり。奸黨のうらと。只管主と哄誘を説。奸已とせり
けり。あ。故。定正。孝嗣。罪の。虚実。有。司。命。と。召。問。せ。ざ。り。思。ひ。の。う。ら。と。比。危。穴。躬。を
救ひ。軍功。あ。り。今。證。据。も。有。罪。と。糾。し。情。を。沙。汰。せ。り。あ。り。思。ひ。難。い。

御前大山道。即ち前响を。腫る。天。思。ひ。愈。々。痛。痛。辱。辱。發。り。堪。り。不。忍。日。の
ヨ。ろ。り。け。れ。し。の。瘡。癩。不。拘。り。ら。ひ。孝。嗣。さ。ぎ。の。虚。実。を。糾。ま。し。遣。り。り。休。題。再。説。道
公。即。信。乃。莊。介。小。文。五。現。大。角。大。阪。毛。野。を。伴。ひ。有。種。并。數。十。個。隊。兵。と。共。侶。流。れ
從。ひ。船。と。漕。り。て。二。十。二。日。の。曉。天。平。住。河。の。交。り。來。り。し。威。馬。頭。上。り。陸。上。り。七。穂。北。に。投。て
急。ぎ。な。り。然。り。又。落。船。有。種。が。岳。父。さ。り。け。水。垣。殘。三。夏。の。御。宗。猛。可。有。種。が。土。兵。を
驅。催。し。道。節。が。大。美。我。の。帮。助。船。と。柴。浦。へ。寄。り。折。る。夏。の。趣。を。告。げ。倅。倅。ま。り。の。言
れ。只。山。崖。略。と。信。々。と。具。して。出。て。來。り。し。心。の。ま。き。思。ひ。の。推。禁。ん。は。な。り。重。戸。と。俱。其。頭
の。不。成。る。不。成。不。成。一。日。と。夫。子。消。せ。り。あ。り。宵。一。個。の。雜。兵。が。躬。方。の。刀。瘡。兒。七。八。名。を。快
船。も。ち。乗。て。漕。り。か。つ。る。來。り。し。越。し。初。道。節。が。勝。軍。の。夏。の。顛。末。大。阪。毛。野。が。復。讐。言。ひ
さ。具。も。歩。知。り。て。その。飲。み。ぶ。も。あ。り。刀。瘡。兒。の。茶。と。與。へ。更。小。使。ま。り。乘。り。各。宿。所。不
送。遣。し。却。勝。軍。を。賀。び。の。酒。肉。を。惜。ま。地。准。備。し。道。節。們。を。程。子。七。大。士。も。有。種。們。を。四

八十九卷之三



びんきん あり
 百金の餽
 遺道郎土
 つるめ おく
 兵小 酬ふ

八十九卷之三

八十九卷之三

重賞を受へば。恩賞の趣。在下異日。指示え。の美を許さ。せり。と推辞。ゆ。又有種。も。道
 節。より。對して。目。今。家。翁。の。言。せ。ざ。と。最。憚。る。言。さ。諸。君。子。の。一。所。不。住。の。客。遊。を。と。ま。ま
 れ。路。費。は。餘。財。あり。とも。人。不。施。を。折。さ。あ。む。と。の。道。節。即。實。果。の。道。理。の。宜。し。然。る。と。さ。ま
 人。各。志。あり。贈。り。を。受。り。れ。去。川。も。葉。入。湖。も。沈。沈。功。あり。の。賞。せ。ば。何。を。と。復。人。を
 使。ん。古。の。義。士。勇。夫。の。加。頸。断。金。の。交。り。も。今。客。遊。の。折。と。路。費。の。少。し。と。い。ふ。と。論。さ。る
 聲。の。憶。も。高。り。も。ま。焦。燥。り。と。信。乃。大。角。們。の。備。より。推。察。め。る。夏。仍。と。有。種。の。う。ち。對。し。て
 我。們。も。亦。大。山。と。同。意。さ。る。正。勿。論。之。願。ふ。枉。て。受。め。推。辞。む。要。さ。る。と。さ。下。と。論。さ。現。八。文
 母。も。毛。野。井。介。も。共。侶。の。詞。を。加。て。果。る。は。義。侠。小。服。も。夏。仍。有。種。且。感。一。且。謝。と。考。へ
 ん。力。及。ま。他。們。も。信。ひ。ん。と。心。て。金。と。受。り。登。時。信。乃。と。道。節。即。入。夏。仍。ま。ち。對。し。て。我。們
 這。里。は。還。留。せ。ば。告。訴。さ。る。の。あ。ら。と。五。十。子。へ。程。遠。く。ま。それ。り。も。る。不。近。く。忍。留。も。敵
 城。全。竟。小。那。里。実。地。を。せん。先。度。の。恥。を。雪。ん。と。大。軍。推。寄。來。る。と。あ。ら。何。を。と。防。ぐ。忍。死

その我々の覚期の。之。怕。れ。の。あ。ら。ね。ば。一。家。と。連。係。あ。る。二。十。餘。年。の。経。營。に。た。ま。さ。る。の
 ん。惜。々。ま。ま。傳。へ。我。們。七。名。の。毎。々。結。城。に。赴。じ。四。月。の。好。事。と。せ。ん。と。欲。は。る。の。故。の。箇。様
 箇。様。任。意。の。あ。ら。と。大。法。師。の。甲。斐。を。立。去。り。獨。結。城。小。針。江。で。里。見。殿。の。死。與。先。亡
 嘉。吉。の。諸。靈。魂。を。吊。ん。と。い。れ。よ。と。詳。し。解。示。し。て。傳。約。束。あ。ら。と。我。們。の。那。地。に
 あり。て。大。法。師。の。旅。院。と。尋。ね。結。城。の。城。下。小。歇。店。を。求。り。て。法。會。の。折。を。め。ら。と。公。利。を
 連。係。さ。さ。と。我。們。も。後。安。く。な。べ。因。て。別。を。止。ま。さ。と。西。三。日。の。旅。さ。と。今。より。首。途。を。は。れ
 と。い。ふ。夏。仍。と。い。ふ。と。亦。餘。美。さ。ら。と。結。城。氏。朝。と。城。氏。方。を。九。津。宮。の。山。内。管。領
 越。の。方。人。へ。然。ら。結。城。在。る。と。も。後。難。あ。ら。と。決。め。ら。と。且。我。御。の。他。人。を。難。を。用。費。の
 始。より。皆。腹。心。の。り。の。と。い。れ。這。里。は。潜。び。て。い。ま。と。決。し。て。敵。不。聞。あ。ら。と。縦。外。より。洩
 せ。と。大。軍。推。寄。來。る。折。諸。君。子。這。里。在。る。と。我。們。必。免。さ。と。願。の。四。月。の。時
 候。ま。も。長。閑。は。杖。と。駐。り。あ。ら。と。數。る。ね。と。在。下。の。結。城。龜。城。の。殘。黨。人。諸。君。子。と。共。侶。の

多岐の世智介と小オ二件の機密を耳に示し七鯉魚鯉鯉野菜を担賣る小經
 紀見の件三機を打粉して是より日毎五十子と心固遣り城の動静を撈らせり是より
 那根角谷中二と美田馭蘭二が計ひて躬方の首級の鼻替の媪内船虫を鼻首あう古又
 管領定正の忍固の城に在る道節を射られ管前响の故多折と頭痛堪むと政曹療す自
 屬を過ぎ又道節信乃毛野們が在処を索ねよと那這下知せれる又五十子の城修復の
 漸々少く七士大士們の冷笑ひて多らん其速攻敷る勢ひあはるれも猶我々が旅
 亭に入られ後交料の只小心を去るも遠謀の深く潜る徐光明の過
 る寺け介程の御高道節信乃も從ひて俱に舊怨を雪ゆる這穗北の莊客們今番
 道節が令へる二百金を配分せられて義の與財を惜ま豪傑の心操を又今わら感
 激さる傷疾る兵毎別又有種心屬るやめて費用の匱かれば且
 勇て天晴大敵をも亦危くは戦ひて洪恩高義を報へんと各鐵磨に枕

一個の醫師あり他御微もとせざりて道節の復讐の從卒の這地方より知る
 の絶てたる程の春もと名光開馨の三月の折る五十子の風聲亦復して
 定正主の日は忍固より帰城あり北條氏と和議破れ山内管領家頭定主と合體せられて
 長尾景春の和順せられ每人多言れ持資親子を拒と稟とる計畧を用る事
 大の故持資の病着ありと云ふ今も相損る糟合館屏居し稍久く在
 甘又那河鯉孝嗣も説者の舌の剣と怕れて亦亦病病の假托けて忍固の城を入の
 心の一致せ城内日毎多言れ大山主們を穿徹せり多言れと噂も多言る
 たり信れ後安房へと小オが報へ七士商議せり大大徳の石木とて結城へと赴
 まよる傳れ既ふと越六十餘日と麻生も亦の月の法會あり我々那地へ赴て對面せよ
 勿論されも那大敵の故一番も音耗せ実結城に在る推量も多言る

知りせむと尋思し又吸拭使来り大七隻より大少とひいをもい甲斐いん庵
 主の終日飲ま吐ま念佛あり日と消しぬを共侶断食して凡夫の堪んよのるればや
 ひ絶て昨夜の歌店なるの臥し更尋思とせ左も右も甲斐多しんを這里旅宿を
 思ふより快立かつての趣を刀柄小報まわせて後の指揮不儘せんと思ひしければ朝
 歌店と立出路次をたて剛才帰着侍りぬと一五十の長談とらちく夏仍有種いん朝
 沈吟する當下信乃の那這と自餘の天士うち對ひ各々何と思ひぬ世智介男が菴主の思
 相るをいひさうととも浮世の外締むる草の菴の故ぬを、大大徳さんと思ひ羊の過ま
 と向い莊介及小文吾道節も俱小點頭て然之思せられぬといふ疑ひぬれぬ大七隻の使
 をいひ知せぬ名の中世智介連出来りといふ譽れ現八ち會笑て伴の菴主と吸ひて絶
 忘とせられぬの壁返と大村主と我訪ひ相似し是は就ても雜衣の刀自を最惜しけれ
 とのいふ後方とせられぬ大角憶も嘆息して世在俗の老翁老涙が朝々暮々小家廟朝

以て勉て看經を身折し雷門の共新の燃退去の鐘の飯の焦んとせぬ或は觀者けるをの喋
 喋とく炊釜を罵るも回れぬ或は猫兒の鮮介と偷を或は慈鳥の柿昔言を破るも耳を聴し
 着て慌しく人を喚ぶ念佛者流の比自是も我一念と擲て心の弥陀を求めぬ何より成佛
 其心と真俗二道不掛ても口念佛者と唱まひ必利益ありと思ひ皆是愚痴の迷ひもそと比與
 るふあねども、大大徳の先亡の菩提の與石木と去て既結城小到りてその投を所菩提の
 外を縦庵訪ふ入あて終日喚て驚きも心視聴の回あひ絶て成るる所語維摩は
 黙然んども尊一とと一の管稱賛ありて大家有理と疑ひ解けて毛野も大馬入り
 けり姑且と信乃がいさう大徳の逆示さるひ法會の往る嘉吉元年辛酉の夏肆月十六
 日結城落城の已心辰るへ三月も既不盡んとするは法會の本日前四日我其那地小赴
 死て伴の庵主と相定めぬ不便なく後悔ありといふ大家點頭てその談執も同意と来
 月十二三の時候に皆共侶の首途せんとその日と遅いとせぬ程は主人残三夏仍の一路

まくほろ情願推辞々信乃們の既ふち多を許と一路八名と定め六月夏約
 斜るま欽びて逆旅の準備をせりけり。左右も程春の過はて夏の聲もる隨お
 苗頃いそ門田の畔は開く楊楹花は推乃る。早晚延る自然諸の蔓より長は日の涯り
 朝のよも忘れも族々あり杜鶴青山遠く鳴耳。肆月初の九日七士們の明日未
 明小齊一當處を起去りて多結城へ赴んと夏仍も憊々と告て準備をせふふの
 日下晡の左側より夏仍暴小病發りてのめはのいも脚も動まそ瘡ま中風も才
 氣息の暢おのち臥る俛人事も知て將水も吐お下らぬ重小驚はらち歎はく枕
 方不佳り後方子侍と介抱小暇もあぶ有種も是が與小醫師を招に驗者と請て周
 公ら嘔吐ふ似れば一家見る奴婢までも甲乙とる奔走もあ夜に睡るものも七六
 士們がしつて俱小驚馬に憂るもの憊る折るゆり捨て出てもんいさか忠送代小病牀小
 赴はて同慰め心ももる又日と過り肆月十三日あり然信乃道小即們的焦燥て自餘の

大士と商量もる。時得りてあて失ひ日あり。主人の病者小構つらて今米の法會日赴
 る。後悔其首不達々い之七小別を告て明日必出去らん。却有種と招て告て信乃道
 小即のひける。大法師の法會の。主の公の望小儘と同伴の約束ありといへも争何せん天不
 不測の風雨あり人小不豫の病患あり。公の病瘡一朝瘡のあぶらもあふそ今ゆ小病捨
 別を告る小本意もる。我門醫師ありこれ。這里小在りても亦益る。明日未明より啓
 去て連る小路夜と急かむ。必那期小遇くかん。のを許容あれ。とられて有種困りた。病
 頭と傾け沈吟して示教の趣至極也。親が願ひ今番の同伴を。期及びて憶りなく。病
 者小より果はる。ぬ。ま本立息もいん。在下親の名代小立まきり思へも。あ。形大病
 身をも。それさあ。不儘せ。明日首途を去る。お伴當とまわ。せん馬を。轎を。乗ら
 せ。多。其小障りのひつ。とい。現。大角。小文。吾。井。介。毛。野。と。俱。月。来。止。宿。の。欽。び。町。寧。の
 演別を告て目今。ま。立。息。小。撰。られ。る。伴。當。と。願。い。か。大。塚。犬。山。も。憊。る。べ。我。們。の。身。を

浮萍の旅より旅かたぬりて東西南北せむるを。皆不自由熟するのんぞ救ふ伴當あら。
 及て路次の煩ひあるの終放ち遣られんとそを倒し幸ひされと推辞は信乃と道に即ち又有
 種ありち對ひて諸兄弟の所是我們が真面目那外物を飾るに要る。扇谷の寄隊その
 沙汰絶て後安んぬれども今番の特更微行に這七人老事足れり。いづち措かぬと推
 辞と有種強かぞ然や今宵送別の盃とまらむを。大大徳へ布施物の一菓衣と寄せむ
 らぬのまをり許さぬとを大士們も不聞き好意を恃るを。王の病厄あり
 けり。折るに折るに。維盃と賜ふも何樂く受り。酒は盃酒も亦益。且、大法師の石
 未也。姑且縁の折るも一錢の外受ぬる。今番の法會。他の施主を仰ぐとそを。
 東西兩側りも亦益。願ふ所の公箱の酸酒茶肴病由漸る。よく孝養を盡しぬ。
 され優る功德あり。と送代り語を續けて。心由對の理義潔白又いへる。あつて。有
 種に感涙の找むと。覺て沈吟し。を。な。る。を。意。不。後。い。け。る。あ。れ。も。夕。饑。い。毎。も。心。用。い。

聊中酒の款待あり。車戸も奥より出て来て。父夏仍が大病也。法會日詰の情願を。果さ
 便さ。と云と。繰返も。倭文の。芋。環。繞。一。繞。曲。る。浮。る。不。平。折。り。け。れ。大。士。們。の。程。な。く。辞
 多。飲。び。演。り。別。を。生。る。の。と。肚。裏。更。夏。仍。俱。く。る。路。を。像。の。と。中。風。暴。お。發。り。る。が
 俱の難義の旅宿と。甲。お。て。法。會。不。後。る。と。あ。ん。と。折。る。切。て。の。幸。ひ。り。と。思。ひ
 たり。既。不。七。夕。饑。果。も。有。種。の。不。侍。り。と。只。管。別。と。惜。ま。け。り。悠。而。そ。の。詰。朝。有。種。の。七。大。士。を
 御。盡。処。も。送。り。と。豫。の。思。ひ。さ。け。の。曉。天。より。七。夏。仍。の。病。着。危。六。窮。及。び。身。身。道。城
 離。る。と。七。大。士。も。亦。の。機。を。猜。し。て。重。て。別。を。告。る。不。及。と。遠。く。出。て。あ。れ。を。世。智。介
 と。小。才。二。の。喘。を。趕。て。東。て。路。三。十。町。送。り。告。別。と。還。る。折。東。あ。り。て。在。曉。の。月。の。遠。山。の。峽。の
 入りけり。畢竟七個の大士們が。結城の法會。と。赴。て。後。の。話。説。甚。麼。を。分。教。あり。狗。見。佛
 性。趙。州。曾。識。相。接。犬。牙。先。獨。突。然。ま。る。く。露。路。の。め。み。生。立。り。ひ。と。ほ。ま。づ。の。う。ら。ぬ
 た。で。の。花。這。詞。詠。の。意。を。知。き。欲。せ。下。の。回。より。後。々。を。解。分。る。と。聽。ね。か。

第九十七回 良將征せざし地と二總小廣くも 兇賊心むくく自積惡を訴ふ

あまきのあひらさきとてふこととちがのたけみまのりよきあをんぬちうりあねあせせめとま
話表安房上総二州の守里見治部大輔源義實朝臣に往る長祿二年の秋伏姫富山の
自殺の折大々々奇瑞あり且金碗大輔孝徳入道、大坊に當時八方へ飛去る那八箇の
明玉の往方といふを索んとて忽地行脚の錫を鳴りて飄然とて辭去りより他が安危も
心のなる然るも亦賢を招けしと徴ん與まとも蜚崎十一郎昭文をその投き方遣せし精
久く信もたの比よりと義実主の隱遁の情願あり諸臣の諫めを用ひぬて有一日杉倉
木留目介氏元堀内藏人貞好と首とと有功の老母を送もる召聚合てみづ論し
ふちう汝連日者我隱遁とまふあうりてと諫めるその言理のありといふも争何せん御向
我一言の失より伏姫と八房の犬見伴せて心あ差る言まり哀れなる伏姫の羞月閑花の
園秀るれも賢才義勇の親恥くは男子魂あればと親の與ハ一言の信と切れ失ハド

とく那畜生と伴侶とと深山は光陰と弥りし幸ひハ七身と汚され思ひ
ぬ考徳が飛丸の與ハ八房と俱ハ命と損へる折念珠の天験あり且伏姫が今
般に送せし言の垂虚かきむあふ那塞翁が馬に似て禍鬼反て我見孫們的福早
るぬたうの祥欣知れども椿樗の八千歳とも祝一個の愛女と非命と死せし
るの妻五十子も子も全夜の鶴の腸断離れて同月日黄泉に赴け又昭文が又延虫
崎照武の救姫と趕んとて身と谷川の水屑とるぬ是さ不便のうらふ又金碗
大輔孝徳の不測の事と醸せし我まも救ふとてぬ敷むつべりける頭顱も換
頭髪と前刀も拂ひつ不二法門に入らる遂に後身人となりて他が親八郎高吉が我を帮
助て甚高より功報由るるあはれと云恰といひ皆義実が疎忽の失かかぬ如く
至れるを阿容々々と世の立の後世議論定て軍記野乘に寫もあふ識者凡そ
弾れ恥を知むといれゆらんや汝連よりも義成が幾回と悲しを請ふ隱遁の

美を林示めむ用ひさうの侍故願ふに汝達明日よりして義成は侍と我は下ひ
 如くその足さると補ひて臣の道を盡される四境のくを異にして我身も後安ら下
 ちの美とあろぬかといと丁寧は示しぬに氏元貞約以下の老黨言の道理は通
 れて皆感涙の找むと覚む心難るる中氏元を尊く頭と拾げて謹て稟せし御
 諛うけをりぬ然も思ひと誰う違背仕らん只かそく某門の結城没落も
 せんんこめあつたまこの余心とわ
 先君の願命の後ひなり本洲へ御渡海の始よりして辱く家宰の列在りといども
 素より補佐の才学を君御隱道すはまもる御曹司義成をのち後見とされ
 らしを願ひけれぬを美我実推林禁めて不口とそ議の益え既ふ浮世を厭ひ何
 浮世の概念せん家叔日我見お譲りる義実をその日より世ある人と思ひ我が
 ろ既決り具中異日沙汰せん各々退りいんと馳て奥を入りある嚴命返す
 よりもあは氏元並は貞約のい本意多く思へども然而あはれあはれ卒とす

血衣人と齊一席と龍の間土土まきあ己の時の頭達る老毎が心なる物思ひ眉と煩
 めて退けり是の後の後幾日あて家督譲りの規式あり女房の御曹司義成の
 堀内藏人貞約を使者とて隨便京都將軍家義成へと告免許を以て安房
 守お任せられ房総二洲の國司も時長禄三年己卯の秋八月伏姫の一周忌を義
 実の道世の宿志と果しぬその秋大々おの美を士民小徇示さく瀧田の城
 内ある西のふ閑寂の別館と造りて其首小閑居の折るの突然居士と自称と敢政
 事とてさうあつた心菩提入るといふるを思召しやありけん祝髪得度とあつた
 鳥長表の優婆塞を伏姫並に孝吉們が菩提城をく吊ひあ看経唱名の暇に松
 風並月を友として或は死の花を嘯れ又或は死の雪を眺めて情景両さうは
 詩を賦し又歌を詠して櫛を殿曹一窓を禳ふと云ふひと云ふひけり夫突然の物貌
 既ふ菩提入りまが突然との痛まの出席出離の出ふと世も超然なる所以



十七



この処第二輯をなす伏姫
の物語は長祿三年の事也
自叙の明年長祿三年の事也

八十九傳九車巻三

大正十三年

且突穴の從ひ大穴從ふその大穴おせし八房の犬富山に在り一日伏姫の徳化
 せられて菩提心と發し姫の死に相從ふて俱に空穴を浴する爰又突字と分りたる
 是則穴の下八の大あり山を家へ覆屋は是より二十餘年の後八犬士當家は聚合て
 八行としてその君と克辭致す祥あり又然月に従ひ大穴從ひ火穴從ひ火字を
 分つとれ便は八人月は是明德を明ふるの義あり大士八人その明德を
 同くするの意の中稱ふ當時の美を知るのる後八犬士の事あり及び獨身
 のことを悟りてその妙契を感せしと作者又按さる義實朝臣の卒去のりその
 歲月を誌せしもの異同あり里見記及中村園香房総志料史其舊記と援て長
 三年と改元ありとを四月七日又一説は長祿三年八月二十日といふ非る
 る事件の二説と並く借用考よりありて斟酌既右の如く同話除煩小程
 安房の里見第二世の主人安房守義成朝臣の時尚弱冠れり文學武畧

父祖不勞らば民を極國と治りて南總の竹藩屏す是にお加る杉倉堀内の二老臣
 あり又荒川兵庫助清澄東六郎辰相と喚做すの素是里見の誼弟也
 義実の父季基の家臣嘉吉元年夏四月結城落城の折件清澄辰相義実の
 迹を慕ひて敵の圃を殺啓に辛く命を免れられも當時義実王従の去向を知り
 るる一は權且邊鄙に迹を埋めて本意をぬせと不憚る程に義実更安房小與
 了武徳八州に隠れければ清澄辰相怡悦の勝を俱に龍田不推参を宿志成
 許京あり義実亦歎いて留めく虚実を試み素より武功の猛者毎るれ
 命を毎お做さるあり忠信も亦大なるねば嫡子義成不隸れる今番氏元貞
 仍と共に専政事小與りより世々當家の家宰なりと杉倉堀内東荒
 川を世に里見の四家老と稱へり然山下包麻呂時安西連が亡びてより上總の武
 士們皆米心義実の威風を靡れて征せされも執事と承則好を通し臣附とそ

握つかふよよりりののるる。ままれれもも邊へん境きょうのの折せ々々野の心こころののあありりとと義ぎ成せい箕み求もと衣いとと嗣ついで々々及および
 ひひてていいろろままくく徳とくとと恪とくめめ他たがが差さ差さるるままちちののあありりとと上かみ總そうののいいちち下しも總そうままでで既すでにに羊ひつね團だん服ふく從じゆ
 去こてて地ちをを廣ひろむむとと其その甚しヨヨクク。ああどどのの當まう主しゆ安あ房ふ守しゆ義ぎ成せい朝あ臣しんのの安あ房ふ郡ぐん稻いな村むら小こ在あ
 城じやう去こてて房ふ總そうのの賞しょう四し討たうをを受うけけ。又また前まへ治ち部ぶ大だい輔ふ義ぎ実じつ老らう公こう平へい群ぐんのの鹿か田た小こ田た居いくく
 浮う世せののゆゆととゆゆののああをを信しんのの一いつ程じやう。年ねんをを歷れきてて文ぶん明めい十じゆ年ねん秋あき七しち月げつ初はつ旬じゆん小こ幡ばん崎さき十じゆ郎らう照しやう
 文ぶんがが大だい江かう親しん兵へい衛ゑいのの祖そ母ぼ妙めう真しんとと大だい田てん小こ文ぶん吾ごのの父ふ文ぶん五ご兵へい衛ゑいとと伴ばんてて下しも総そうのの市し河かよりより慌あわたた
 くくかかうう東とうへへけけりり。稻いな村むらのの城じやうへへゆゆ。孝かう徳とく入にゅう道だう、大だい坊ぼうがが行ぎやう脚きゃく以い來らいのの信しんもも知しらられれ又また那な仁にん
 義ぎ八はち行かうのの王わうのの往かう方ほうもも知しらられれりりゆゆ。ももとと感かん得とくししてて生なまかかるる。大だい塚づか信しん乃の成せい孝かう大だい飼かい現げん八はち信しん道だう
 大だい田てん小こ文ぶん吾ご悌てい順じゆん並ならびび大だい江かう親しん兵へい衛ゑい仁にん大だい川せん額がく藏ざう。義ぎ任にんのの身みもも信しんのの
 疾やくあありり。且かつ大だい江かう親しん兵へい衛ゑいがが父ふをを殺ころすす。山さん林りん房ふ八はちをを襲せうすす。洲しゆ崎さきをを垢かとと相あ謀ぼうてて神かみ餘よ長ちやう
 狭さ介けいのの家けのの賊ぞく臣しん山さん下か定じやう包ほうとと狙そ撃げきももんんとと謀ぼうてて長ちやう狭さ介けい光かう弘こうをを犯とがすす。杉すぎ木き朴はく平へいがが

孫まごるる。又また古こ那な屋や文ぶん五ご兵へい衛ゑいのの那な折せ々々垢か三さん朴はく平へいとと血ち戰せん多た。音ね小こ朴はく平へいがが殺ころされれるる。那な
 古こ七しち郎らうのの弟あにもも。又また房ふ八はちとと義ぎ俠ぎやく勇ゆう敢かん祖そ父ふ朴はく平へいがが倍ばい倍ばいてて大だい塚づか信しん乃の窮きゆう阨やくのの
 必かならず死しふふ代たひのの身みとと殺ころししてて仁にんをを做せうししるる善ぜん報ほうええけけんんのの子こ大だい八はち。真まこと平へいとと四よ才さいののあありり。今いま茲こゝろ是こゝろ
 月つきのの日ひままでで開ひらききけけるる。當あたふふ那な仁にん字じのの灵れい五ごとと握にぎ持ぢしし。件けんのの折せ々々垢かのの奇き特とくありり。又また
 又また房ふ公こう妻さい沼ぬま苗な小こ文ぶん吾ごのの妹い也やをを横よこ死しののままとと又また惡あく棍こん舵た九く郎らうがが妙めう真しん小こ懸けん想かう
 去こてて其その情じやう慾よくとと果たまええ與よ大だい八はちのの親しん兵へい衛ゑいとと撥はく擣くひひ石いしととのの搏はく殺ころええとと折せ々々神かみ火か
 忽たち地ち雲うん中ちゆうのの件けんのの惡あく棍こん舵た九く郎らうとと援えん登とう。二に段だんはは列れつ衣いてて地ち上じやうのの軀くとと投な棄し且かつ大だい八はちのの親しん
 兵へい衛ゑいをを神かみ隱いん小こ願がん。ああひひけけんんをを依よりりとと又また信しん乃の現げん小こ文ぶん五ご兵へい衛ゑいのの大だい塚づかのの
 郷きやうにに赴しゆひひてて大だい川せん額がく藏ざうののよよとと告つぐぐべべるる不ふ仁にん義ぎ八はち行かうのの文ぶん字じ自じ然ぜんにに顯けんれれるる。又また信しん乃の現げん小こ文ぶん五ご兵へい衛ゑいのの
 壯さう士しのの外がい必かならず三さん名めいああるるべべけれれ。八はち士し具ぐ足そくのの折せ々々をを受うけけてて共とも侶りのの微ゐはは心こころをを辭ちすす。大だい塚づかへへ
 赴しゆひひてて一いつ之これのの顛てん末まつ又また照しやう文ぶんのの後ご難なんのの心こころをを受うけけりり。又また妙めう真しん文ぶん五ご兵へい衛ゑいのの相あ伴ばんすす。

慌あわや一さき帰き困こあらるる。又また那その許こ我がの御ご所ところのの家け臣しんととすす。新あらた織お帆の太た夫とがが信のぶ乃のとと穿せん牙さ齧がの
 までまでもも照てい文ぶん詳しやうの登と録ろくとと稻いな村むら殿だんををりり。へへ歩あるるああけけがが義ぎ成じやうのの主しゆ駭さい嘆たんとと馳ちてて照てい文ぶんのの對たい
 面めんありありのの疑ぎににをを尋たづねね足たりりああるるとと听き果たてて只ただ顧こ感かん心しんのの外がああるる。姑なほ且かつとと宣のたまふふ。是こゝろ等らのの密ひそ告つの
 大おほ殿だんををりり。御ご世よ亦また仰おほせ付つけけてて賢けん慮りよのの出いでで。我われのの听き措さくくくををああららるる照てい文ぶんのの妙めう實じつと
 文ぶん五ご兵へい衛ゑいとと相あ具ぐとと瀧た田でん殿だんををりり。へへままうう一いつ上じやう。我われ先ま騎き馬ばのの使しとと馳ちてて先まちちてて注ちゆう進しんををりり。長
 途とのの疲つか勞らうささををああららんんをを憂うれひひするるれれもも快たいたいとと仰おほふふ照てい文ぶん欣きん然ぜんとと言い義ぎとと稟りやうしし退たいりり出いでで然しか而しか文
 五ご兵へい衛ゑいとと妙めう真しんのの稻いな村むら殿だんのの仰おほののとと箇こ様やう々々とと傳つたへへししとと俱くとと瀧た田でん赴きけけ。今いま程ほどのの義
 實じつ朝あさ臣しん稻いな村むら殿だんのの使し者しやのの注ちゆう進しんをを听きゆゆ。登と崎さき照てい文ぶんがが帰かへ國くにのの趣すゑ。大おほ法ぽう師しのの恙やああららず
 料りやう數すう行かう脚かく亦また他た支しるる。並ならびび信のぶ乃の現あらわわるる。小こ文ぶん吾われ親か兵へい衛ゑい額がく藏さう五ご大たい士しのの事ことのの顛てん末まつのの餘あま文
 五ご兵へい衛ゑい妙めう真しん房ぼう八はち沼ぬま苗な門もんががらら。今いま番ばん照てい文ぶんががままああららるる。書しよ冊さくのの載のりりとと。そそををりりも
 晋しん皇かうととししけけれれがが義ぎ實じつ感かん悦えつ淡たん々々近ちか習じゆ小こ讀よみ。听き果たてて照てい文ぶんをを等らのの程ほどのの登と崎さき十一じゆ郎らう照

文ぶんのの五ご兵へい衛ゑい妙めう真しん們もんとと相あ具ぐとと瀧た田でんのの城じやう未ま着ちやくのの日ひ義ぎ我われ朝あさ臣しん見けん參さん登と時じ義ぎ實じつの
 先ま照てい文ぶんをを召まささせせ。其その勤きん功こうをを勞らうひひてて那その明めい王わうのの大たい士し們もんのの既すでにに聞き召まさされれ。幽ゆう冥めいのの不ふ可か思
 議ぎ鬼き神しんのの出い没ぼつ有あととままれれ。則すなはちち有ありり。每まととままれれ。則すなはちち有ありり。ああととのの聖せい人にんのの怪かい力りき乱らん神しんをを語
 べべのの毛もう況かう凡ぼん夫ぶのの臆おく断だんりり。辨わべべたたららぬぬ。那その八はち顆かくのの明めい王わうのの伏ふく姫ぎがが仙せん々々時じ役やく行
 者しやのの冥めい助すけとと蒙もうりり不ふ思し議ぎのの念ねん珠しゆああららるる。他たがが生せい涯げい身みのの放はなささをを深しん信しん怠たいりりららり
 者しやのの看かん數すうのの大たい王わうのの初しよのの如ごとくく是こゝろ畜ちく生せい發はつ菩ぼ提だい心しんのの八はち字じありり。後のちのの喪さうとと仁に義ぎ礼れい
 智ち忠ちゆう信しん孝かう悌ていととのの八はち箇このの文ぶん字じ亦また做しよ見けんれれ。素すよりより灵れい物ぶつのの小こ似に似に。然しかにに那その八はち房ぼうはは大たい
 最さい期き亦また及およびびてて菩ぼ提だい心しんをを發はつせせ。又また那その大たい塚さか大たい飼かう大たい田でん大たい江かうのの毎まい幾いく名な歎たん各かく大たいをを氏しととままて
 各かく那その身みああるる瘧さつのの形かたち牡むす丹たんにに似にるる。ああのの明めい王わうをを感かん得とくしてして。出い生せい時じをを同どうくくもも。又また是こゝろ奇
 中ちゆうのの大たい奇きふふしてして。其その大たい士しのの信しん乃の們もんとと共ともににああららるる。是こゝろ八はち人にんああららるる。死し王わうのの因いん縁えんのの人にんをを以もつてて舊く還えん
 れれるる所ところ以もつてて歎たん莫な伏ふく姫ぎがが終しゆう焉やのの折せつ忽くつ然ぜんとと光ひかり明めいをを發はつちち散さん亡わうららるる。王わうのの往かう方ほうをを求

んて最做一か所所約るん宿望虚一かまして玉と人とをゆるり一も孝徳入道、
 大坊が道心年来堅固る一念竟小幽冥を通一するあらん是併照文が勤
 功亦亦甚く惜しむ相見る所の三大士と伴ふてかまわぬゆり一も心定懐の至り
 然つても那大八の大江親兵衛仁とや一尚四歳の小見宅神隱小遇ひ一と歿存亡心
 るたぬれも他們の九人各感する所ありその宿因の故をて生さるものある
 縦窮厄ありとも又神佛の冥助もよめて必恙あらず天縁熟き時至る件の八
 士具足一も當家股肱の臣とあるん然就て照文が俱一と來ぬ大田小文五の父文五兵
 衛大江親兵衛が祖母妙真ののりも照文が具書不もて既小のあろとゆる俱當
 城に留置て扶持と老を願せん西三目疲勞もあるべし權且照文小預け置入宿所伴ひ
 勤りて異日見参ふ入れよかととと親心切小宣ひて休息の暇とあり稻村よりまわされ
 たる使者の由件のゆき示しと文五兵衛妙真們を宜く扶持しあるべし義成小回入

とて隨便還一ぬけりその後文五兵衛妙真の義実朝臣小見参し一親心切る仰を蒙
 又稻村の當主義成朝臣とも當城の有司小命とて他們が宿所と修理せぬ婢さ
 隷て不自由く恩賜那身小餘るるその夏之趣の載て第四十四回四十二回小具るれば
 中々都て思はる看官前後と照して知る一徳而どの年一秋有一日稻村より義
 成の龍田の城へ來ませ折照文並小文五兵衛と妙真と召出七尉あぬと大々るる東
 西と多く賜りければ義実老侯然ひひて義成主と商量あり少くも那大塚信乃大
 飼現八犬田小文吾們が外小大川額藏と喚做まのありそそ那明玉八顆の内中義
 字あると所持するれば大江親兵衛と共小五名必宿因あると思ふゆりて不又か
 り小実小その母も玉の數小相稱ひて必八人あらん各仁義八行の徳と天地小稟
 けるのあり速小招れよとせよれれも他們の友小先さて禄と欲するの同因
 果のあり具足其相伴ふてもあつてとて推辞もせず一氣小招むとも時至る必當死

股肱と云ん天縁をばあまの思へども大塚信乃の行徳を宥罰あり幸ひふて山
 林房八が身と殺して救ひ給ふるとや又那大江親兵衛の神隱の憂ひありそれ
 のを文五兵衛が傳の説き那大川額藏と狹喚做せぬ其の罪を宥けら
 せ大塚を大石憲重の獄全存在を刑罰の場ふて信乃現八小文吾們謀りて
 救ひ合ふと追隊の士卒小軒逼れて皆殺す捕られしも皆免れしと云ふあり
 存亡安定るべしを其の在實の知れぬもその後又他們が上急難を争何れ見
 安らぬのそこれ復十一郎照文小究竟の夥兵五七名と後七重て他們が往方を索
 後て再會せし將て去るべく倘又固辭て從へず他們と俱に餘の天士王宗巡りて非常備
 へ路費の次資助するを縦路次を殃危あり防ぐ便宜ありぬ我身隱道
 せ日よ政事の世の好すと思ひ伏姫が終に臨ませしよりと
 咄合も瑰奇な出世の天士們我外縁の心地をされしを思ふことと云ふ和殿の意見見

甚麻を和向れて義成異説あるを仰宣ふその理あり恐れざる見分思ふ所御立忌の如
 然ハ又照文その義と命のゆいんと而侯の身邊近しく照文を召よせ義成みづ
 箇様々と件の其の趣を町寧ふありさして帰國の後程も投て去向も安定るる
 犬士們を索し不遺まの心る不似れども照文を別人のよきまをあらぶれば已と云ふ
 及ふ準備せよとのそが義実の亦云と示させぬ命あり照文を養て
 毫も礙議の氣色なく最正首小尉り稟しり日る起りぬと遠く退り出
 加義成有司命して照文小従の夥兵七名と擇出させ路費並に犬士們小賜
 ぶ金子まで照文小遞与させぬけり小程小文五兵衛と妙真のやを儲養を飽養
 賢と愛し士と徴めぬ而侯の恩と感相欽びて俱におもく願いかども義実固く禁
 めさせ恩命の懇切な徳而養崎照文の件を夥兵們を從て又八州を徧歴の旨
 途をあらはるる次の年春二月十五日小文五兵衛の身故りける是より後照文が

信久くゆえきりし既ふ七四檢ふる男。文明十三年辛丑の冬十月下旬ふ。蜷崎十一郎照文の甲斐の石木よりかへり來り。那大士們を伴ねども十檢あり前比就鳥お捉られぬ。たる義成の息女濱路姫と伴ひまわらせり。とせり。稻村瀧田の両侯と諸臣女房に至るまで世ある人の眞土よりかへり來ませし心地や去けん哀歡交判くよも多し祝壽の聲みみち。介程の兩侯義成の昭文が許の趣と听ゆる昭文の近比甲斐の石木に旅宿せし。折、大法師は再會れ其の趣。又大山路節が犬塚信乃の再厄と極ふ及びて憶りる濱路姫の妻生と知りて。大法師の住持す。指月院へ俱いませり。その支の始は。姫の養父四六城木工作が當年佐々の地方で濱路姫と極會て年來養育せり。及木工作が枉死の事並ふその妻夏引が甲斐の園司武田信昌の家臣泡雪奈四郎夏引と女通のふり。濱路姫と犬塚信乃と害せんと謀り。その支の終は。昭文が直引。処具るふとの事。有徳奈四郎夏引の奸悪竟れ發覺れて夏引並ふ奈四郎が

悪僕憫内首と別れ奈四郎は一個の悪僕媪内を俱して遠電あす比信昌の主放。雁鳥のかへり指月院に立て。大法師は對面あり折信乃と道節も見参入り。その智勇と賞美のあまの留めて高禄と合せんと。親命大々るあつし。信乃道節は推辞まうして當坐の微めを免れれども那里不在る城内へ招きとわべも。大法師は別告て猛可指月院と立去。折照文も他們と共に濱路姫を守りて悄悄地不歸國不。及程小武藏の四家の原。那泡雪奈四郎を犬塚信乃が敷を捕て姫上の久與木工作の怨雪の俱して墨田河の頭まで來りける。他們は得同因果の犬士大川額藏の莊介犬田小文吾大飼現八人の環り會ひの折共侶不ちあんとて今番も推辭まう。去ふよ。恩賜の金子と信乃道節は。遞与して後會を契り。その意不儘。又那犬山道節の忠字の明玉と感得あるのふりて。煉馬の老堂大山道策が家子とあつる。佐保の犬士六名は既相識るをゆり。よりと隸させぬ。野兵西二名は石木に留りて

去の茲不界せるものも有り。看官知まるといふ。那大士門の顛末と申見殿父子知りぬ。
 此の是より後不便之作者の用意と思惟るべし。同話除殺系徳而る次の年。
 二月の某の日の御不登崎照文が甲斐守若木の指月院に留り置る。
 大法師の消息を照文に渡す。且武藏の穂北より水垣夏仍許寓居す。
 大山道次即口状を演傳下。照文にその事ありて。大の書翰を関する。
 田小文吾と伴ての身日指月院に來りて。同因果の一大士大村大角礼儀
 爲の索んと俱信濃路赴り。并子犬飼現へ。又是同因果の一大士大村大角礼儀
 留ゆれて。權且那里子寓居る。又毛野が石濱の復讐言大角が壁返の妖怪討治。又小文
 吾が越後中泉牛と推駐り。並賊婦船曳り。折子社が強盗酒顛二門を
 誅戮の。并長尾景春の如く。腋の大刀自その臣稲戸由亮の。小千谷の使者石龜

屋次困太の。その山崖略と寫真。件の毛野の素生。感得。智字の
 玉あり。又大角の出処。任心。ある礼字の玉と持り。那身の内。小徳あり。
 人都在異る。但その有る処。同トか。ざる。玉の數。稱ひ。大士八具足。
 親兵衛の存亡。知る由。毛野が性方。詳る。その人あり。その人足。
 心く。困圓。其全取。え。と。遠く。抽僧。本院。住持。の。実。已。
 より久恋の地。ある。故。來。ん。春。の。本院。と。辭。去。て。下。野。州。結。城。
 庵と締。て。先。君。野。村。基。並。小。吉。吉。不。陣。殺。の。諸。靈。魂。の。苦。提。の。與。
 行。結。願。も。ト。年。の。四。月。十。五。六。日。の。幸。い。て。その。時。候。
 八人具足。ある。俱。て。故。御。ま。か。ら。ま。く。欲。ま。是。是。の。う。と。兩。殿。
 文。斜。に。然。び。て。次。の。日。先。の。狀。と。義。実。朝。臣。不。披。露。と。し。
 づ。も。あ。る。件。の。書。翰。と。合。抗。て。繰。返。々。閱。し。ぬ。半。晌。許。讀。果。て。宣。

城落城して先君戦殺ませり。今に至りて四十二年我一日も忘れず。今も那里へ死墓
 碑を建てる。思ひいかに。この間敵地ありて人馬の通達自由なれど。且京都將軍へ
 憚りより。もろくにあつね。思ひいかに。今も那里へ死墓。親の神霊を慰むる。今も那里へ死墓。
 大が發願の我の代も。孝順の誠心。今も那里へ死墓。且那八箇の天玉の性方。今も那里へ死墓。
 徳のよき。壁千體の僧と為りて。七堂如藍と建立。開山の祖師。今も那里へ死墓。
 所行き。但心も。明平四月の中氣。今も那里へ死墓。大江親兵衛。今も那里へ死墓。
 あり。毛野の。來も。せん。那親兵衛。今も那里へ死墓。四歳の時。今も那里へ死墓。
 光陰と經る。尚存命。明平の九才。今も那里へ死墓。是等の。今も那里へ死墓。
 年の四月。結城。我代香。照文を遣さん。今も那里へ死墓。程。今も那里へ死墓。
 書翰を披露。ね義成。今も那里へ死墓。本立。今も那里へ死墓。竹堂。今も那里へ死墓。

又有司命。今番甲斐。今も那里へ死墓。照文。今も那里へ死墓。親兵衛。今も那里へ死墓。
 賤も。漏れ。今も那里へ死墓。山。今も那里へ死墓。其。今も那里へ死墓。頭。今も那里へ死墓。
 人の頭。今も那里へ死墓。但。今も那里へ死墓。鳥。今も那里へ死墓。跡。今も那里へ死墓。
 素より。得る。今も那里へ死墓。所。今も那里へ死墓。往。今も那里へ死墓。正。今も那里へ死墓。
 利の。武。今も那里へ死墓。威。今も那里へ死墓。衰。今も那里へ死墓。へ。今も那里へ死墓。
 住。今も那里へ死墓。折。今も那里へ死墓。竹。今も那里へ死墓。内。今も那里へ死墓。横。今も那里へ死墓。
 残。今も那里へ死墓。害。今も那里へ死墓。して。今も那里へ死墓。其。今も那里へ死墓。財。今も那里へ死墓。
 碗。今も那里へ死墓。の。今も那里へ死墓。美。今も那里へ死墓。酒。今も那里へ死墓。の。今も那里へ死墓。
 の。今も那里へ死墓。甘。今も那里へ死墓。唐。今も那里へ死墓。の。今も那里へ死墓。入。今も那里へ死墓。
 志。今も那里へ死墓。業。今も那里へ死墓。因。今も那里へ死墓。これ。今も那里へ死墓。を。今も那里へ死墓。

婦と奪會し。生るる腹と裂て胎内の子を蒸て啖ひ炙りもきて酒菜ふせし。味は口小稱いければ是よりと民間の懐胎の婦と索して掠奪せ殺さる。那唐山の盜路が凶暴も過され。這事竟お世まづて膽吹山の鬼路六とそ人々他を怖る。疫鬼小異る。積悪の報ひる。有年の六月中流小業因の京師る。祇園會を叙せし事。熟る小嘍囉。四名と從て各々形體と変え深草園扇る。小經紀兒の打扮。神會の本日京赴け人家の簷下小立在。種々の山鉾の渡る。規つ。あける。小怪む。業因が。肚裏小聲あて。忽然と叫ぶ。応聲果異なる。羊来他が。做考。悪言を云と。暗る。聲耳高き。て人の耳。事可。あつ。業因が。驚慌て。腹を厭。千。曾を拵。禁んと欲せ。れども。高く罵りて。寤も。寝と。なる。ろ。小嘍囉。們も。驚呆。れて。痛。痛。思。の。今。ゆ。せん。術。と。知。れ。況。その。間。近。く。聚。合。する。衆。人。の。送。小。袖。と。被。目。を。注。て。怪。と。怕。れる。の。あ。り。浩。処。の。室。町。家。の。市。正。高。梨。六。郎。左。衛。門。尉。職。徳。と。喚。做。を。武。士。あり。緝。捕。使。人。

將る。は。這。日。祇。園。會。の。由。來。人。取。來。合。ふ。市。中。の。非。常。と。敬。言。んと。野。兵。五。六。十。名。と。從。へ。騎。馬。苛。め。く。巡。麻。生。ま。叱。咤。の。聲。耳。も。暴。音。の。巷。路。と。町。人。の。竹。筒。杖。と。引。鳴。さ。し。先。を。拂。て。來。し。ければ。業。因。竝。小。嘍。囉。們。の。齊。一。慌。忙。に。快。躲。んと。欲。ま。れ。も。稠。然。と。錐。の。立。ま。人。の。山。做。ま。人。の。堰。れ。進。退。便。り。を。さ。り。業。因。が。腹。内。を。その。積。悪。と。罵。る。と。這。時。殊。お。甚。き。隱。ま。ぐ。も。あ。ら。ざ。り。職。徳。を。き。つ。け。且。怪。す。その。人。と。相。る。形。貌。の。經。紀。兒。お。似。れ。も。その。回。魂。檻。杵。見。れ。る。腹。内。の。聲。あ。る。と。或。は。名。と。生。り。或。は。その。積。悪。と。罵。る。との。分。明。な。れ。原。來。那。奴。の。豫。め。強。盜。但。鳥。路。五。らん。兵。毎。逃。を。捕。捕。り。ね。と。馬。上。小。劇。した。下。知。不。從。の。搦。雄。の。野。兵。數。十。名。乘。り。ぬ。と。志。も。果。を。と。生。轉。々。と。捕。細。て。御。証。と。喚。楯。々。と。三。七。二。千。一。小。競。ひ。鬼。れる。勢。以。免。る。と。も。あ。り。され。業。因。の。吐。嗟。と。む。ろ。小。殺。脱。んと。欲。ま。れ。も。身。の。寸。鐵。を。帶。され。經。紀。人。の。店。前。は。木。井。絶。の。小。杉。木。と。引。拔。持。く。當。る。小。儘。と。搏。仆。せ。し。勢。氣。の。物。も。せ。前後。左右。



高梨職徳市の
但鳥業因と捕捕ふ

共

改漢堂藏



改漢堂藏

折累り。矢場組住り探伏せしめて押へ素と楯けり。然ハ業因の従ひ来る。西個の
小嘍囉們も。折三人の擗捕られ辛くも逃亡せし。只一人と夢えけり。是は業因の
恩開きて群集の男女。迷ひ滾びて入る踏を。婦幼の泣叫び。只嬉の手を散らさ
く。走る迹へ又聚合。鄙語の怖し物。欲見る人心。老弱男女。賢不肖。是より
後日と歴るまで。這強人の噂。そのも。魅せし。奇談る。唐山
戦國の時好て人肉を喰ひ。あり我神州。往古より。残忍。慘毒の猛者。うとを牛
馬の肉を喰ふ。喰ふを稀る。余る。但鳥業因。は。婦の胎を奪ふ。小兒を喰
ふ。云人面獸腹。その悪虎狼。勝り。天罰。人怨。共報。以て。忽地。腹内。小聲
あり。その積悪。と訴。緝捕の繩。敷系れる。怕。誠。と。取。人。ありけり。
畢竟。業因。が。捕。捕。られて。後の。話。説。甚。麼。を。也。そ。も。次。の。巻。小。解。分。る。と。聴。ね。か。り。

南總里見八犬傳第九輯卷之三終

南總里見八犬傳第九輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第九十八回 盜人の從者偷走りて盗不戮は
賊巢の宿りて強人賊難を免る

く。説。高。梨。職。徳。の。強。人。但。鳥。業。因。を。既。に。擗。捕。し。た。下。れ。小。嘍。囉。三。名。も。一。緒。に
却。説。高。梨。職。徳。の。強。人。但。鳥。業。因。を。既。に。擗。捕。し。た。下。れ。小。嘍。囉。三。名。も。一。緒。に
數。系。て。野。兵。不。幸。一。衙。所。に。還。り。即。使。他。們。が。出。処。來。歴。做。き。惡。吏。に。責。問。ふ。業。因
們。の。頼。陳。し。て。罪。を。免。れ。んと。欲。ま。れ。も。這。時。ま。も。腹。内。の。鼓。耳。あり。ま。も。他。が。合。さ。し
ま。し。て。出。処。來。歴。年。來。の。惡。事。を。告。げ。た。業。因。は。小。嘍。囉。們。も。詳。し。難。で。陳。さ。し
み。是。年。來。近。江。の。膽。吹。山。の。賊。住。て。相。從。ふ。小。嘍。囉。三。名。あり。毎。日。良。民。を。殺。害。し。財
貨。を。奪。略。す。る。又。口。腹。を。貪。る。與。ふ。婦。の。腹。を。裂。て。胎。内。の。赤。子。を。奪。ひ。折。り。酒
菜。を。食。ふ。且。の。日。より。祇。園。會。の。山。鉾。を。観。望。思。ひ。て。三。四。個。の。支。黨。を。從。へ。情。々。地。に

八犬傳九輯卷四

曲亭主人

みまこまき 京師も来れども。本日尚君羊集の内面善れる者もあらん。然と聊遠慮を旋りて。経紀
児を打捨て市塵の管轄下は立在る折腹内ぞりの。奇病暴小發り。於積患忽
地發覺れて檻の獸をゆるよと送る招てけれ。業因が腹内を呵々として笑ひい
是よりその聲絶け。職徳を果てのくその奇な駭驚な。然氣もんせ。業因の
多對ひ位と疾視て。それ兇賊思ひ知る。那袴垂保輔金山左衛門藤澤入道淺
生松孺昔よりて世はゆえる強人の胎を奪ふ。その子と咬ひめを
写る。惨毒鬼畜彌増る悪報竟免れ。腹内より聲を發して。びくびくその毒惡
訴る。冥訓觀面汝が為殺される。幾人の死心の魂魄汝が五臟にこけ入る。ものせ
あらんぞ。地獄天堂遠は。あらん。輪回忠報甚近。自業自得。あつて。とられて。業因
怯る色あ。うち仰だ。冷笑ひて。腹ぞり。め。それ。と。我。一。刀。を。腰。に。せ。殺。脱。ん。て。易。う
と。救。へ。形。貌。を。変。て。身。寸。鐵。を。帶。さ。り。け。れ。ば。和。主。の。手。柄。お。せ。れ。ら。る。と。ら。せ。る。果。は。野。火

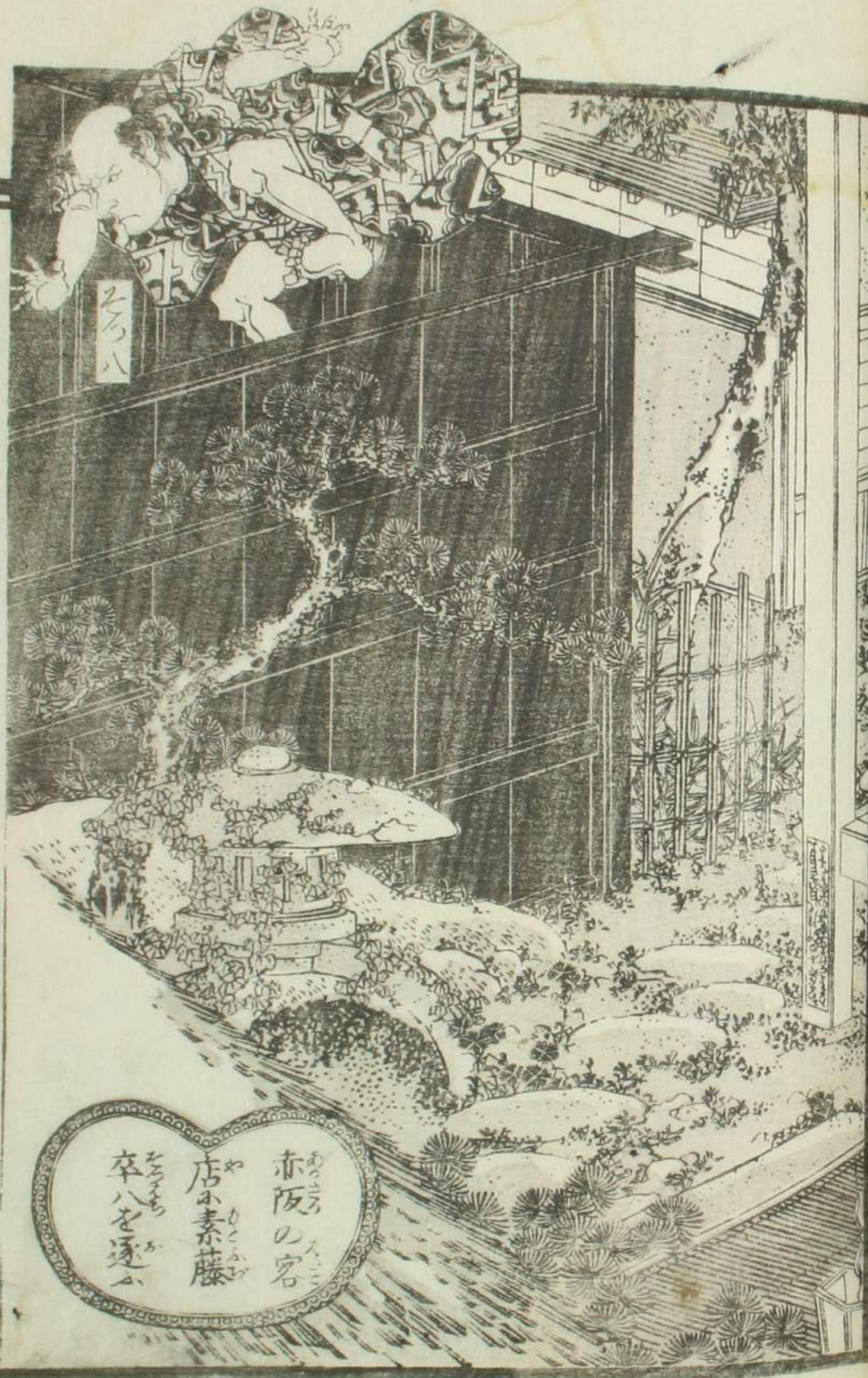
ら。能立の。皇。中。の。帝。命。縮。て。牽。立。支。堂。三。名。の。共。侶。の。獄。舎。の。敷。布。の。信。而。高。利
職徳の業因が罪悪と件の奇異の趣。河島山。官領。這賊膽吹の巢。元。支。堂
居。い。ん。討。も。勢。と。七。世。の。全。功。の。か。ん。だ。什。麼。仕。る。べ。う。と。言。と。同。い。票。あ。一。の。官。領
隨便詮議の件の但鳥業因の都下へその名をさ。る。の。之。膽。吹。山。討。ひ。あ。六。角。家。へ。仰。付
られて。觀。音。寺。の。城。より。遣。され。ん。職。徳。今。番。介。る。山。賊。の。頭。領。と。搦。捕。り。し。ら。ん。と。言。ふ。柄。世。の
強人の。胎。を。奪。ひ。て。其。小。兒。を。咬。ひ。前。未。聞。の。か。の。如。大。惡。人。の。常。刑。を。と。き。ら。ん。と
と。く。八。會。の。極。刑。の。行。な。る。支。堂。三。名。も。俱。は。鼻。首。走。し。と。下。知。せ。る。是。より。職。徳。の。衙。所。か
退。り。上。言。と。傳。へ。先。業。因。と。生。る。八。會。の。斬。割。と。考。へ。後。ふ。誅。り。て。小。嘍。囉。三。名。も。俱。如。賀
茂河原の鼻首を。り。是。を。規。る。の。堵。の。如。く。那。怪。談。と。話。傳。へ。或。は。年。來。業。因。の。腹。を。裂。れ
胎。を。奪。れ。る。幾。の。婦。人。の。怨。火。の。所。為。る。べ。と。の。あ。ら。或。は。其。を。非。と。し。て。那。強。人。の。腹。内。を。め。め
と。く。吹。し。り。應。聲。身。蝕。と。の。病。痴。の。所。為。る。べ。と。を。諱。ひ。し。と。考。中。の。博。士。あ。て。詞。徐。論。ま。や。う。

縦追隊も遇むとも脱れまりしと知れる久後背安らるるに信れぬ京師の凶変と伏家の都て
 秘して箇様々々の誘え我身の獨和郎と將てそ他郷へ走るべし謀めて人事を疑れそ
 せよか。と期と推せば卒八所々合はれてそ妙策あるるに然るに左の右と心せ
 つつ居聞けの屬々々。逆旅の準備遠くは素藤の親の有財と惜ぢ合會せしむるに一千五百
 百金あり。その内中十裏千両を勒肚に藏め腰の纏ひ。餘る五百兩は行擔に造りて卒
 八が肩の掛させんとし準備をも整ひければ素藤の然氣も。伏家の光賊礪時願八平田
 張金作ると喚做る面三名と招きて告ぐる。和主のいも知らざる。京師の大人の消
 息も疎しと卒八から來りて子の親の思ひ。今おとめをさぐる。大人の所要の別美の
 あら。我中京師(來)とをの喜の趣。祇園神會の二二度観られ。今茲に特小與三の河
 原の納涼の身愛され。非除神會の日不後とも卒八を將て我歌店(來)と狐疑と親の
 等なるるといひかゝるに。信れぬ今より立出で路次といを死て京師に到らん。姑且留守と憑ひ

のこつて大衆異議をなす。そと美次。此の事。午の酷暑も堪へず。今より
 ても夜行を縮む。幾日もの。京に到り留守に我らあり。そをせと共侶の諾ひて
 馳て目送のけ。介程も素藤の凶と避て吉小趨る。籌策のほうと。思へ。投て往方と定めぬ
 ども先美濃路とて。赴く程。卒八も後を跟。先中も立て慰め。のこ漏り。傳さす。抑近
 江の膽吹山の坂田郡に在り。山も東に美濃州。山の東北。州界より千疋まで十八町あり。と云
 られども官道あり。素藤が膽吹の山寨と遠く立出。の未牌の時候より。山吹の日
 影の没易くても。と才の三里許下。晡あり。けり。登時卒八も後方より。素藤を喚掛て
 やよ喃小頭領。這頭の。下下の寒村。れ。好飯店とゆる。か。ん。小可先走。抜けて。好宿徴り。そ
 又其首より。出迎へ。ん。是より路の。髪直。迷ふ。ぐ。の。迹。より。徐。來。る。ぬ。の。の。小。小
 素藤領。たて。その。よ。く。つ。た。る。快。く。あ。ら。ひ。の。い。を。せ。む。卒。八。も。阿。唯。々。々。と。心。あ。つ。ゆ。な。や。先
 たち。東。と。投。て。走。り。け。り。既。し。と。素。藤。の。今。宵。の。歌。宿。を。卒。八。儘。し。け。れ。路。を。急。ぎ

老既おきな不なと黄昏たそがれ時候ころの侶とも奈な之の村むら小こ来きまけり。まゑれども卒そと八はち何なに里り由ゆにけし出いでも迎むか
 へ店のみせのの簷えん下したのの並ならぶとと撰めて目標めくももるももええねね素す藤ふじのの疑うたがひ感ひて這この地方ところの
 家いへ毎ごとにに住すむ旅たび客きやくのの宿しゆく借かりまさとそそ那あの道みちとと尋たず問とふの甲か斐ひもも多おほく日ひ暮くれて卒
 八はちもも立た見みぬええと素す藤ふじのの後のち悔くみを噛かむも不ふ躓す躓す多おほく恨うらめもももせん休やすむ
 腹はら裏うらのの思おもひを我われけの那あの奴やつ不ふ馳ちしる行い裏うら裏うらのの金かねあらぶも給たまひて那
 奴やつのの逐お電とするん日ひ屬ぞく那あの奴やつがが我われ不ふ仕して忠ちゆう心しんあらひたえる今いま番ばん京きやう師しのの凶くわう変へんもも伏
 家いへのの人ひと々々とと閑いひて逸い早はやく我われ報ほう功こうさへあれ心こころ饒にしと毫ごもも疑うたがひける我我われ々々鈍とんま
 今いまもも往むか方へとと涉あ獵さるも這この頭あたまのの岐まが道みち尋たず問とふ所既すでにに日ひ暮くれて何所どこにに
 便宜べんぎとと思おもひぬ幸さいひぬ我われ腰こしのの千せん金げんのの般ぱん纏ぢんあら今いま宵よ且かつ這この地方ところのの曉あけとと明日あした快か索さく
 思おもひぬから村むら稍おほ盡じんぬる村むら翁おきなのの家いへのの投な宿しゆくとと求もとめて才さい一いつ膳ぜん三さん碗わんのの疎そ飯はんのの飢う
 醫い者しやくのの之の軀しんとと枕まくら不ふ就しゆうにに腹はら平ひらく宿もも睡ねれぬ其その時とき未まだ早飯はんをを促おそめたる早

装くさして登深ふかくと立た半はんがが這この頭あたまのの通とり品降くだる鄙あられと膽い吹ふ山やまをを不ふ遠とほく後にに安やすまる
 卒そと八はち奴やつのの官くわん道だうのの々々とと走はりつゆめとと尋たず思おもひぬ間ま道みちよりより無な井いののくく不ふ赴しゆく路のの長なが短たん損
 益えき構かまつるもも取と立たぬ横復かへりも早はや日ひ銷しょうし渉獵さ難がたい稍無な井いをを來きぬ折暮くるも
 程ほどあらむも一いつかも亦また復かへ一いつ里り十じゆ町ちやうあらむも索さくして赤阪さかのの驛えきあらむも卒そと八はち奴やつのの歌うた店てんとと投なめ折夜よのの之
 初はつ更げあらむも一いつけり然しかりけれも這この地方ところのの昨きのう夜よのの侶とも奈な之の村むら似に素す藤ふじのの比ひ客きやく店てんのの土つち妓ぎ唱なを
 ありて夜よのの特とくけり不ふ執しやく開かいひる佳よ而して素す藤ふじがが今いま宵よのの宿しゆくのの木き偶ぐ舞ま屋やとと吸く做しる最大だい大だい
 客きやく店てん多おほく航て娼婦ふ不ふ案あん内ないをを奪うはれて奥まるる編室しつ入いりぬぬの時とき隣りん房ぼうあらむも歌うたのの
 客きやくあらむも一いつ個このの土つち妓ぎのの傍かたわら小こ果くわらし西さい三さん個このの艷えん曲きやく妓ぎのの歌うたせも多おほく彈せも多おほく高き不失して因なる
 そのその聲こゑ卒そと八はち奴やつのの似に素す藤ふじのの隔かき亮りやうのの建けん縫ほうのの透と間まよりよりそのその人ひとをを偷ちゆう看かんる不果くわとと紛まぶく
 ももあらむも那あの馬うま面めんでであらけれ謀まうをを悄せう々々地ちのの刀たうをを合あ抗かて腰不ふ帶たいる間もも堪たへ隔る紙
 門かどをを托たく地ちとと蹴くりて好この竊せつ偷ちゆう奴やつをを出いせして覺期きををとと罵ののり哮る聲もも尖とく身をを跳はりて走



八代傳七郎卷四

七

大坂屋三平

赤坂の客
如素藤
店小素藤
卒八を逐ふ



八代傳七郎卷四

八

蒐りんとせし程、卒八と吐嗟とるる駭、恐れ不盤と踏碎、蹴散らして慌て庭より逃走
して堀を無る外、面へ控と下りて又走ると、素藤藤の逃さ下りて、續いて堀を控と、因りて
うち踏を修煉の剽捷何里をもと、趕鬼る迹、お主妓と艶曲妓們が、駭謀して人を喚ぶ聲
の遠く、歩えけり、介程、卒八も命涯の逃れも折る、二十日の月、刺身りて、躲る便りの
あは、是非、御影寺のへ走る、前、回、一條の川ありけり、是則、株川へ、流さんと、流瀬を
知るを、背後より、素藤が、趕ふと、甚急ありて、間近く、より、引返して、挑戦を、欲し、不
ふ、一條の棒も、持た、腰、不、護、身の、刃も、る、けれ、進退、あ、ふ、谷り、と、已、と、る、を、件、の、川、へ、跳、入
え、と、せ、程、不、素、藤、快、く、走、來、て、大、喝、一、聲、敷、く、閃、名、を、刀、の、光、に、今、世、の、別、路、卒、八、を、右、の、肩
尖、より、斜、に、左、の、腕、を、と、ら、せ、と、兩、段、の、斬、を、ま、さ、れ、て、仆、れ、り、既、中、と、素、藤、の、四、下、と、ん
の、喘、を、定、め、先、血、刀、と、拭、ひ、收、め、然、而、卒、八、が、屍、骸、と、探、る、ふ、那、六、百、兩、の、金、を、不、依、結、の
布、の、勒、肚、に、收、め、て、腹、を、纏、着、て、あ、の、餘、此、の、日、用、錢、も、他、が、懐、に、あ、り、けれ、ば、自、米、心、も、復

さて、更、不、又、思、ふ、ま、う、這、奴、の、我、伴、當、て、金、も、亦、日、足、我、東、西、を、れ、れ、も、只、逃、さ、う、と、思、ひ、憚、り、と、
生、拘、る、と、忘、れ、さ、う、結、果、で、我、憎、恨、を、洩、さ、め、ら、う、と、又、故、の、客、店、へ、か、り、を、反、て、人、を、疑、れ、て、い
解、く、と、も、甲、斐、る、る、所、へ、幸、ふ、し、と、金、の、皆、這、奴、が、身、不、附、り、け、り、不、迹、不、送、せ、行、裏、に、棄、ち、
と、も、惜、む、不、足、ら、我、も、世、間、廣、く、取、身、を、さ、さ、と、毛、と、吐、て、疵、を、求、る、と、せ、ん、や、夜、の、深、く、と、も、あ、の
川、を、渡、り、と、別、宿、を、求、る、不、あ、く、と、あ、ら、う、と、肚、の、回、り、肚、の、答、る、身、の、往、方、思、ひ、決、ま、ら、卒、八、屍、骸、と、
川、へ、蹴、落、し、と、然、而、船、を、喚、び、渡、を、求、め、て、御、影、寺、の、驛、に、赴、け、り、夏、の、夜、を、短、く、て、お、ま、ま、れ
時刻、ある、り、客、店、の、門、を、敲、け、も、宿、借、せ、く、も、あ、ら、う、と、尋、ね、ふ、ら、ひ、誘、へ、房、錢、を、言、く
と、合、さ、し、と、そ、の、天、を、才、不、明、け、り、是、よ、り、と、素、藤、の、千、五、百、兩、の、金、を、潜、中、に、二、箇、分、ち、半
を、分、り、つ、つ、半、分、り、肩、あ、ら、う、と、搦、て、岐、路、を、東、へ、赴、く、不、素、藤、も、急、に、旅、を、れ、旅、麻、の、温、泉、の
立、ち、と、夏、を、過、し、と、八、月、の、時、候、鎌、倉、杖、と、身、を、世、渡、る、便、具、と、求、む、べ、れ、倘、然、る、所、當、あ、ら、ざ、と、多
少、路、費、と、旅、も、旅、の、皆、喪、り、又、昔、の、山、家、あ、る、ら、ん、と、何、の、里、う、日、の、照、ら、さ、る、と、急、に、垂、露

るるる。と。獨占る無敵の料簡岐嶼の旅宿。日數厭せ。せ。麻の温泉。來ふれば。其甲と
咽。做。ま。客。店。の。坐。席。を。借。り。て。還。留。ま。る。日。毎。に。浴。湯。を。受。け。る。然。し。這。地。も。山。里。に。據。津。の
有。馬。伊。豆。の。熱。海。に。似。る。べ。う。も。あ。ら。ぬ。れ。ど。那。這。も。旅。客。聚。合。す。て。夏。の。湯。治。を。旨。と。ま。ぬ。れ。ば
思。ひ。よ。り。も。徒。然。る。詞。敵。も。稍。生。來。て。尉。當。り。よ。が。あ。る。是。も。よ。り。も。素。藤。の。五。六。十。日。筑。麻。の。小
在。の。三。伏。の。暑。氣。早。晚。冷。て。稍。肌。膚。寒。く。る。隨。同。宿。の。旅。客。們。の。漸。々。立。去。て。四。下。寂
あ。る。り。一。人。素。藤。も。然。る。と。筑。麻。の。歌。店。と。立。出。り。上。毛。の。武。藏。の。歴。々。新。樵。の。録。倉。と
規。必。と。思。へ。歩。も。找。せ。も。と。又。只。一。日。多。く。既。中。て。武。藏。の。熊。谷。と。鶴。巢。の。間。と。豫。修。の。曠
野。を。獨。過。る。折。々。暈。々。息。息。の。け。の。浩。然。の。面。個。の。暴。雄。鹿。榜。の。夾。衣。と。裳。短。衣。被。下。し。て。奇
物。作。り。の。山。刀。と。瑠。降。の。腰。の。跨。身。長。より。高。た。草。苜。其。中。より。突。然。と。頭。れ。出。て。去。向。の。路。の
立。寒。き。素。藤。と。位。と。疾。視。を。ま。れ。行。人。命。惜。の。盤。纏。も。衣。も。遞。与。し。て。尚。又。惑。で。不。字。の
の。直。草。行。の。星。左。別。る。刃。の。ま。れ。筆。の。り。足。を。覺。期。と。せ。と。權。の。訛。聲。順。刀。見。光。の。と。引。抜

た。の。登。時。素。藤。吉。毛。の。謀。を。切。解。く。立。と。投。指。て。立。對。し。う。冷。笑。ひ。噫。嗒。ら。り。似。而。非。前。の
徑。們。獨。行。む。悔。り。て。虎。の。鬚。再。掖。く。鼠。の。輩。頭。顛。と。垂。糸。も。出。る。秋。の。り。せ。も。果。を。兩。個。の。強。人
眼。と。瞪。り。聲。苛。立。て。命。知。ま。の。假。猛。者。息。絶。る。折。後。悔。ま。本。言。を。ま。ぬ。と。左。右。より。數。多。く
因。の。と。引。外。と。抜。合。し。る。刃。の。電。光。二。人。を。敵。多。小。撓。ま。を。去。り。踏。入。り。術。と。盡。然。一。も。修。煉。の
刃。尖。の。當。難。る。兩。個。の。強。人。東。へ。投。て。逃。走。る。と。素。藤。透。き。趕。鬼。て。ち。こ。の。ま。を。幾。多。く。花
さ。路。の。秋。草。の。中。に。掛。る。鉤。索。を。忽。地。脚。と。騰。り。て。憶。を。撲。地。と。滾。び。さ。る。左。右。の。草。花。の
蔭。の。兩。個。の。強。人。走。り。出。て。起。ん。と。春。蟻。く。素。藤。が。も。と。柱。け。足。と。推。縮。め。く。十。重。井。文。字。の。結。紐。の
け。の。當。下。逃。る。兩。個。の。賊。も。走。の。か。ら。う。ち。を。以。て。這。奴。聊。本。事。の。買。買。骨。と。折。せ。か。ご。の。生
拘。り。た。れ。殺。ま。る。易。う。い。で。く。の。ひ。つ。も。刀。と。抗。て。破。ん。と。せ。し。と。伏。家。の。兩。賊。推。林。め。て。や。と。奇。寺。這。重
中。屠。の。七。の。骨。と。折。る。功。を。え。い。道。行。裏。の。重。け。る。獲。の。必。ま。う。る。べ。い。這。伏。宿。所。へ。お。て。還
て。頭。領。達。の。箇。様。々。と。報。急。拵。栄。あ。ん。介。と。野。敦。は。ま。る。と。の。り。逃。る。強。人。們。の

共侶の點頭て然る活とて扛りて自ら足を拾けよ由断して啖ひ着れるの貫目あり四人持
 ても好荷をとりたる自ら散動せりて宙吊りて野を西へ幾町も多しおぼやかりし介程素藤は
 賊の圈套に乗せられて既小槍の多し争ふとも益事と思ひ絶つもの死活は他
 儘に腹裏に思ふや我は是世不知れる山賊の獨子也今這奴が暴拵我亦生
 多し不慣覚業多し糸綱の拵了と廢ても争半年争ふて這勇徑們が死を死
 め得失自他の差別あれも現川幸ハ川山幸ハ山で終ると又鄙語も今我上と覺期の逆
 懐のへ品出集る就鳥野棲む虎の勢ひ竭て倒れ死と等の外ありける却説件の強人
 們の素藤とてゆと約莫半里餘ありて樹柵間を越し番山の中へ最荒く廢寺の門内へ
 扛入れて終に残る所化寮とて緑頬の下に却居て奥へ知せ暗跡多し一個の賊の幼
 附て衣領の掛る叫子と瀧々と吹鳴る奥より出たる兩個の頭領燭を秉り刀を引提
 け半柄の縁頬の雙立ち左見右見て若們今宵ハ早より獲るあり候其甚麻公と問へ

大家跳びて頭領達所へけり亦例の曠野に我們四名綱を張てよ鳥がと等一黄昏
 時候這旅客が只一個裏に肩おと來おくれ我前後お立すれて先二人と素引見する
 思ふ倍する本事あり克を取ると易く引外逃走りて趕し七例の釣索に掛滾りて
 生拘り行裏の最重に肚に纏ひ路費ありん四人が儘骨を折て生拘られ野
 繁みせ細棍の尻おびて來れりの日獲させあひる新刀と銚まよるる人骨逞く肉
 かり見ゆと皆誇自報れ兩個の頭領うち合笑ひ點頭てそ然を骨の折れん
 現好肥る大漢を銚刀を究竟てとこのも共侶お近く立りて燭を抗てはんと
 うちも俱お敬馬にて和君の膽吹の小頭領源金太主と向れて訝る素藤の遠
 ち仰見て介の主們の 句 礪時願ハ 平田張盆作をいそ 思ひのり
 今宵の再會 句 我を救へと叫ぶを願ハと盆作の素藤に掛る素と遠く解きて
 且縁頬小請登まれば敬馬に呆るる下の強人頭を極はる跪坐ると然とて願ハ

盆作呵々とうち笑ひて若們の近江比這地で我の所属されぬと理の這方さる豫
 より噂をきく近江の頭領でござるぞと諭其四個の強人の俱に地上額とつて小可們
 眼ありき比叡も膽吹も知むと酷くを礼を仕ぬ允させ多とち陪話の素藤禁
 め尉めて命めて我身の造化を心竊ひ終つて送恨あるもあられ強人毎の奪略する
 行裏と菅笠と主返とて去きせと願ハヤと囁禁めて若們の柴折焼く快酒不盡の准
 備とせよ卒小頭領這方へと先立る盆作と俱の奥を伴ひける徳而願ハ盆作の素藤と
 奥有りたる坐席の上坐す請ひ茶と看めて送別後の苦樂と告る願ハ門の先を和
 君も豫美知るべし往る六月某の日和君の獨卒ハをねて京師へ赴はるその次の日の
 るの空室町將軍家の御説とて觀音寺の城より向られる緝捕の士卒千五百名何の
 程より寄るは山寒茶を飲み捕圍して猛可細入りり伏家の人々駭慌て一柱の防
 地を破り或の敷を搦捕られて落亡する稀なり登時我門兩名の折渡旋風二井栗
 井九郎們と共侶の稍一方を殺披給て死するも這那に立磨ひて七月の中流這
 地に来り這荒廢院を見出て隱宅せき思ひし先ちて這寺の住小賊五六名
 あり初に拒を容れり武藝ハ二の町をもと竟我門の戦員て住処を譲り下
 屬して俱に掙んと陪話し其意不儘して候ので夜掙は出まらる今宵和君とねて
 未だ四人も則先佳の伏家せしは他が外二人もを旋風二と井九郎が俱と夜
 掙は出され曉天をく遠るべし大頭領の京師へ腹のの奇病の年来の好
 牙發覺れ市正高梨氏の搦捕られりも之個の伴當共侶の首級と河原へ集れ
 たる那裏の沙汰の世の風聲不正の傳やうが和君の上のいも知れん何れも昨夕も
 隱宅もる旅より旅の這頭と徘徊をゆるんといへ素藤然氣もせぬ故意をかく
 嗟嘆と我も亦親の又膽吹の住処へ緝捕の向ふる風聲と多天津中を駈け

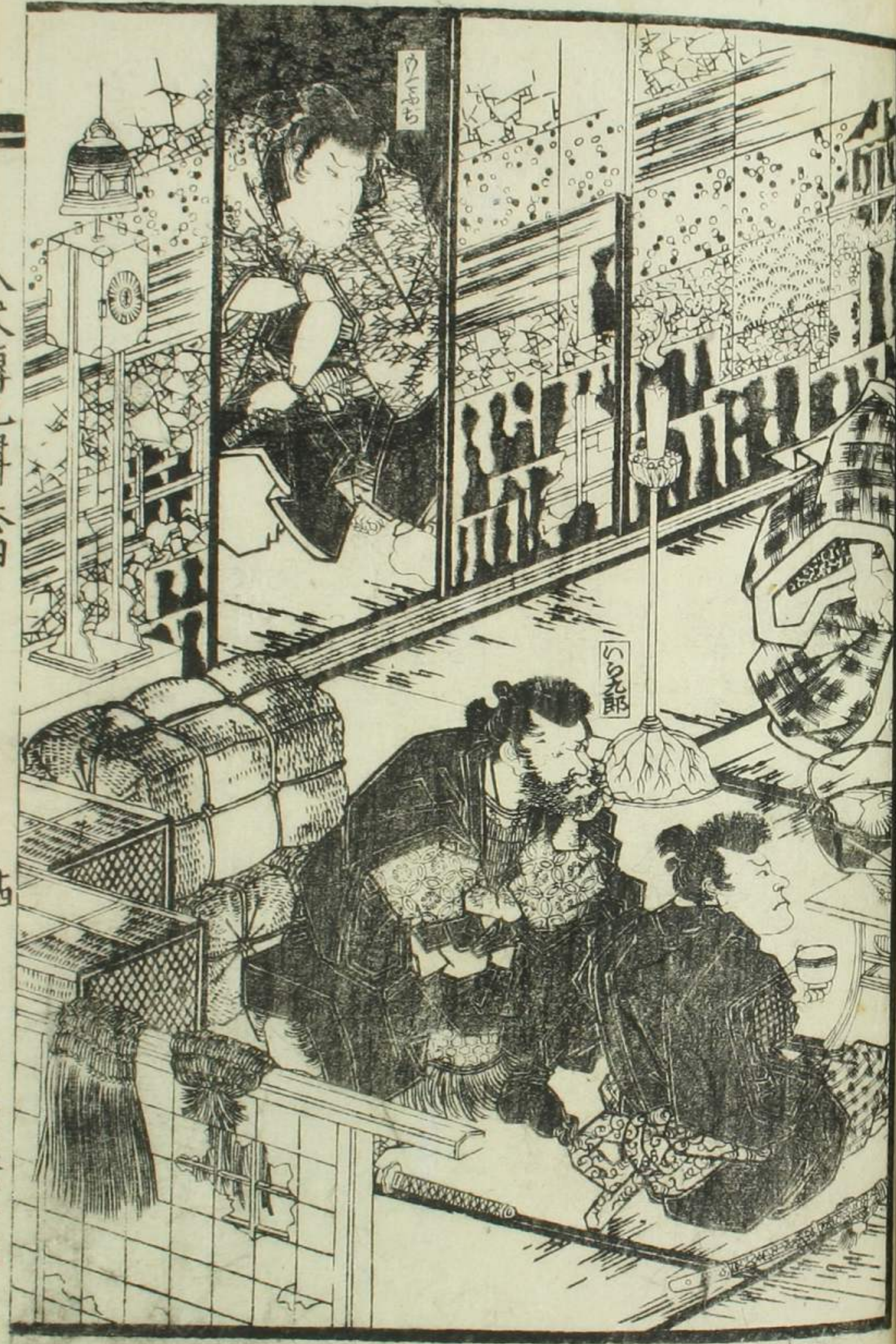
身と碎し或の敷を搦捕られて落亡する稀なり登時我門兩名の折渡旋風二井栗
 井九郎們と共侶の稍一方を殺披給て死するも這那に立磨ひて七月の中流這
 地に来り這荒廢院を見出て隱宅せき思ひし先ちて這寺の住小賊五六名
 あり初に拒を容れり武藝ハ二の町をもと竟我門の戦員て住処を譲り下
 屬して俱に掙んと陪話し其意不儘して候ので夜掙は出まらる今宵和君とねて
 未だ四人も則先佳の伏家せしは他が外二人もを旋風二と井九郎が俱と夜
 掙は出され曉天をく遠るべし大頭領の京師へ腹のの奇病の年来の好
 牙發覺れ市正高梨氏の搦捕られりも之個の伴當共侶の首級と河原へ集れ
 たる那裏の沙汰の世の風聲不正の傳やうが和君の上のいも知れん何れも昨夕も
 隱宅もる旅より旅の這頭と徘徊をゆるんといへ素藤然氣もせぬ故意をかく
 嗟嘆と我も亦親の又膽吹の住処へ緝捕の向ふる風聲と多天津中を駈け

怖れて京師へさるる。多依踵と旋りて美濃不赴に信濃不冷竹の筑麻の温泉店を逗留
 きて憶念も日と更なる程小卒八々我行東衣と撥擲して逐電ある。多れも盤纏ハ此
 懐おせしめあれいひて鎌倉へ赴いて世渡るよと求むと思ひければ這地まで多し和主們
 環會いひの舊縁盡し禍の及て福ひある人鉄くんと諄及し自祝して実説虚説機
 臨し口信して誘ふ願ハ由盆作も定然之と答けり姑且と素藤ハ又願ハ們小対
 して和主們へいひ思ふ都て山家ハ別世界と上侍君も又機と包る同僚も
 人の東西と我東西と富王候小等も一旦露頭及び細首と刃りて悪名と世
 送まの唐山とてハ山賊の天子小多し物も我邦也ハ伊豫の純友京師の保輔豊
 後の金山誰り一團と殺して子孫小傳ハのあん是もろて親方と盗賊の亦方
 國を盗して國主とられ城を空糶も城主小多しその方と盗賊の名も肩も
 榮の子孫と傳る今戦國の世も生れて智計の武藝もあま山家ハと朽果んと最

惜るるはのりて我稍思ひ起せん今番鎌倉赴くも然計較のあれ人時運小稱
 福ひありて我一城の主と形ハ必和主們を吸迎する折我身不隨て真の武士多し
 這荒廢院ハ優走と肉不棄して説誇れ願ハ由盆作も听々俱不苦笑い。そ
 漏りたるも前徑と做去極めて易く國を奪ひ城と合ふ企及びく不似。和君
 口の半分も然造化の日も中ハ我必隨身見空約束する者といひ吐とうち笑ふ
 折々多下の強人們ハ酒を盪り餘り漆ても素藤ハ薦めは是より主客由盆遣
 替り又巡りて酔し盡して暗譚の程小夜長秋の時候多し。子の中刻多し。ハ
 素藤ハ路の疲勞と告て不意辭しけり。因て願ハ由盆作ハ下の強人ハ吟明て小室ハ素
 藤の臥簾と儲け案内ハ立して明日と契りて多依小坐席小存ての睡ハ件ハ四個
 下の酒と喫し勞ひて旋風二郎と昔九郎們を還ると徐小等も。介程ハ素藤ハ酔て
 臥房ハ入りれも毫も心不由御行裏も刀も右左引着て陽を孰睡せ如く

折々軒の聲と響くと内外の動靜を覗ひけり。餘り一程の夜に既小丑三つと思時候外、
 人の足响と折戸と響きてゐる。是則別人を願ふ金作們が伏家の強人那井栗苛
 九郎と折渡旋風三郎が兩個の小嘍囉を従へ。夜拵了も果て還れる登時内も下れ
 賊一名遠く縁頼不立出迎紙燭を抗て去り還らせぬ。此造化の甚麼を。同の
 苛九も旋風三郎も共侶の古打鳴とて今宵の甚不獵也。立る腹も宿所末の横小る
 け東西欲一酒の酒飲と回つても今宵の草鞋と鮮葉とち登る縁頼の片隅の管
 笠あつてさうして那の什麼誰か坐を這儀も相心からぬ逗留客でもあつた。飲と回れ
 件の下下の賊の奥へ指す聲と低めて然る客も酒の酒の故の箇様々と那素藤の
 夏の趣盤纏をよめよめも空骨折る本意をよめよめ崖略と耳に報れ。苛九郎と旋
 風三郎の肩と頼りて領くの。そが伏奥へ赴け願ふと盆作の席と譲り芳びて賓客の
 酒の湯の然而不盡と驚き。今宵料を素藤と再會の吉の趣箇様々と其は来せ

苛九郎沈吟と和主門の源金太の口車も無せられて。皆実事と思ふ。知れぬ酒家の一
 切あるゆゑ。故と甚と推ても是夏胆吹の頭領が祇園會と親小京西んとい
 ち折る那人の賢達と諫めと頭領の聴せと。就て京師へ赴て。祇園神會がなり
 して諫林め一子と吸おされとの。いも算帳合を招くと慌く出て。前不都
 合必是搗鬼也。那卒八かか。折那奴。京師の凶変と。伏家知世と。源
 金太の報するん。あつて。那後生の親の有財と利。其與の件の変と。伏家秘して有涯
 口の金錢を攫ひて。術と誘へて卒八を。從て山寨を没落するん。然る今。那
 後生が盤纏を。該はる。といへ。旋風三郎も割膝と拵聲と低めて。井栗哥々の意
 見の妙へ。那後生の奸智も長と。折有財と伏家へ配分せ。ん。與不知。つ。文堂
 一百名と。毒殺し。お。思ふ。那折る緝捕使の大将。小己が生死存亡と。知せ。ど。の伎倆
 も。あ。然。凶。と。避。て。吉。趨。る。進。退。と。知。る。伏家の安危と。獨命。免。れ。與。不



古

八代傳七郎



紙戸と隔る
 素藤夜替
 眞の空山談
 偷聞を

八代傳七郎

支黨一百餘名を賣る。那奴が計較憎む。恨そのある奴を生拘て饒せのさるる飽
 まで酒を喫へて然るる管欵まのらと敦園暴く怨をたれ。昔九郎も歯と切りて今や論
 議の益を武藝不長て替力ありとも酔臥しれ殺し易ら。盤纏を奪きて腹を腹
 さん皆立まよふをせ。願八と盆作の傍痛は左右より推林せめ。咳はわらわ紛らしく小
 室へ指し示して共侶頭と掉ら。諫るや。和主們があらぬをの理をたあねどもそち
 推量して證據を一旦夏の錯誤を甚舊好の人を殺す後悔も及んや。且西三日
 這里留めて胸を撈ら。漆下板目れん然而那折の慮と実を知るや。あて和主們が目今
 論する如くを俱る段を旋りと結果るも遅延ある。且我々の儘一ねと只管禁め
 已ゆれば昔九郎の旋風二郎も争んはまを中腹立。此の茶碗酒の酌の壘。又
 けて喫むと數碗及びが。睡涼の酔臥して喚ぶ。盆作の旋風二さへ又
 起る。あつた。願八と盆作の術生醉と奈未餘民の腕の換と。木枕と這那兩個は頭の

下へ刺入れ。交と次の房へ退りて睡り。就寝す。然れ。這坐席より素藤が臥房を小
 室へ速く。素藤の始より。真も睡ら。げれば。件の昔九と旋風二郎が議論の趣を餘
 のまで大なる形。所會りて。且。驚は。且。怖れる。肚裏も思ひ。我身膽吹を脱去た。あ
 那折の計較。那昔九郎と旋風二郎が。猜し。これ。死。雖言の思ひ。做す。然も。あ。ん。幸
 ひ。願八と盆作が。諫禁めて。既。通。了。廿。留。害を。免れ。は。る。も。一。霎。時。の。程。走
 明日。倘。一致。せ。れる。主。客。の。勢。同。か。む。四。個。の。敵。多。單。身。あ。く。防。ん。難。く。は
 べ。所。詮。天。の。明。る。と。も。情。々。地。の。這。里。と。立。去。り。て。遠。く。他。郷。へ。走。る。あ。ろ。ト。思。へ
 ども。做。す。も。も。我。身。の。依。逐。電。せ。那。密。譚。の。怖。れ。多。も。影。と。躲。せ。し。と。亦
 那。奴。們。の。笑。れ。ん。要。を。あ。れ。と。人。根。性。潛。り。起。出。て。身。装。し。行。裏。と。斜。背。へ。投
 擧。げ。曾。て。楚。と。引。結。ひ。情。と。一。刀。と。腰。に。帯。て。偷。歩。し。近。着。て。坐。席。の。動。靜。を。窺。ふ。お
 願八と盆作の臥房へ入りて睡り。あ。れ。ん。只。昔九郎と旋風二郎の。衣。も。被。が。酔。臥。し。て。甲

已が自由とゆれ照目隈きた市中で那奴們我を何とせんやと心あちあちて經紀兒の廓
 立ちの飯と求め酒と喫て鰐程日いと高く昇りかゝ願八們へ赶ても來る目足より亦
 復路次とて死て次の日の武藏の柴濱まで來りける折は黄昏暮りか其頭の飯店に
 宿と投てその夜鎌倉の光景と向ふ小店小ぢ客と交り近曾の山内の管領様も相模の
 北條家と戦絶ひ那那里的神社佛閣も年々衰微して今昔の鎌倉もあはれ且藤澤
 中も腰越の中も新関を建られて他郷より來る遊歴人を容れざるやと嘆えり客入鎌
 倉へ赴たゆふとも自由とゆふ。況世渡りの便着るよふもあはれ世渡りの便着る樂
 遊歴せむ欲りある安房上総の優き地方を處へ近屬安房の里見殿の神餘
 與の義兵と起して山下定包と討滅し玉ひより以來安西麻呂の兩敵も朝日の霜の消は
 似く幾程もろくこびり然か上總の城主連も威風靡た好と通て那の屬と云ふ
 各一の武略のまゝ民を憐て租税と重くせん賢と愛て世傑を傲めぬとゆふ

なら義實主の比備田隱居すゆ。今に嫡子安房守義成朝臣のせられぬも亦
 是稀る賢君とて廣く仁政と布たぬふも上總のゆへ下總を半分いんぬ入ぬと
 ゆふ。客入然ても鎌倉もんとあはれ藤めもあはれ尚安房上總へ赴たぬ。這浦より上
 總も象良津(出船日毎あはれ)翌の早開附船を無走りぬひき一目と坐して下
 あのみ誰何と直実達てゆふ。その理あはれ似れ素藤の沈吟する頭と拾け小三對ひて
 いろ趣あはれ鎌倉とて由縁へる。名高き都會の福地なれば世渡の所由あへと思
 いら空馮を鈍望と表するまゝ。楫を合直して上總へもくべれ明日の船と馮む
 のと。小三再議及び果て退るの徳而素藤の詰朝件の出船も
 乗りし折々順風をければ十七八里の海上と一日も走るとその夜象良津來りけ
 る。歌店と定めて麻管を細引漁獵する浦の光景と珍らしく與あはれ一日二日と過す
 程小肚裏も思ふ。我身這地も由縁も坐と食へ箱も空と云ふ世の常言もあるもの

盤纏ばんせん一ひとかを使つかて減へらぬ金かね銭ぜにありんをとを旅りょ宿しゆく一ひと明あけ暮くれれの愚おろ魚うい見み。
 安房あきの國くに主ぬし里さと見み氏うぢの賢さとしを愛あいし士しを招まねくと人ひとの噂うわさがうりと那な里さとも亦また由よし縁ゆかりあり我われ。
 身みのへ近ちか江える山やま賊ぞくの獨ひとり子こをは只ただ是こゝ刑けい餘いの貨わ下くだ草くさ之の力ちから量りやう武ぶ藝ぎあれば一ひと米こめ當あらず。
 戰場せんじやう小こ甘あま物もの不ふ遇あひのわらひは信しんれば何なにを得え意い不ふとを那な里さと仕しを求もとむは是こゝ亦また要えるは所ところ。
 仍い所ところ詮せん本ほん州しゅうの貧ひん民みんの錢ぜにを貸かし利りを腐くさくて恩おんを施せし交かを結むすむは做なすはあのりやせん。
 亦また介け介け友とも友ともとを輒あく人不ふ談だんから且ま身みの落お着ちくは定さだめしては助すけ助すけるは友とものいでは。
 來きもは先ま先ま便べん宜いの地ち方かたと擇えらむは膝ひざと容ゆるみをあくとあらしと主ま意い既い決けつめられば亦また復たが上かみ總そう。
 十二じふに郡ぐんとい隈かもろくは徧へん麻まるは程ほどの年としの冬ふゆ十じゆ月げつの初はつ旬じゆん夷えい瀋しん郡ぐん館くわん山さんの城じやう下くだるは普ふ善ぜん。
 是こゝ後のちと喚わ做せま村不ふ來きまりのこゝ地ち壽じゆ永えい元げん曆りきの年とし向むか録りく倉くら將しやう軍ぐん難なんの功こう臣しんらる上かみ總そう介け平へい。
 廣くわう常じやうが館くわんありは外ほか大だい城じやうの今いま館くわん山さんのい名なの送おくりて殿てんの基もとと喚わ做せるは外ほかもありは又また蘇そ利り。
 八幡はつぱんの神かみ社やしろありは上かみ總そう介け廣くわう常じやうが宇う佐さの宮みやと稱なづせし又また西せいのこゝ正せい八はち幡ぱんの神かみ社やしろありはあらもあらず。
 廣くわう常じやうが讒ざん死し後のち鎌かま倉くらをた建た立たせしるは又また南なんのこゝ諏す訪ぼうの神かみ社やしろありは其その社やしろ頭あたま最さい。
 大だいなる樟しやう樹じゆ一ひと株かきありは又また同どう國くに長ちやう柄へい郡ぐん上かみ御ご村むらのこゝ諏す訪ぼうの神かみ社やしろの側わきにありは大だい樟しやう樹じゆといはれ那な。
 都みやこて一ひと對たいをたるは巨こゝろ大だい十八じふはち圍いありは云い根ね根ね半はん石いし化くわしる幹かみの中心ちゆうしん腐くさ朽くては虚うつろなるは處ところ。
 宛あ洞どう窟くつ小こ相さう似しるは内うち中ちゆうの數かず人ひとを坐ますは且ま其その枝えだ葉は波なみ波なみ安やすとい言いふは日ひの光ひかりといはれといふは。
 信しんて地ちと距とほるは約やく一ひと丈ぢゆう許もとりは大だい枝えだ六りく岐ぎ分わけられるは其その間まの穴あなありは毎まい雨あめ水みづといはれといふは早はや天てんのこゝ。
 折をもは酒さけをたるは上かみ總そう介けのこゝ上かみ御ご村むらのこゝ雄ゆう樹じゆといはれといふは普ふ善ぜん村むらのこゝ雌め樹じゆといはれといふは惜おぼしみ。
 並ならび普ふ善ぜん村むらのこゝ何なにの年とし間ま放はな枯か果くわては件けんの社やしろ頭あたま小こ松しょう杉さきの年とし老らうては大だいなるは合あ抱だのこゝありは。
 抑おさ件けんの普ふ善ぜん村むらの上かみ普ふ善ぜん下くだ普ふ善ぜんの二ふた村むらありは蘇そ利りも亦また普ふ善ぜん村むらの屬ぞく村むら也なり當あ時とき民たみ屋や。
 一ひと千せん餘い戸こありは時とき館くわん山さんの城じやう主ぬし小こ鞠きく谷や主ぬし馬ま助すけ如ごと満まんと喚わ做せて夷えい瀋しん一ひと郡ぐんの領りやう主ぬし這こゝ館くわん。
 八代傳九車卷四

然しかも廣くわう常じやうが暮くれ下くだへまわらせしるは馬うまをた梶かぢ原はらをた會あひありは又また殿てんの基もとより東ひがし中ちゆう宇う佐さ。
 八幡はつぱんの神かみ社やしろありは上かみ總そう介け廣くわう常じやうが宇う佐さの宮みやと稱なづせし又また西せいのこゝ正せい八はち幡ぱんの神かみ社やしろありはあらもあらず。
 廣くわう常じやうが讒ざん死し後のち鎌かま倉くらをた建た立たせしるは又また南なんのこゝ諏す訪ぼうの神かみ社やしろありは其その社やしろ頭あたま最さい。
 大だいなる樟しやう樹じゆ一ひと株かきありは又また同どう國くに長ちやう柄へい郡ぐん上かみ御ご村むらのこゝ諏す訪ぼうの神かみ社やしろの側わきにありは大だい樟しやう樹じゆといはれ那な。
 都みやこて一ひと對たいをたるは巨こゝろ大だい十八じふはち圍いありは云い根ね根ね半はん石いし化くわしる幹かみの中心ちゆうしん腐くさ朽くては虚うつろなるは處ところ。
 宛あ洞どう窟くつ小こ相さう似しるは内うち中ちゆうの數かず人ひとを坐ますは且ま其その枝えだ葉は波なみ波なみ安やすとい言いふは日ひの光ひかりといはれといふは。
 信しんて地ちと距とほるは約やく一ひと丈ぢゆう許もとりは大だい枝えだ六りく岐ぎ分わけられるは其その間まの穴あなありは毎まい雨あめ水みづといはれといふは早はや天てんのこゝ。
 折をもは酒さけをたるは上かみ總そう介けのこゝ上かみ御ご村むらのこゝ雄ゆう樹じゆといはれといふは普ふ善ぜん村むらのこゝ雌め樹じゆといはれといふは惜おぼしみ。
 並ならび普ふ善ぜん村むらのこゝ何なにの年とし間ま放はな枯か果くわては件けんの社やしろ頭あたま小こ松しょう杉さきの年とし老らうては大だいなるは合あ抱だのこゝありは。
 抑おさ件けんの普ふ善ぜん村むらの上かみ普ふ善ぜん下くだ普ふ善ぜんの二ふた村むらありは蘇そ利りも亦また普ふ善ぜん村むらの屬ぞく村むら也なり當あ時とき民たみ屋や。
 一ひと千せん餘い戸こありは時とき館くわん山さんの城じやう主ぬし小こ鞠きく谷や主ぬし馬ま助すけ如ごと満まんと喚わ做せて夷えい瀋しん一ひと郡ぐんの領りやう主ぬし這こゝ館くわん。
 八代傳九車卷四

山と踊る城の當時上總ある処の二十六箇城の外を數代の舊家より如満の父
祖の肖を常酒と嗜む色を好むが為課役租税を重くして民の困苦をなす
妾の首飾と衣裳千金を費せども采地を神社佛閣の酷く頽破及び山音許
敢修復と云ふのれい嗷訴入淫祠とてその許さぬ罪を神界料を奪ふ言ふ
あの故那普善村の邊なる八幡諏訪の神主も他郷へ走り跡断絶と狐鬼の棲まふ
非道を神の祟事あらはれ是年の冬十月の肇より小鞠谷如満の采地も時疫暴流
初て病臥さるるりり都て疫癘の春首の間にそ流れまされ冬に至りて分る病着の
多く初るるもあふと看官思ふもあはれ安房上總の西國の東海陸地の盡るる且
山と背中て海に向ひ國を冬暖中春寒る土人を春寒を倒寒と喚做り然
ても何國も初冬最暖るも世十月と小春と唱上総の暖國十月小春温暖の
折時疫をさすべく又口の理の如く病疫の領主のみ招く所罪なり

民及びの風俗通本文あり城門火を失され禍池魚不及如。誠とるるに間
話除繁糸小程の素藤の折夷瀧郡も多普善村と過る程の冬目の首春る
とて黄昏時候より一歇店と求んと欲する村人都て病着あり但聞病悩呻
吟の聲戸々絶さるる宿借まくもあはれ素藤殆困果てせん術のるは隨路
宿せんと思ふ殿の臺の頭もあはれ諏訪の神社もとて只得く社頭杖をふる鶏
栖の側大樟樹の稀も老樹にけれ胆を淡く鶴立て観ると約莫平响許既りて
暮果ければ軀て社壇より登りて一夜と這里の曉さんと四壁酷く荒れられ必由
緒ある大社とあがり本社拜殿の死でざる九庸も人詰ねる檐傾は露墜
去柱斜の簷子の朽ても有敷系雨露を避るる足れり既りて小夜深く木林する
茂林目を洩さ寂莫る廟宇露最寒る睡られぬ隨ふる長く覺る夜
丑三時候あらんぞ忽地外面物ありて玉面嬢々々と喚ぶ聲を登時大樟樹の

下欽と云く。来る者誰と問ふ外面の物答。我は疫鬼。秋より後我黨の生旺の
 折小あつたも。今茲殊不温暖。これ這頭と聊徘徊して。土民と云く。病一。今より安
 房へもす。欲を和嬢の近比。まも久く那里不棲。これ困王の賢不肖政事の好否を
 大槩に知る。あるんその笑。向て進退を定め。思ふも。樹下の物答。我亦安
 房の困王。最堪。これ然。送恨と復さんと。思ふ。争何せん。那困王里見
 父子の智勇兼備の名将也。賢と愛一民と憐。内不酒色の驕奢。ある。外は苞具の
 貪林也。君正。君忠。我の故。便り。和老。那里。赴。毒決。行
 り。且。這地の民。毎病。臥。一人も死。是。時。病の
 勢。緩。を。外面の物答。死。今。旬日。死。病の
 死者。半。過。城。主。如。滿。の。非。道。者。神。の。怒。り。人。の。恨。を。致。す。民。の
 不。神。佛。と。深。信。の。者。甚。く。神。社。の。如。祭。祭。奠。の。礼。既。不。廢。れて。酷。く。禱。す。

及ぶ。尚。神。威。の。似。も。我。の。注。連。と。越。か。り。那。病。勢。の。急。る。及。び。各。の
 是。等。の。故。き。と。と。樹。下。の。物。冷。笑。ひ。神。の。火。威。の。ま。れ。か。く。ま。れ。這。樹。の。虚。の。神。水
 の。黄。金。と。漫。ま。り。一。晝。夜。不。し。這。水。と。病。人。の。飲。む。病。着。立。地。の。瘴。果。人。尙。も
 理。と。知。る。名。醫。業。遇。つ。折。和。老。誰。何。ま。と。と。外。面。の。物。推。禁。め。て。不。然。る。の。の
 ぢ。も。あ。れ。維。そ。と。知。る。醫。師。も。も。這。頭。の。民。領。主。の。與。小。年。々。遺。令。れ。て。圓。金。一。枚
 持。る。い。や。あ。か。その。折。當。処。を。去。り。鳴。呼。る。の。と。敦。園。に。是。の。後。怪。物。の。問。答
 寂。と。音。絶。て。篋。子。の。下。の。鳴。く。蟋。蟀。の。聲。耳。の。幽。不。せ。け。り。素。井。藤。の。憶。い。も。怪。物。の。問
 相。譚。ひ。の。支。の。趣。と。現。も。果。て。且。怪。ま。る。肚。裏。小。思。守。今。宵。外。面
 の。來。客。物。の。玉。面。嬢。と。喚。か。け。て。問。答。及。び。の。世。の。疫。鬼。も。又。玉。面。嬢。と。喚。れ。り
 則。是。木。精。也。那。樟。樹。の。精。灵。也。あ。ん。ん。如。ま。れ。這。地。の。民。の。今。時。も。疫。病。の
 城。主。小。鞠。谷。如。滿。の。惡。政。非。道。の。所。以。と。い。へ。我。那。民。の。病。疫。を。救。ふ。恩。と。施。さ。ぢ。

必我を徳として。竟不羽翼とる事とあらん。人望我傾く時、那如満を推し、我
 館山の城主とあるも、亦その折の運ぶる下。小銭猶と捨むるべし。大利とらん
 や。噫、此をゆめと胸計較む秘密の鬼胆曉るを逢しと等程の約莫二晌
 許しと、鴉の茂林を離る聲、那這不ゆえけり。登時素藤へ行菓を收め、五百
 両の金と皆出と。百両毎の封皮と折紙と、小袱小包と携り、大樟木の下赴、左
 右と攀登る小少枝、不熟れば、一丈許上まで分け、六岐の枝、不乗るとして、先
 枝の間を、虚の中、小とさし入、底の深淺を試る。その水の冷身、骨の徹り、堪
 かて、辛くまで指さした底まで届はり、候て、心安くと、小袱居る居る金の選
 もる木の虚、水中に沈する枝より下る、雨輒とて、準備を多も敷きければ、又那這
 と、巡る小這本社の後、老て大なる栗樹あり、折々冬の塵、落るれば、落る栗子
 朽もせ、まらり、あつ、究竟と拾摺りて、燧と合、出落葉と、白て、火とて、これをうち喫

ふ、二食の飢と、凌ぐ不足れり。信而、這神社の詣、ある村見も、欲得と、ある、全村都て
 病臥され、や、詣る者、あつ、と、等程、第三日、朝辰、牌時、候、病體
 ひ、一個の後生、竹枝、携り、辛うと、詣、ある、あり、その人、拜殿、あり、朝、ひ、堂、を、鳴
 ら、願、と、て、黙、禱、約、半、晌、許、あり、身、と、起、と、か、去、んと、せ、程、素、藤、や、と
 喚、禁、め、和、郎、の、什、麼、何、里、の、人、を、重、病、の、も、瘡、ら、せ、行、步、難、美、の、為、体、と、我、外、参、り
 又、の、心、に、我、の、仙、傳、の、良、茶、あり、人の、病、疫、と、救、ん、與、諸、國、と、遊、歴、する、と、え、一、病、着、と
 救、ふ、と、ら、れ、て、件、の後、生、の、訝、り、き、素、藤、と、は、ど、と、ち、目、成、て、そ、を、救、ひ、た、と、は、い
 小、可、の、程、遠、と、ぬ、上、並、善、村、の、井、客、碓、谷、沙、八、が、孩、兒、也、褚、九、郎、と、喚、做、ま、の、今、茲、に
 時、と、ぬ、病、疫、也、全、村、枕、と、拾、り、ぬ、る、一、我、家、の、上、の、二、親、あり、下、の、弟、あり、妹、あり、皆、大
 病、犯、され、て、鍼、灸、茶、餌、も、驗、る、露、命、旦、夕、の、逼、り、たり、そ、が、中、小、可、の、病、痴、聊、間、あ
 り、辛、く、と、這、御、社、の、詣、て、親、胞、兄、弟、の、病、鬼、退、治、を、祈、る、の、は、抑、身、の、何、國、の、大、人

也。然神茶傳受て作善と旨くめりんと同返されて。素藤の杖より々領
 記。我の原是京家の浪人ト部某と喚做まの。陰陽の術醫巫療の神方先祖相
 傳の秘録あり。世に萬人の災厄を救ふ為諸國を遊歴して這地來りぬ。
 日這館山の城下で歌店を求んと欲す。戸毎皆時疫を病臥し。美引
 の事。已とぬ。這神社に通夜とて夜を曉まで程憶る。神の示現。雲霧の
 社頭より大樟樹の虚を神水ありと知り。その神水は黄金に浸はると晝夜よく作れ水と
 汲きて毒病人の飲せしが病疫立地を癒る。等節の杖を拂ふ易く我幸い
 那這受て受る謝物多くあり。その金も成那木の虚に投入し沈ま。却村人の來り
 ぬ。既小を三日及ぶ。和郎の身病いぬ。那大枝の登りか。先我水と汲て
 せん。その身の這里で。試喫む。その餘の家ありて還りて。親胞兄弟の薦めぬ。死に起
 ちて生かす。壽と増。老に至る。和郎一家の病疫を驅除んと。

疑ふべし。用意とあり。神酒壇の口缺。社壇の下より金を出し。推考て樟樹の大枝の攀登りて。虚を推入。虚の水十分盈。又底深くを
 入れて。圓金一枚を出し。徐に樹下下り立て。然而。褚九郎示さ。這金。那神水。浸措
 たる。徴る。水と俱に和郎の命を食ひ。這里來て。水は。金も。命も。人別
 一枚の外を許さば。其の隈。と。叮寧に教諭して。件の水を飲し。けり。現熱病の劇に
 の。熱邪腸胃と焦。折黄金一味。水の煎火。冷。飲せ。其の熱と治。を。正
 受。然。素藤が鬼語。して。後。の。如。く。做。せ。如。自然。と。其。方。稱。ひ。し。褚九郎。件の水を
 受。戴。飲。る。時。程。を。快。然。と。心。地。清。す。る。一。の。雀。躍。る。不。勝。の。飲。み。素藤の
 神。と。拜。して。感。涙。坐。お。找。む。覺。直。と。頭。を。拾。け。小。可。們。幸。ひ。慈。悲。廣。大。の。大。人。の。救。れ。く。
 茶。水。即。效。ある。の。海。主。が。塩。焼。く。辛。に。世。の。圓。金。一。枚。惜。氣。も。あ。く。貸。せ。る。德。義。大。仁
 見。身。る。誰。の。由。年。々。小。鞠。谷。殿。の。責。命。を。て。全。村。困。窮。せ。る。も。な。れ。刺。流。行。病

里の神主おせ神慮の中稱ふと素藤小吉の族と集めて件の社地家造
 作り其里素藤之請程と命と聞く皆謹んで帰依ののく是より素
 藤の母黨の氏を冒して墓田權頭素藤と名告り心ある神小仕加持祈
 禱と宗と一なるその法術と知れども信まの心して極め效驗あはれい神仙と
 稱へ尊敬して敢て誨めらるる事ありて素藤の奴婢七八名と任ふを以て萬
 支の毫も不自由の既五六百金と村人們は貸し給ふ事數百金の貯積あれは利子
 たらせりかゝる事ありて又貸けり是も趣早晩小館山の城内も貸す小鞠谷の
 家臣們も素藤が加持を請ふ難病速疾もあり或はその金と借る食病立地
 安んずるの素藤賃殖の人も士農工商尊信して東西と飽るも借財
 期違返さるるの事ありかたの稔許の程村の二の言田家とる意は素
 藤の山賊但島業因が子も料も鬼語と聞く六百兩の金と惜まはる樹の鹿水

漫と夷瀛一郡の人の病疫の死起生果回陰徳の陽報あり其頭の土民小
 尊信せられて信は福を以てその胸計較ありて眞実陰徳ある人の活
 功あり善報ありとまがく況眞実慈善と施と好むの勉て人畜の救厄と
 放生と旨と久し徳と積むと善報子孫及人亦何の疑いあるや惜む
 素藤も是れを知らず守りてその枝を止ら他が親の積悪を債ふまを
 奸計の圖不當より止る處を知りて後竟自身を殺す天誅を免れざり然
 世人一善と約ふと必一善の果報あり又一惡と約ふと必一惡の果報あり
 善惡の心報の宛環の輪を以て小人の僥幸氷の山雲の佛久々報を知る
 の間話休題介程小館山の城主小鞠谷主馬助如満の墓田素藤が吉の趣を
 信じて傳つて怒ると天々言ふ一個の老黨免巷幸弥太遠親と喚做る身邊近
 く喚とて敦園に猛く吩咐る若們の知事近地より我米地小墓田權頭

素藤と僭稱する。一個の檻杵見あり。愚民を惑へ。怪談妖語のさるさる。神と籍
 鬼の托と邪術と初めとつて。加旃恣の諏訪の神社の祝ふ。社地と占て那果
 居宅。不義の富誇り。我を刺ると告る。今速に搦捕て民の惑ひを醒まし
 後漢の米賊張角の妖術。汝那里ら向ひて搦捕て牽のて来よ。立地不鼻
 首を。那妖言の根を鋤く。愚民們尚悲を請ふ。妨るるもあふ。丹も悉搦捕らね
 人も漏る。夥兵を居居俱く。尚も不餘る。斬棄す。快
 快せ。性急る君命推辭。由も遠親の遠く。言葉退。先隊兵と聚合
 け。未だ件の遠親も。尙尙小愛子の難痘也。命危る。折素藤。祈禱を請ふ。死
 ざると。只顧他。尊信を。交の。後又素藤。金五十兩借
 る。他借の。贖ひ。恩誼の得意人を。緝捕使。命せ。心
 困。果。思。諫。聴。情。地。村。長。告知。素

藤と走する。あ。尋思。一。封の密書。密使を。並。善の村長
 許遣。村長の。警。憂。村人の。皆。共。侶。素藤の。宿
 所。取。合。衆。議。と。凝。り。と。送。り。と。唄。と。素藤の。謀。く。氣。色。を
 怖る。村人們を。推。鎮。め。各。々。然。る。氣。の。緝。捕。頭。人。遠。親。我。と。断。金。交。り。他。が
 寄。來。折。を。進。退。を。定。む。姑。且。酒。家。ら。ち。任。ね。の。大。家。争。ひ。難。で。心。の。思。ふ
 の。黙。止。し。時。移。り。小。程。免。巷。幸。弥。太。遠。親。と。村。長。内。通。を。速。素藤
 落。遣。り。今。の。時。候。多。く。思。心。色。の。素藤。兵。四。五。十。名。を。從。て。諏。訪。の。社。頭。に
 赴。り。先。素藤。の。宿。所。の。四。方。と。韓。々。と。捕。卷。せ。し。家。の。内。人。居。居。皆。籠。り。し。客
 人。咳。の。聲。少。く。訴。と。夥。兵。を。禁。め。獨。背。門。より。找。入。り。素藤。み。ら。し。出。迎。て。客
 房。伴。ひ。け。り。事。の。為。体。村。長。と。首。と。究。竟。の。社。校。百。名。許。坐。席。の。左。右。不。羅。列。し。客
 遠。親。の。思。ふ。も。似。き。見。れ。て。找。難。る。素藤。の。殷。勤。上。坐。席。を。讓。り。聲。情。め。

談まふやう在下さる罪をけれも。小鞠谷殿の憎れて。緝捕使とあふ。尊公憎む地を告
あつて他御へ避よと誨ら。文遊の情を多くゆ。あれもあふ身惜む不足の憐む下。
這村人們が非道の領主を撩役せられて。那悪政不堪れ。俱他御走んと。民入都て離散
廿六明日より誰の咄え安房の里見が攻敷れ。必隣郡の城主を累られ。在下尊公を相
まふ極て一郡一城の主なるを福艾の貴相あり。あの折を。と筒様を。恠々の計りぬ。在下
一臂の力を勤めて。大事立地不成就ま。是民の帰く。処天の與るを取られ。反て外に受るを
あ。深念と決めぬか。と理のゆり。と哄誘。其遠親忽地心動て。沈吟。半响許。やう
な。ふ頭と拾げて。先生の教諭。寔不理あり。卑職の徳あり。と。幸ひ。一七。邦市助。ゆら
大事必成りぬ。せ。遮莫世の祇逆の罪人。と。争何せん。と。素藤推林。示。昔唐山
周の武王。と。やん。その君。暴悪の紂王。と。討滅して。民の塗炭を救ひ。聖人。と。稱り。あ
三尺の童子。由。知れり。誰り。貴公。と。祇逆。と。い。ん。か。か。決断。あ。ぬ。と。説。れて。遠親。再。説。あ
か。む。竟。れ。の。説。不。儘。せ。る。素藤。の。又。村。人。們。の。筆。算。と。示。暗。號。と。定。る。大。家。都。々
その。あ。ら。う。と。假。素藤。と。紐。結。り。て。その。両。力。と。持。り。あ。り。又。素藤。と。合。り。の。あ。り。の。餘。り
都て。素藤。が。與。領。主。恩。赦。と。い。ふ。と。唱。て。鎌。腰。短。刀。と。懐。ひ。俱。城。内。赴
は。け。の。徳。而。遠。親。へ。外。面。者。一。置。る。親。兵。們。と。知。り。て。素藤。と。村。人。們。が。先。ち。て。搦
捕。ぬ。ら。し。て。他。們。も。相。俱。と。是。等。の。下。し。ゆ。え。あ。げ。大。家。路。次。心。屬。と。實。事。を。な
の。春。の。ま。ま。あ。ら。く。不。言。示。し。て。館。山。の。城。か。り。あ。る。程。を。名。昔。昏。あ。り。の。け。り。介。程。小。鞠。谷。主。馬。助。如。滿。の
鬼。巷。幸。弥。太。遠。親。の。素藤。と。搦。捕。て。牽。り。て。あ。ら。う。と。村。人。們。が。歎。泣。て。恩。赦。と。い。ふ。と
後。の。跟。蹤。を。推。參。せ。と。い。ふ。支。の。趣。を。ち。ゆ。て。怒。り。堪。ぬ。有。司。們。の。燭。を。秉。し。て。問。所。の
上。坐。ま。ぬ。て。あ。ら。う。と。先。素藤。と。牽。居。さ。し。て。み。ぐ。罪。を。責。ん。と。支。の。紛。れ。小。村。人。們。の。扇。の。内
へ。綱。入。り。の。登。時。鬼。巷。遠。親。の。支。の。趣。を。ゆ。え。あ。げ。と。縁。頼。の。あ。ら。う。と。登。り。て。ま。の。身。邊。赴
く。と。如。滿。の。勞。ひ。て。その。美。と。听。ん。と。あ。ら。う。と。處。を。遠。親。送。さ。し。腰。刀。と。接。く。も。あ。ら。う。と。如。滿。の

首と托地と敷も落せし吐嗟と駭く有司の毎もれ幸弥太乱心ある於主君と弒せ大
 逆無道其処る退せと罵りて楯捕んと闘はる當下遠親聲高き人々の悟せ
 や如満年来暴悪する苛政不堪ぞ民皆叛けりとの故我里見家の密意不従ひの天
 誅とゆふの濁と去りて清は就る俱ふ栄と子孫傳へん倘る不惑して狐疑を皆如
 満のさるるべし快面縛して降参せんと喚らる左右當りて躬方と満と戦ふは信り
 程小素藤の假不楯る綁縛の索とるを振解捐て村人持する刀を令る縁
 頼より走り登る遺り下を柱る夥兵を物とせ右と左斫伏せり今この支の勢
 ひ小村人も亦起り立て利鎌短刀と打振る俱ふ戦ひを幫助へる夥兵は有司の
 比皆一辟の所立られて書院のく逃走ると遠親の趕捨て引返り主の首級を素藤
 せんを頭髪と梳と引提てを身邊近つる素藤を奪えんとしと唾して抜
 りての涙と遠親の頭と敷られて脚空する小軀も楯と劔手りて漬る血の側を杉戸の

鳥を深做せり浩処の城内る老黨若黨我名飲兎巷遠親を敷る捕ん
 とく雜兵多く驅集め短鎗を引提鋏又るどと推巧を比皆廣庭より稠
 入りと素藤誦を遠親の首級を刀大串に持ると縁頼は立迎へ既下近
 城の士卒を差招けり聲高同やう小當城の諸士これを奪え兎巷遠親謀叛よ
 てもその君如満主を弒する天誅一垂時も借まへる不佞料を諸士代り
 既小遠親を敷る捕らるあどりて當郡の民我を推して俱小城を守らんと欲
 是天命の歸る處勢ひ推辞とゆるむ權且當城を預りて各々共言を
 謀らんとす許容せしめやと詞巧解示をそ前後左右の究竟の村
 人百名許利鎌短刀と多く持り勢を怕る面鬼の侮りかたえたる小
 當城の士卒の畏るその親族の如満の奴不觸れて討せしめりあり然
 ても嬖妾の與り費を厭り諸士の俸禄を優ふせりいと恨く思ふ



六代傳九郎卷四

文治堂藏

多く且素藤小惑され。他を仁義の君子と稱て。尊信するも。勘く取らば。藤が
 立地の逆臣鬼巷遠親と。數々捕まると。徳と。都て帰順の思ひあり。登時當
 城の老黨奥利本膳。淡木碗九郎と。喚做まの。支の勢ひを。阿谷々々と。鉾を
 倒し。刃を。鞘に。跪せ。答る。如。滿。暴。戾。年。と。累。と。逆。臣。の。與。小。祇。せ。れ。嗣
 男。女。の。子。達。も。あ。る。介。介。る。先。生。立。地。の。逆。臣。遠。親。と。誅。し。ぬ。い。て。當。家。の。與。小。大
 功。あり。願。ふ。今。より。主。君。と。仰。せ。犬。馬。の。力。と。盡。し。ぬ。見。ぬ。ゆ。り。の。心。と。恥。て。降。参
 あり。後。方。不。從。小。城。の。士。卒。們。齊。一。千。載。を。唱。へ。け。抑。這。一。卷。兩。回。の。水。滸
 傳。る。王。慶。の。小。傳。の。筆。小。擬。一。る。狄。都。々。八。大。士。の。事。小。干。ら。ぬ。肱。教。員。の。話。小。似。し
 是。後。回。の。襍。抄。也。這。事。多。く。あ。る。ぐ。毛。畢。竟。素。藤。が。奸。計。と。し。て。館。山。の
 城。と。横。領。も。る。後。の。話。説。甚。麼。を。そ。ら。次。の。卷。小。解。分。る。と。聽。孫。か。し。
 南。總。里。見。八。大。傳。第。九。輯。卷。之。四。終

南總里見八犬傳第九輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第一百回 舊黨招の應と土民益愛ふ

却説。葛田權頭素藤。奸計既の。行。れて。館。山。の。城。を。獲。て。よ。り。先。鬼。巷。遠。親。が
 三。族。と。誅。戮。し。て。そ。の。叛逆。の。罪。惡。と。他。一。人。小。負。し。る。陽。光。の。賢。良。貌。と。先。代。の
 惡。政。と。改。む。と。い。ふ。と。多。く。民。と。接。し。と。愛。し。て。廣。く。施。と。好。む。似。れ。誰。も。その。内。心。と。賽
 時。政。小。王。莽。の。綽。號。負。せ。し。よ。り。あ。り。と。知。る。死。年。來。小。鞠。谷。如。滿。が。暴。虐。小。周。敵。と。る
 民。の。心。を。士。卒。們。に。半。馬。と。兼。替。る。賢。君。と。稱。賛。ま。る。皆。歡。び。て。仕。へ。り。當。下
 素。藤。思。ふ。我。の。他。御。の。浮。浪。人。也。猛。可。夷。瀕。一。郡。の。主。小。さ。り。當。國。の。武。士
 們。が。媚。く。あ。り。と。他。們。の。才。一。城。の。小。敵。と。れ。怕。る。不。足。と。只。左。不。就。も。右。不。就。も。悔。り

かたの里見の義実義成相續して既の上總と併吞され當城も那麻下不在り
 當初里見義実が結城の城を没落して安房(流寓)し折神餘が與ふ義兵起
 きて那逆臣定包を討て長挾と獲らうと我が遠親を誅戮して夷瀧郡司を
 討つと這那更に似れぬ時と勢と同ト今當城の士卒們は我身の羽翼あるゆゑ又
 那金碗考古の智勇に似るものも譜第恩顧の老黨小杉倉堀内の如記のあり
 ぬ然るも里見小看と察して獨立割居の胆を張りたる大敵と招く姑く他に従ふて徐
 謀るふとあつとと尋思とあつとと隨便浅木碗九郎并小奥利本膳より
 示し使として準備の賢と察し安房の稻村の城遣して里見の四家老杉倉堀内
 東荒川們不就して今番館山の城の内乱と訟て更は徳々といふも又由當城の王小鞠
 谷主馬助如満の年來暴悪の宜四訓ありけり性日家臣免卷幸弥太遠親小敵
 小へも文字あり武井勢長ら且心操慈善ホト人の息愛ひに分りてヨリありあをの
 義の與那那逆逆とるふ治堪む矢庭に降魔の利劍と振きて逆賊遠親を誅
 たる其功寔に莫大なる故に小鞠谷の家臣夷瀧の土民們推て素藤と主將とて
 俱に孤城と成りて在り是素藤が次心一郡の王よりふあをのいづれ大方のあん隊の
 屬に勉て忠義を盡さん與の當國に送るも日裏ふあをのいづれも尚野心の者
 るにあらざる素藤奉公の初折々心と其頭を潜めて虚実を探り邪正を現し諭さへ
 へ諷諫と悖逆の惑ひを論をいふも従つてその折御征伐をたまはるいづれ
 先鋒たす欲は是素藤們が情願は是より兩個の倍臣浅木碗九郎嘉嘉保奥利
 本膳盛衡們瑣小の土宜と獻呈して死言と伺ふの今より一年毎に奉獻
 欠くは支一毫も食言するは照據は徳をいふも家臣們が連署の起請文一本を
 まの口で口管免許と請ひける是より先義成王那小鞠谷如満の殘暴をいふ

あつとと尋思とあつとと隨便浅木碗九郎并小奥利本膳より
 示し使として準備の賢と察し安房の稻村の城遣して里見の四家老杉倉堀内
 東荒川們不就して今番館山の城の内乱と訟て更は徳々といふも又由當城の王小鞠
 谷主馬助如満の年來暴悪の宜四訓ありけり性日家臣免卷幸弥太遠親小敵
 小へも文字あり武井勢長ら且心操慈善ホト人の息愛ひに分りてヨリありあをの
 義の與那那逆逆とるふ治堪む矢庭に降魔の利劍と振きて逆賊遠親を誅
 たる其功寔に莫大なる故に小鞠谷の家臣夷瀧の土民們推て素藤と主將とて
 俱に孤城と成りて在り是素藤が次心一郡の王よりふあをのいづれ大方のあん隊の
 屬に勉て忠義を盡さん與の當國に送るも日裏ふあをのいづれも尚野心の者
 るにあらざる素藤奉公の初折々心と其頭を潜めて虚実を探り邪正を現し諭さへ
 へ諷諫と悖逆の惑ひを論をいふも従つてその折御征伐をたまはるいづれ
 先鋒たす欲は是素藤們が情願は是より兩個の倍臣浅木碗九郎嘉嘉保奥利
 本膳盛衡們瑣小の土宜と獻呈して死言と伺ふの今より一年毎に奉獻
 欠くは支一毫も食言するは照據は徳をいふも家臣們が連署の起請文一本を
 まの口で口管免許と請ひける是より先義成王那小鞠谷如満の殘暴をいふ

あふよりの。夏なつの。宜よろる。自よ恣ご暴り慢んの。罪つとと。糾とめて。民たみの。余あま炭すすと。極たんと。先ま隱か秘ひ使しを。
 りく。虚ま実まと。探させ。む。ひ。既すに。如ごと満みの家け臣しん遠と親しんの。又また諷ふう訪ぼうの。神かみ。
 主ぬし甚た田た素そ藤とうの。誅つと滅めせ。れ。一い郡ぐん民たみ安やす堵とせ。と。夏なつの。注つ進しんあり。折せ那な素そ藤とうの。い。ぬ。る。
 比ひ夷い瀆とくの。民たみは。病やま疫えきと。黄わう金きん水すいと。救きうひ。く。土ど民たみの。為ために。愛あい敬けいせ。れ。諷ふう訪ぼうの。祝いのちせ。れ。
 たる。夏なつの。顛てん末まつと。を。く。空そら知しる。ひ。今いま又また小こ鞠きよく谷やの家け臣しん們らが。素そ藤とうの。功いさ績せきを。許ゆる票ひょう。
 して。他たを。て。館たて山やま城しろ主ぬしの。做なす。け。と。請こふ。使し者しやの。口くち狀じやう折せ言げん書しよの。趣しゆ東とう六ろく郎らう相さう辰ちんが。披ひ露ろ。
 也や更さらよ。その。意いと。ゆ。り。く。即すなは使し新しん故この。三さん家け老らう杉しん倉そう木も曾そう介けい氏し元げん堀け内ない藏ざう人にん負お行ぎやう。
 荒あ川か兵へい庫こ助すけ清せい澄ていも。俱とも小こ閑かん室しつを。召めい取とて。件けんの。よ。と。評ひやう議ぎあり。今いま番ばん小こ鞠きよく谷やの家け臣しん們ら。
 請こ票ひょうを。館たて山やま城しろ主ぬしの。事こと那な素そ藤とうが。夏なつの。趣しゆ東とう六ろく郎らう相さう辰ちんの。石いし玉ぎよく似にた。
 牛うしの子この。羊やう似にた。賢けん奸けんの。も。知しら。ず。他た們らが。願ねがひ。依よる。免めん歎たん意い見けん什じつ麻まと。同どう。
 四し家け老らう們ら俱ともの。答こたへ。御ご諒りやう定ていは。遠と慮りよあり。然しから。れ。れ。も。素そ藤とうが。大だい功こうの。世よに。著ある。と。て。

心の邪よこしま正ただの。知しる。由よしみ。且かつ那な士し卒そつ士し民たみ們らが。望のぞま。儘まませ。る。夏なつの。秋あき異い日にち野のの。色いろを。そ。ゆ。み。
 所ところ真ま実まも。ま。折せ谷や鉞せんと。加くる。も。才さい一いつ郡ぐん一いつ城じやうの。三さん總そうを。併ひせ。御ご武ぶ畧りやくも。御ご征せい伐ばつの。
 輒ただ今いま功こうあり。賞しょうせ。ば。人ひとの。談だん論ろんを。争ま何なんの。艾あ臣しん們らの。迷ま意い衷しゆうと。盡じんて。談だんする。処ところ。
 か。の。如ごとく。又また賢けん慮りよと。旋めぐら。れ。も。あ。ら。う。と。宣のたまふ。と。義ぎ成じやう成じやうを。領りやうて。そ。の。談だん定ていは。至いた。
 極たせ。り。水みづ清せいれ。ば。魚うい住すまも。人ひと察さつる。れ。友ともと。の。古ふる語ごあり。と。な。れ。我われ猜さい查さ真ま遠と慮りよも。過あや。
 死しら。快たく。免めん許きよま。べ。れ。と。そ。の。談だん儘ままの。い。け。り。徳とく而にあ。の。次つぎの。目め碗わん九く郎らう本ほん膳ぜんの。義ぎ成じやう朝てう臣しんの。
 見けん参さんと。素そ藤とう館たて山やま城しろ主ぬしと。夏なつの。下した知し狀じやうと。賜たまり。け。れ。恩おんと。拜はい退たいり。出いて。館たて山やま城しろ主ぬしの。
 投なて。か。ら。あ。け。り。秋あきの。い。づ。ら。あ。ら。う。と。後のち甚た田た素そ藤とうの。逆さか旅りよの。柱はしら衣い華けを。穿うる。伴ばん。
 當あたり。徒たへ。稻いな村むら瀧たき田たの。西にし城じやう初はつ表へうの。式しき礼らい首くび尾び敕しつ正せいて。義ぎ成じやう并へい小こ義ぎ実ま主ぬし見けん余あの。
 折せ贊さんと。ま。あ。せ。牽けん出し物ぶつと。賜たまり。て。論ろん示しさ。る。箇こ條じやうあり。四し下げの。威い風ふう四し下げと。拂はらて。頭あたまを。拾ひろ。
 ぐ。ら。あ。ら。う。れ。素そ藤とう憶おぼを。汗あせ七しち礼らい小こ熟じやくと。暴あ夷いの。言こと来きの。外あ所ところ做し知し成じやう進しん退たい。



八傳七再家

五

大



多雲の富赤藤
酒色千軌る
願八盆作剪徑
昔好の書と得る



八傳七再家

大

る小贈られ金あれ思ひ隨ふ打扮下り連立て上総る館山と投てい程小約莫四
 宿あつりふし件の城小あまけれ城王の故郷に在り折舊好のり毎も見奉る諸
 ふふも素藤さるる對面して仕え九一禄と與幾程も登用して老黨の上在り
 けり又那麻葛馬心助の軍身も親弟兄も在り御高密使の立られて出たれを知
 るものも逐電さると思ひ六の同僚們が商議し支任と許しを奉る藤の知れ負
 きてさる沙汰の寝けり任而件の願八盆作が葛田の家の家宰ありより王の
 徳と知るるも亦も亦も修と鷹めり素藤の心憚りて春の花秋の月觀の興
 とと猛可土木の工と與て課役の民の艱苦と思ひ又或時の歌併田樂の舞臺を
 とと造らさる良材と擇り奇石と集めて費用と肩もせざる故に米邑の租税を
 ちち重くされども不足り借りと返さるる云云と許し有免と請ふ村長あれ素
 藤河々と冷笑して都へ夷藩の民毎の艱苦熱病を皆米死せざるを黄金水の

奇方にて救れらる誰が恩を又那病疫のり我の折金さへ貸て他らが貧病と
 せり毀置せし郵語の雨雲存て笠と忘る愚民の身勝る介る鳥許の白徒の搦捕
 首と加よ然るも嗷訴已ぐも忽ち下知り有司們件の村長を捕て獄金
 敷系にけり是を駭けり歎く村長の宅眷社客們的城主の家宰礪時願八平田張盆
 作の内縁と求め折觸々黄白と贈り只官恩故と乞ひける黄白の光の折も黄金
 水と其の效あらぐ村長は辛く死せるとはこれをも莊役と命放されて所持の田園と
 家庫も都て没官せられ是より水も飲めぬ下の窮民も憐れぬのり
 けり然る城主の非理の徴の素よりて其の老黨願八盆作が貧るも勘うな約莫
 夷藩の在りとの社客も經紀見も任て故の小鞠谷殿が優りありと嘆く那某
 甲の村長も徴して秋訴をせよものも罪せられぬを幸りて世の春も人心眞愛へ秋の
 ちちたる歎の露と共さる光陰と弥る米邑の民其惨に素藤の心術素も表裏

中。稻村の里見家。六年始の参勤寒暑の昔。同年毎小怠るごとく。且隣郡の城主
 へも好を通。人情を虧せし。最正首小交参。其の年来素藤の驕奢の風。鼓あり
 といふ。その内々のひりて。逆謀野の所行を。敢て非とせり。居るの年。麻止たり
 小文明十四年。との夏。時候素藤が愛あり。両側の側室とせ。朝親と夕顔。俱小
 時疫。小犯。され。長沙の術も。その效。まれば。素藤太。駭。真愛。ひて。信。折。虫。那。神。祠。多。水。を
 合。の。黄金。を。浸。して。用。ひ。必。即。效。あ。ん。例。の。樹。の。水。を。汲。合。せ。て。殿。師。小。奴。隷。を。従。ひ
 下。る。虚。とい。ふ。ふ。る。故。神。水。の。一。滴。も。い。ひ。と。報。る。と。素。藤。を。不。疑。ひ。て。其。頭。を。小
 なる。方。近。目。と。せ。て。走。得。ず。あ。る。水。を。れ。の。甲。斐。と。て。も。る。の。外。の。水。虫
 優。美。死。状。と。件。の。社。の。頭。の。神。を。洗。井。の。水。を。汲。合。て。提。桶。を。來。た。れ。素。藤。望。ま
 失。心。の。心。の。思。ふ。如。已。は。あ。る。れ。黄金。を。ま。く。る。水。の。一。宿。浸。して。次。の。日。も。兩。個。の。側

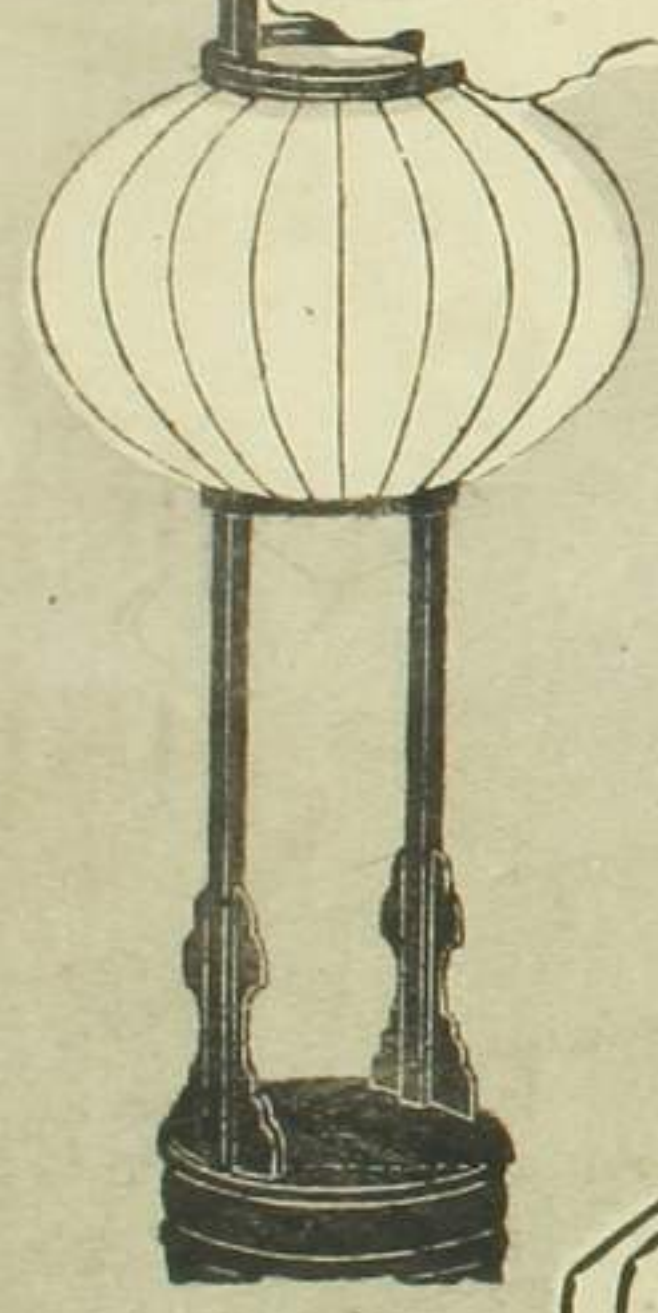
室。小。薦。ゆ。小。水。異。れ。や。效。は。多く。て。朝。親。の。朝。用。を。ま。る。夕。顔。も。亦。勝。る。日。影。小。立
 枯。れて。花。を。れ。宿。と。ま。素。藤。の。左。右。の。も。持。る。真。玉。を。碎。け。似。く。心。胸。胸。焦。れ。哀
 暮。の。念。ひ。か。ら。ま。ま。不。棄。ち。向。ひ。て。も。憂。ひ。と。帯。ふ。ま。ふ。る。歌。舞。艶。曲。も。倒。し。慰。心。免
 怒。り。三。伏。の。滯。暑。の。既。小。退。り。て。秋。風。涼。く。多。隨。小。無。箆。電。の。と。ま。り。け。ら。一。日。兩。を。殿。師。と。せ
 而。之。個。の。近。習。と。て。城。樓。小。登。り。て。那。這。と。城。下。の。街。衢。と。看。直。上。程。小。衆。人。齊。一。奔。走。し。て
 物。を。迎。り。似。く。と。素。藤。を。評。り。て。那。何。ぞ。と。尋。ね。近。習。の。毎。答。て。い。ま。う。い。き。聞。食。れ。と
 他。日。者。世。小。名。高。る。八。百。比。丘。尼。と。迎。る。あ。ん。と。の。素。藤。尚。あ。る。を。亦。甚。多。女。僧。を
 八。と。ゆ。い。回。ハ。然。し。若。狭。小。一。個。の。老。尼。也。うち。見。の。四。十。あ。る。れ。も。人。の。年。齡。を。回。ハ。八
 百。餘。歳。と。い。ふ。因。て。世。の。人。形。貌。若。狭。ハ。八。百。比。丘。尼。と。喚。做。り。され。年。來。山。執。虫。と。里
 へ。毎。小。疎。り。小。衆。生。濟。度。の。與。小。と。近。曾。猛。可。小。立。出。て。諸。圍。と。徧。麻。止。ま。ふ。と。せ。え
 去。る。夫。賤。渴。仰。せ。る。も。迎。り。地方。小。福。あり。雨。を。禱。晴。を。祈。る。小。感。応。灼。然。る。と。ま。り。

仰る。つ。素藤の指をきりて。純ねる。數珠と徐小丸繰る。又かゝる。登時
 其田素藤の八百比丘尼の對して。喃女菩薩某の當城の主素藤の弓箭命を身ハ
 武勇の外。佛の道疎れ。法驗耳。真に。渴望の思ひ。日々。幸ひ。我城下ハ
 宝駕を枉ら。と。極可。請待。を。身ハ。女仙。秋觀。自在。既ハ。八百歳ハ
 久。保。の。世。の。人。稱。若。披。る。八百比丘尼。と。も。美。不。光
 不死の仙術の學ぶ。速。の。と。あ。ん。ん。の。壽命。と。欲。の。遷。遠。と。即。效
 元。今。出。來。秋。也。采。邑。豐。年。の。雨。禱。暗。を。祈。奇。特。の。亦。今。茲。之。要
 只。願。の。世。去。り。我。側。室。們。を。す。不。り。其。座。の。樹。の。や。向。ハ。比丘尼ハ。點
 頭。原。來。支。皆。人。傳。の。夢。知。の。我。法。名。ハ。妙。椿。を。世。人。通。て。八百。の。名。成
 肩。せ。の。玉。椿。の。長。生。の。故。九。百。の。折。名。と。更。九。百。比丘尼。と。の。妙。椿
 と。吸。る。が。穩。當。と。の。ゆ。め。れ。を。左。右。の。世。の。人。を。幻。の。方。士。の。術。ハ。佛。の

教。の。あ。ね。の。我。身。深。山。の。在。り。時。料。を。異。人。の。傳。授。せ。れ。稀。の。人。ハ。施。の。相。公。の。ん
 欲。り。の。比。時。疫。也。共。侶。の。世。と。去。り。那。朝。貌。と。夕。顔。の。刀。自。違。の。今
 宵。准。備。と。做。の。と。易。と。の。意。表。と。透。徹。告。奇。魂。の。猜。語。ハ。素。藤。驚。れ
 且。鉄。ひ。て。の。憑。の。准。備。ハ。何。れ。整。へ。誨。と。請。向。ハ。妙。椿。答。て。否。修。法。然
 去。る。の。の。奥。の。一。室。の。内。ハ。帳。と。深。く。無。量。の。机。案。ハ。一。箇。の。香。爐。と。措
 へ。侍。で。更。爾。の。時。候。相。公。左。右。と。遠。く。て。獨。一。室。ハ。御。坐。ね。今。宵。丑。三。時。候。を
 那。美。女。連。を。を。き。ま。の。深。信。を。肝。要。れ。の。素。藤。怡。悦。の。勝。也。然。の。期。ハ
 不。程。の。姑。く。緩。坐。を。更。別。室。ハ。席。と。設。て。檀。食。饌。叮。寧。を。れ。ハ。妙。椿。推。辭。
 法。衣。と。脱。枕。と。乞。ひ。て。備。の。の。久。く。熟。睡。を。け。
 作者曰俗の若狭の八百比丘尼の虚実詳るを按考の奥羽觀迹聞老志
 九小云若狭國白比丘尼と號する者其父一旦山に入りて異人相遇以俱俱一處

到於殆一天地而別世界也其人一物を與て曰是ハ人魚也これ食ハ年々延て不老
 父携て家ヲ帰れ其女子迎敷て其衣帶を取ら因て人魚と袖裏小得ら乃
 元と食ら蓋内芝女子の壽四百歳世ハ所謂白比丘尼是也原本黨文今假名又諸國
 異人談山野部云若挾國小濱の空印寺ハ八百比丘尼の住一処ハ則油影の側ハ洞穴
 其奥限りを知れ土人云當寺五世已前の住持の穴ハ入ると奥に掃る小
 且經て丹波の山中ハ出ると其相傳むハ僧ハ其穴ハ住ハ齡八百歳小ハ其容
 貌十五六歳の杜美々として八百比丘尼と稱ハ里語云此女僧ハ人魚と食ハ故ハ長壽
 多ハ又塩尻或問部云若挾國八百姫明神ハ俗ハ八百比何の神の子を答其社記の
 詳多と云れは其の由ハ但古事記ハ大年の神の子羽戸山の神大氣都比賣神城
 娶若沙那賣神と生るるハ蓋此神欲とハ聞老志ハ白比丘尼と壽
 四百歳ハ然信景翁ハ八百姫明神の子ハ其の親ハ裸不不知ハ原是齊東

野人の語也。虚史の詳るる如く願ふ件ハ八百比丘尼ハ唐山の小説ハ所云本ハ
 西流らん今ハ編み但その綽號と洞穴のハ借用するハ洞穴のハ下回ハする
 寓言といふ本づく所ハ見るハ看官作者の用心を知るハ
 却説の目ハ暮ハ素藤ハ先近習ハ吩咐ハ奥ハ小室ハ撫帚ハ戸帳ハ垂て
 燭臺ハ机案ハ香爐ハ準備ハ教書ハ八比丘尼ハ喚覚ハ夕饌ハ羞めハ
 婿嫁ハ遣ハ件ハ比丘尼ハ熟睡ハ叫ハ喚ハ覺ハ左右ハ程ハ更園ハ
 子の羊小ハ素藤ハ焦燥ハ疑ハ其首ハ赴ハ喚覚ハ程ハ妙椿ハ
 昏ハ睡ハ覺ハ水ハ嗽ハ引ハ出ハ素藤ハ喚ハ近着ハ女菩薩ハ既ハ那
 期ハ那時ハ旁ハ久ハ素藤ハ怒ハ復ハ卒ハ遠ハ身ハ起ハ
 備ハ二室ハ俱ハ素藤ハ怒ハ復ハ卒ハ遠ハ身ハ起ハ
 先ハ立ハ一室ハ赴ハ戸帳ハ掲ハ程ハ外ハ坐ハ上ハ妙椿ハ後ハ跟ハ机案ハ對ハ



妙子



焼く返る夜
如替香

妙子



懐より香一裏合出と香爐る火を掻起し只咒文と唱を徐に香と薫らされ
 怪しむ一左右の植る銀燭光と失ひて朦朧とる隨ふ顔郁として立升る炯の裏に忽
 然と頭れお美人ある但見る長短那身小稱して材昂と低くを顔の三月の櫻花の
 吉野の山の鼓香ほ如く眉を仲秋の新月の赤石の浦の如く似たり小町態は細
 晋の風靡靡く楊柳も及ま衣微像る素肌の龍腮の珠玉を延久輝れる哉玳瑁の
 櫛の花の蝶ある白銀の釵見解る身長も餘るる冠翠の雲鬢臙膺蘭を然四維の
 袂の目赫奕と陸奥山の黄金花開錦練の裳地上も曳て龍田の川丹楓葉流る
 秋波のく愛敬溢れ蓮歩軽く羅綺の中勝るる千金擲る厭むと玉音
 のを聴くことと神邪人邪妖幻邪正是沈魚落雁閉月羞花の妙年六の佳人今
 これを見て初て知る盛短は朝貌も果敢るく凋む及顔も夜光の前る燕石も鳥鳳の
 備る鳥雀もたはと羨思妻素藤の魂浮れ心湯けて狂を像く美人の側も樹と寄せて

抱に任めんや程もあはれ煙と共形に滅てみるけの姑且と素藤のやゆ我
 復るる鏡と急改めても尚疑の解れぬ更妙椿のち對して喃女並薩思ふ優
 たる身の妙術次い滅りて我胸豁けて二重葉時の尉められ目もあはれぬ人の
 ら我亡側室朝貌と夕顔とをせりて他們兩個不弥増る美人をそせり其麻多故そ
 今の世の像の如く少女あはれ何を歎久非除朝貌夕顔が存命て左右も果るも他們
 身の暇と取してそる少女と妻ふせ恨ら然美婦人を産る処するの譬言画は
 美を現て漫る曾と焦る果敢る惑を轉て又更の思をもの所り多秋事情を
 听まほし教養といふを妙椿鈍とち笑ての悟り多昔唐山漢の武帝の武帝の鍾
 愛特深るける本李夫人早世をうて武帝の哀慕を勝玉で今一む木李夫人とよ
 ちもかると歎れぬと方木子少翁が慰めまうて返魂香を焼く煙に裏に李夫人の
 姿権且顯れと帝親く亦肉くはく悲まき歎て仍る詩は是非邪立す

第百一回 老尼計を薦ぐ舊祠新小昔る 逆将人と樹小しと公子衛と喪ふ

却説墓田權頭素藤濱路姫と取んを氷人とする擇む人とのる一
有日同國長柄郡榎本の城主千代九圖書介豊俊が重陽の祝義小稻村殿
参勤をとも伴當居更從て館山の城立寄けれ素藤飲び對面して面薦めつ送
ふ異と祝する語次小素藤の豊俊小情語く言平介似れ某已が志願あり
願ふ賢契と煩さ甚麼美引ぬんと何支秋知るとも曩の和殿
教諭より割居の思ひと轉して里見殿歸順せよ今に至る後安城邑を異の飲む
それより以来好と果れて年来疎濶多し一臂の力と竭きらば我身稱ふるは何
事なれ美快々示しぬとされて素藤ち含笑して憑りて小稻村を以て意表
らぬ元某久く取らばるる良縁をよとて某里見殿の第五の息女濱路姫と

喚做まあり仙折就鳥小捉られて甲斐國におてられ那里の民小極れて民間も成長り
去歲の冬人小送られて故郷へ還ることありとある日ある人の噂すは正可國主の女兒
とも薄命の民同年来と歴する大諸侯の娶るべき某の又下民の情小通せ妻と
ゆるく欲ら願ふ賢契我與は這赤繩と繫糸後へくと餘も多し馮心は豊俊沈吟
あてそあるるはとも婚縁のありも智辯も用ひてあるあり況某の世才もいりたるを先
りこ去りありとて可と試ん老黨一名と某小隸て稻村遣りて便宜小ひん有
かこも ひとくある けい
その答の人の小示して還りては素藤點頭て宣趣を理あり家臣與利本膳
盛衡并は浅木碗九郎嘉俱と喚做そのの曩小稻村遣りて義成主見参某の今
番の又件の本膳と遣去り見見とあるはと遽く本膳と召せよと示して豊俊小引
汲千代九殿小從ひて安房へくべと命けり要談既小果一と豊俊の傍難と憚りて止
宿せ御家臣の一日半日後ろとも路更も人のそ更と期と推して告別り伴當俱

これ領地大小あり勢同トクされ權且他下風を立て廳南椎津榎本の三城主門が野心を論
 多。稻村(参勤)之薦めも。けふも上総の童軍も功賞を心もく獨り々昂態飽
 まで我を辱ゆる。這奴の廣言の憎まのふまに。敦圍の本膳並近習們も慰難て共
 侶の死理のふも短慮の功做。里見殿のふも宣のまの。謬もあるが。是の
 亦知るべし。徐計りせぬ。と。か。と。諫る。素藤藤心もせ。里見屋從ふ力を合。離根
 亭の赴いて妙椿の件。趣。喜て亦復罵。妙椿急推禁。噫。益も。今。這里で飽まで
 罵のふも。人不知れて。説言の媒あんの。支尋常で整。智も謀りて本意。迷え左
 右。遠さる。素藤藤目注。童扈從を退。亦復妙椿。對て教諭の
 一言。愚意。不。懺。その計畧の甚。麻。向。妙椿。聲。低。め。然。と。听。里見。義。成。け
 嫡子と。呼。太。郎。御。曹。司。義。通。今。茲。南。十。歳。入。明。年。の。春。正。日。又。鐵。の。着。初。め。風。聲
 を。結。て。殿。臺。の。頭。正。八。幡。宇。佐。八。幡。諏。訪。の。三。社。と。修。復。兼。主。木。の。功。と。い。を。し。今。茲。十二

月の夜。落成せ。稻村へ訴。初。參。請。ひ。か。安。房。も。亦。八。幡。の。神。社。を。承。り。あ。る。這
 里。の。兩。社。と。諏。訪。明。神。の。鎌。倉。將。軍。の。時。勸。請。せ。ら。れ。て。源。家。の。由。緒。を。傳。れ。義
 成。然。て。子。の。社。系。と。諾。い。義。通。の。地。末。も。及。び。て。伏。兵。も。七。捕。ま。す。を。計。較。し。箇
 様。々。佳。々の。機。變。と。言。ふ。勿。論。童。子。の。ま。れ。四。家。老。の。内。中。一。兩。名。守。護。て。必。恨。し
 本。一。杉。倉。木。曾。介。氏。元。の。齡。七。十。の。餘。り。て。伴。衆。達。へ。堀。内。貞。行。東。荒。川。の
 智。勇。凡。庸。の。敵。も。あ。り。他。們。は。機。密。を。知。れ。ぬ。其。の。期。の。變。又。料。か。り。亦。老。尼。が。奇
 術。あり。の。餘。の。段。の。佳。々。箇。様。々。と。其。に。示。せ。る。素。藤。藤。の。找。む。を。覺。ぶ。滿。面。笑。々。ら。ち
 點頭。て。神。出。鬼。没。の。妙。策。も。る。る。の。伏。兵。を。用。ひ。し。諏。訪。の。社。頭。の。老。樟。の。虛。を。究。竟。を
 げ。れ。と。い。然。る。と。領。地。那。里。の。榎。の。子。れ。も。先。走。の。伴。當。們。ま。え。出。され。争。何。せん。亦。老
 尼。が。術。あり。期。及。び。悟。り。ぬ。ん。却。義。通。之。生。拘。り。這。城。内。の。因。籠。真。義。成。怒。て。身。勢。を
 率。て。當。城。を。圍。む。攻。む。防。戰。難。義。通。及。ぶ。亦。義。通。之。細。め。城。樓。を。登。り。敵。示。し。箇。様

箇様子喚ぶ。寄多の都て義通の思の故の管前も放りぬ。銃丸も飛き攻敷く不便の勢
 以折けて向容々々と和談の及ぶれば。折れ思の隨何れ那れ誓盟して義通と引
 換ふ濱路姫と受取りぬ。支十二分の利運。是も里見の武威衰へ。上總と略し安房を
 降して地を房總の閉えとの企及びく死あらず。先那修復のそが。期あ後れて。要るはふと
 胸逞く吹入む毒氣と。素藤諾る。且感。且歎ひて。別議不及。室次の日老黨願八盆作本
 膳碗九郎と喚取合。合て三社修復の計議あり。両所の八幡諏訪神社の頼朝以来の靈地
 なる。類敗既久し。至れり。宜く村長們の課を速く修復せし。就中諏訪神社と神水の
 奇特小も。て千百人の病疫の必死と救れ。神徳あり。又正八幡の普善上下の村人們。城皇
 神を。富民の財と。寒民の力役と。カと勸。勞と厭。て。修造の功と果志。尙る。言の
 従ひて。支の不便と。のわが。擲捕り。音。勿。後。の私論。と。箴。む。願。八。盆。作。八。件。の
 作事。の。頭。人。と。我。郡。民。們。の。不。知。と。傳。へ。落。成。年。内。の。限。り。と。功。と。果。と。東。の。寺。前。の。

思ひ。最。も。時。刻。一。つ。咐。れ。大。家。異。議。多。し。言。兼。七。賦。多。夷。滿。の。郡。民。の。下。知。と。土。木。の
 工。と。與。を。催。促。火。速。き。け。れ。夷。滿。の。民。們。の。驚。憂。ひ。て。推。辭。し。と。欲。ま。れ。罪。せ。れ。ん。と。怕。れ
 又。從。人。と。欲。ま。れ。年。來。重。税。租。税。不。勞。れ。財。用。早。く。救。止。を。吉。の。難。義。通。に。命。不。換。り
 課。役。と。思。へ。領。主。の。酒。色。の。奢。侈。の。與。不。責。合。さ。る。錢。財。も。あ。ら。ず。地。方。の。舊。り。と。は
 八。幡。諏。訪。の。神。社。と。修。復。の。課。役。は。是。切。の。の。ん。と。修。造。の。力。と。勸。し。日。毎。不。懈
 る。者。は。し。れ。と。頭。人。願。八。盆。作。八。件。の。已。得。る。を。欲。む。支。假。托。け。理。と。非。枉。は。難。義。を。課
 する。の。多。れ。民。們。の。亦。困。ど。て。その。虐。と。免。れ。と。件。の。兩。個。頭。人。の。人。情。を。屢。考。せ。れ。ば
 出。銀。豫。の。帳。算。の。簿。一。郡。疲。れ。の。任。重。一。程。女。僧。妙。椿。は。有。一。日。素。藤。別。と。言。て
 那。計。畧。の。趣。後。々。の。段。を。送。る。く。示。さ。ま。あ。せ。る。小。老。尼。が。這。里。に。在。り。要。る。然
 る。と。る。身。還。留。其。人。の。怪。む。も。あ。ら。ん。身。の。暇。を。賜。か。機。臨。り。又。免。身。と。帮。助。て。支。十
 二分。の。勝。利。と。ま。す。一。と。ま。と。と。悄。語。て。素。藤。が。林。房。と。言。半。の。听。き。飄。然。と。立。出。り。信

たゞて往方も知ざるのけり。單表兩社八幡及諏訪の神主們は、曩も小鞠谷如満の神領を
 滅却せしめ、各他御の離散して年来を歴する。今番當領主の沙汰として、三社を
 復の幸ひあり、神事も舊の復さるゝとの風聲、遙く傳へる。舊記と抱いて、共信の殿臺
 かの來り、隨便素藤も愁訴して、舊職再補として、素藤豫計較われば、舊記も
 虚実を糾して、件の三個の神主、此の神領を合々職復して、昔の如く祭礼を執り、
 命けり。左右の程、今年四月の冬、十月の中、沓小至ると、三社の修復落成あり。丹
 楮の玉垣、白木の雞栖も、杜嚴昔昔及、神威の有數、素光を増て、最大尊く、又之
 足ふる素藤、六件の三個の神主と、老黨淺木、碗九郎と、稻村の城遣して、國王義成朝臣
 告り、素藤が領は、外殿臺の頭を、兩所の八幡大神宮、並に諏訪明神の昔、鎌倉の
 右幕下、賴朝御の創立也。源家、由緒ある大社なり。先代、小鞠谷如満が、神領を没收
 して、神主を逐ひ、三社俱に傾破して、年来及び、素藤修復せむと思へ、年々

財用足らぬに、亦復、居るの年を、歴て、稍再興の功を果せり。任れ、亦、源家の義を、仍り
 三社の三社の素藤が、廿敷邑、不ありの、原是源家の氏神、願ふ、國王御、奉詣り、
 奉幣の、受り、仍り、鎌倉將軍の先例、稱せ、神慮も、感応あり、三社の神人、舊記を
 捧り、詰る、事、右の如し。這、御許、容あ、つ、と、舊例を、援、意見、演、社、奉、薦
 り、宗、表、成、成、れ、を、成、て、その、勢、大、なる、三社の、の、我、豫、り、听、知、り、
 佐八幡と諏訪の神社に、む、上、総、介、廣、常、が、鎌倉、殿、頼、朝、の、與、ふ、と、建、立、せ、る、舊、社、
 介、後、又、賴、朝、の、沙、汰、と、同、處、鶴、岡、の、正、八、幡、を、勸、請、あ、り、し、る、れ、當、家、尤、尊、信、
 三神宮、と、勿、論、之、明年、正月、十日、の、嫡、子、太、郎、義、通、初、甲、と、撰、せ、ま、欲、せ、れ、ば、件、の
 三社、の、義、通、と、奉、詣、ま、せ、ん、然、る、に、先、祖、八、幡、殿、家、の、吉、例、は、相、稱、ひ、て、我、見、の、武、運、を、祈、る、
 方、あり、因、て、正月、十五日、と、社、衆、の、本、日、と、豫、定、て、程、と、料、を、半、遣、る、べ、し、折、り、古、例、を、尋、て、
 神、田、を、寄、附、せ、し、め、先、の、旨、を、存、せ、べ、し、但、一、童子、の、あ、る、れ、館、山、へ、立、上、り、其、日、詣、り、

其日小退社奉之れ旅まれば御食心儲き必是至用の所作是等のうと權頭より
 傳へると言示して三社の神主と碗九郎們の幸出物と賜を館山還一のけの介程素藤の
 稲村の首尾什麼をもと思へば胸安くと碗九郎們の還るとも四五日して浅木碗九
 郎の三社の神主と相俱して稲村より來り即便主の素藤の國主喜悅の支の趣明
 年正月十五日小婿男太郎義通詰まるといれりといふ箇様々と報げり素藤斜る
 飲んで肚裏小思ふや八百比丘尼の計る因果とて毫も差小と義成の恭詣せと子義
 通と遺棄我園套入りたる然らば先籠城の準備とせよとて初て老黨願八盆
 作碗九郎本膳の件と秘計と真示して悄悄城内に戦米と令入つ矢種と貯へ燭硝と
 買せざると那期と遅しとせよとて徳而今茲も果敢る暮れて明け文明十五年癸卯の
 春正月十一日毛野道節が鈴茂林の復讐同日同月之但その日手向がまるといふの稲村の城内に里見安房守義成の嫡男太郎
 御曹司義通の鎧の初探の祝義成の又上總の館山の城主菅田素藤が去歲の冬より

萬葉集の同処殿さま頭を両社の八幡並に諏訪の神社も詣て奉敬中あるべしと十三日の
 朝巳の時御曹司發駕とせえ第一の伴長は老黨堀内藏人貞次郎杉倉木曾不
 成元の長男杉倉武者助直元嫁母夫小森衛門篤宗小傳浦安兵馬兼勝近習田祝力
 助逸友古屋八郎景能這們を宗徒の從駕とて侍品三名雜兵二百五十名長幹の槍
 三千條弓二千張鳥銃二千挺兼馬十疋小荷駄二十疋醫師二員宰領の雜色十名今
 番と暗と打粉る前駈後從の華美に上總と投てを俱に去り去向は隣國のりり
 皆是里見の封内なれば心安な似れども義通幼少るとも究竟の老黨若黨とて謀
 られんと因て當時の地理と致る小安房國長挾郡稻村の城の地同國安房郡長
 須賀と距ると一里許とどの今その古城迹詳るに却長挾郡稻村より上總國夷瀨
 郡並日善村へ赴くその路程一日あり遠く二日あり易り先稻村より數里あり天
 津小到る天津より濱荻濱荻より内浦内浦より小湊まで安房國長挾郡事件は

浦安送誠と喚做を嶋の殺生禁断の地と云ふ小湊の目連談生古跡多し世の人の知る処
 ありて小湊より市が坂に到れば這地方も房總の封疆と云坂を登れば上總國夷漕郡の
 屬する市が坂より臺宿上野勾屋山由鞍山最上坂大樟羽賀館山小幡普善寺今布
 是則安房の天津より上總の普善寺に到る路程十里有餘といへ相村の赴はて
 十二四里不過ぐるべし。あつれも羽賀館山の間山路險阻し且岐路多し尙獨り
 之を土民と央て嚮導す做されれば迷ざるものあり稀に因て羽賀館山と過る大樟
 より新戸と喚做を村落に赴ければ路頗遠といへども岐道の迷ひざるべし。あつれも里見は老
 黨堀内杉倉小杉浦安の諸君より相計ひて羽賀館山の山路と過る大樟より新戸
 へ俱き義通幼少のものと一日七里不過されども首途の次の日 正月十日 中を新戸に到り
 久し其里一宿人馬を憩へ。本月十五日の早朝より三所の社衆あつて伴當も御示し
 同話除敵系却説義通御曹司の居る伴當も御示し。正月十四日の未下刻既にお

上總の大樟村まで来た程に忽地騎馬の青侍あり稲村の城より走り来て御曹司の後
 陣を堀内藏人貞杉倉武者助直元が報せり。昨日今午御發駕の後堀内主の令政
 持病の積聚暴発して鍼灸茶餌の驗なく昨夜身故りあり又杉倉主の渾家の
 昨夜難産の忌あり辛く生れる赤子一則死胎也産婦の幸ひ免れぬ是より御
 沙汰あり藏人藏武者助の服穢産穢の障あり社衆の友伴の連へ當職小森衛
 門篤宗と浦安兵馬兼勝ふ相委ねて速退せらるる。勿論貞杉の妻は親類あり
 忌服も稟る者見伴に在るる貞杉同断せし。あつれ下知の使事七ひ各々美
 知事ありと詞急迫し演傳で杉倉氏元荒川清澄東辰相を連署の奉書貞杉
 直元へ遞與あり兩人俱ふち坂馬にて悠れ猶豫せざるをとて隨便人を走らし小
 森衛門浦安兵馬を復徳々と告げり。這時御曹司義通大樟の村長許一重時人
 馬を駐させ小休の折りければ小森浦安の兩伴長い御曹司の御事ありて馳後陣

来れば貞仍と直元の稲村より到来ある奉書、篤宗兼勝們不存と云ふ。我々不
 慮の服穢ならずして快立かりひとむ。死下知既かか、如く本意を承りて神事を
 且つ及ぶ。和殿們守護の大任不在の這地も御領へといふも只小心を以て、
 ろるひか。との兼篤宗兼勝の異議及び諸公にて卑職們不才なれども忠義の人譲
 るべく思ひて、伴の我の心せられ日夜の侍衛由断る。兩三日程にて御歸城既具な
 快々退りぬ。との貞仍直元の各々服穢小憚りて御曹司見合せを其首の願
 引返す。貞仍が妻の親族も四五名伴當の内あり。他も忌服係りて貞仍直元
 と共侶の辭して稲村へ還る。侍品六七名再伴、四五十名もの折猛可減けり。恁
 程の稲村より騎馬の使立される若黨の範内世末四郎と喚做して家先謙の采女
 る。貞仍と直元の兼書と受とりて在下のよ。そそ注進をなれとて件の人々先た
 ち馬の蹄の鞭鳴りて稲村を投てかり。召返さる。毎今ゆる路次成

といふ。堀内貞仍が妻去歲、積取の病着臥てあり。然とも昨今身故
 づの思ひ、折す。嘆き。又直元が妻の懐胎を臨月、仲春ある。二月と
 やく生れ。死胎とあれ。本意不違ひて、只その妻の恙を切て、思ふ。佳而件の
 人々の、三里許既、暮れ。其首、歌店と投て。七次の日、稲村へ還
 け。話分、頭、介、程、墓田、權頭、素藤、豫の計畧を、圖不當。今、茲、正月、十五
 日、義通の發駕の、豫、その、先、秘、密、使、路、次、の、勤、静、と、探、る、者、十四、日、の、下、晡、か、る、者、叔、も、今、番、義、通、の、從、駕、の、士、卒、二、百、四、五、十、名、俱、幼、君、を、
 守護。今日、末、下、刻、大、樟、村、を、來、身、折、稻、村、より、騎、馬、の、使、立、の、伴、の、老、堂、堀、内、貞、
 仍、が、妻、の、身故、の、杉、倉、直、元、が、妻、の、難、産、の、ゆ、え、神、吉、小、從、ふ、と、て、召、還、され、
 又、那、老、堂、の、貞、仍、が、妻、の、親、族、も、今、番、の、伴、當、の、内、中、不、在、り、他、們、も、忌、服、係、
 る、ゆ、え、身、の、暇、と、賜、り、て、大、樟、村、より、か、され、侍、品、六、七、名、あり、再、伴、也、
 後、陣、

わささるゝと報ふ素藤致ひ。と憶も額不加えてそら又はた造化多る。八百比
 丘尾が別位にて那四家老の智勇あり。義通の障りなきのせせん奇
 術を以て追退けんとし。果て違ひ今宵諏訪の社頭より大樟樹の朽虚に
 内へ精兵を敷置て明日社叅の折義通を擒せんと勿論あれも多勢よめて廿
 前驅りの伴當們の支の難義あり。然るも小勢を左右と拉ふ不
 便ふふを思ひ難て獨肝胆と推く程。名黄氏あり。一時候城内をうら巡る。難
 兵們が訴あり。その支極めて奇怪也。城の東門の樹下大なる洞穴猛可の深
 さ計りなかり。因て先試し潜り入りし。奥へ最廣なる。諏訪の社木の朽虚
 内へ續たる。佐れ。這城内より那木虚中へ到ん。地道の往還自由。不思議の
 事。と生る。素藤致ひ。且終びも大なる。足も亦八百比丘尾の我宿望を資ふ。那術
 ると疑ひ。い。と。い。も。兩個の近習。燈燭を秉りてみ。走り出て伴の洞を檢

ま。あ。の。外。不。違。の。隊。配。一。は。這。地。道。二。百。人。又。外。面。の。三。百。餘。人。内。外。一。度。不。起
 立。て。義。通。の。伴。當。二。個。も。漏。さ。ず。擊。捕。え。我。も。亦。地。道。の。那。社。頭。不。起。也。親。小。冠
 者。の。會。合。せ。の。餘。の。支。の。箇。様。と。と。の。進。退。定。る。也。礪。時。願。入。平。由。張。金。作。波。木
 碗。九。郎。門。を。首。と。て。卒。齊。一。勇。立。て。各。准。備。と。ま。り。休。題。再。説。這。夕。御。曹。司
 義。通。の。新。戸。不。到。着。去。り。れ。村。長。の。家。と。旅。館。あ。り。明。日。の。社。叅。の。准。備。あり。折。春。の
 日。い。ま。暮。下。晡。を。け。れ。伴。長。小。森。篤。宗。の。浦。安。兼。勝。と。商。量。し。て。支。熟。る。老。兵。戎
 殿。基。の。頭。遣。し。先。那。三。社。の。光。景。と。せ。け。る。百。首。春。て。老。兵。們。か。る。處。で。那。三。社。の。頭。や
 目。取。大。松。杉。の。松。杉。あ。り。就。中。諏。訪。の。神。社。十。抱。許。の。大。樟。の。その。幹。朽。虚。あり。所。あり
 宜。ふ。稀。有。る。老。樹。を。内。へ。數。人。を。坐。り。下。と。報。ふ。篤。宗。兼。勝。の。听。々。俱。眉。成。擧。尊
 め。て。去。り。明。日。御。參。詣。の。折。の。樹。下。より。雜。兵。を。立。て。非。常。の。備。へ。御。封。内。を。そ
 も。館。山。の。城。主。の。譜。第。あ。り。今。の。世。の。入。心。料。り。か。る。所。の。れ。い。小。心。あ。り。非。除。野

あゝの 心者もいふも。念る老樹の朽虚る。あゝ毒蛇の隠れ住む。あゝ送るも。あゝの意もいふも。
 と。あゝ夜士卒の術示す。思慮る。社伎雑兵。安んず。熟て。諾る。當國。久し。静
 謐る。那里。野心の。母あゝん。况伴の。社頭。の。毒蛇。の。栖む。も。あゝ。用。心。過。洽
 たり。と。あゝ。笑。あゝ。身。あゝ。け。是。先。素。藤。の。館。の。城。の。り。と。老。黨。奧。利。本。膳。と
 新。戸。の。旅。館。遣。し。美。酒。佳。餚。の。入。情。あり。御。曹。司。到。着。の。賀。び。と。演。一。小。林。篤
 宗。對。面。して。る。角。の。來。意。の。頼。り。本。膳。答。へ。然。し。素。藤。宿。望。虎。平。か。で。御。曹。司。の
 遠。く。來。す。て。三。社。諸。公。の。面。目。何。や。是。は。優。去。今。宵。御。旅。館。へ。同。候。し。て。見。参。せ
 る。思。ひ。の。折。り。風。寒。の。目。目。され。昨。今。病。臥。の。為。体。失。敬。至。極。言。足。非。及。び。是。は。不。可。
 陪。臣。奧。利。本。膳。と。り。路。次。の。安。否。の。拜。向。の。與。謹。で。獻。芹。の。愚。衷。を。表。す。本。膳。を
 留。置。し。て。明。日。御。向。導。さ。す。は。れ。か。路。次。の。敬。言。固。未。明。ら。壬。卒。と。言。く。は。ま。一。願。を
 か。は。し。御。駕。と。呼。ば。れ。當。城。立。寄。り。の。り。と。面。目。多。く。と。稟。せ。と。是。れ。い。か。か。を。一。演。

かゝる立寄りのひそと館。義城。の豫。嚴。命。あり。且。清。道。の。も。伴。當。多。く。い。は。る。是。も。亦。元
 益。似。たり。那。三。社。の。伴。當。は。案。内。の。者。も。い。は。和。殿。の。旁。ま。あ。り。及。ぶ。は。我。們。が。私。議。を
 ら。及。館。の。御。証。ひ。い。是。は。あ。り。と。御。主人。一。言。傳。達。せ。し。は。御。親。切。の。趣。の。後。刻。披
 露。仕。ん。快。退。の。ゆ。ひ。の。を。立。て。從。ね。本。膳。の。強。難。で。伴。當。と。お。て。る。夜。支。館。山。の
 城。還。り。の。後。而。之。詰。且。御。曹。司。義。通。君。の。烏。帽子。襷。束。晴。の。轎。子。の。ち。乗。て。新
 戸。の。旅。館。と。立。出。の。へ。老。黨。小。森。衛。門。篤。宗。小。傳。浦。安。兵。馬。兼。勝。近。臣。田。枕。力。助
 速。友。せ。白。屋。八。郎。景。能。們。の。中。へ。侍。品。三。餘。名。雜。兵。都。て。百。餘。名。前。後。左。右。の。從。ひ。て
 先。殿。臺。の。頭。の。正。八。幡。の。神。社。へ。と。俱。一。ま。あ。り。ま。る。程。又。那。奧。利。本。膳。の。十。字。街。衛。の
 雜。兵。を。幾。名。強。從。て。夙。を。途。出。迎。て。案。内。の。立。先。と。遂。と。路。次。の。非。常。と。敬。言。免。け。ら
 小。程。近。邸。の。莊。客。幾。百。名。秋。公。子。の。社。参。と。拜。見。せ。ん。と。暗。る。天。不。其。衰。と。着。る。も。三。々

義通の
槍の
木



八天傳十車巻五

八六

女溪堂藏

素藤の
訪の
社



八天傳十車巻五

台八かん
作ああ
あとか
くはあ
れと別
園と
あま
出せり

危從の毎齊一吐嗟と云々走り取らば幼君の肩あさる果敢るも敷るるのめり
 ける。介程の大樟の頭を警言固の雑兵の頭の上を蜚ぶ銃丸の衛る甲斐もなき駭噪
 して般々もあつた逃るるあり物の要あり連りあつて進退都て度と失ひる折をゆると本
 虚より頭れ寄居るの賊兵或の短槍小眉尖刀も見たり走菟ると御曹司の近習
 們的に寄せると推隔々々殺結ぶの烈に益奮撃も突戦の勝負も分りけり
 又那奥利本膳が本社が敬言固と伴て中置る三千個の隊兵を先お找めり横さめり
 嘯して駈破れ里見の士卒も敷るる御曹司の身邊史衛るものあり一か一個の
 賊兵走菟ると捕捕んとしける義通透まき小刀と抜て殺拂ひぬ刃尖の件は賊徒若
 らも研られて甚き叫びしける折に近づく賊將の是則素藤義通の後方より利子を
 合て動せし持る小刀と打落まき為放す。角の交と當春才十一の小腕の衛るを喪ひて
 勢ひ暴る強敵の當るるあつたる意余刃と捨合はれて吐嗟と叫びる間も素藤

義通と探縮め脇腕を抱いて又那木處引かまき由統逸友苦屋景能くく迫り
 へて驚怒りて共侶の柱を賊徒を殺拂りて趕お程の檜の内より又打中ま音响高れ鳥
 銃の逸友も景能も敷るる矢場おしける程の素藤の義通を生拘りて地道を
 潜りて城内の洞口より出て来る留守を委ね碗九郎は示し誇りて義通を
 室お閉籠りける是より先お諏訪の神社の鶏栖の頭お下向する里見の伴當る
 かり遠く銃响と叫ぶ居る人聲景大家駭に噪立て原來社頭お異変あはるん尋
 思お及ぶ細く安危を伺ひしる馬つらも銃も歩並取次お槍の鞘外も邊
 と惴雄の士卒前後を争ふて走の入んとせし程お思ひる後の方より素藤が伏兵二
 三百名忽然とて聚合来る真先お找む賊徒の頭人足則別人の礮時願八平田
 張盆作左右お備一雜兵お幾十挺の鳥銃と一度連發を響か天地を動し
 宛百千の霹靂の隊お鬼れるお異なるお憐む一里見の士卒は又茲中も幾十人敷る

是を糧と仕れけり登時願八盆作の賊徒と扱ひ槍を拵て二七二七お嘯て鬼れが里見の士
 卒の既の名を尋ねし方と敷きやがも亮も槍も踏住りて這里と先途と戦ふ程小裏面
 る奥利本膳們的義通の老黨近習と大なる敵を果しる賊徒を驅て出て来り又
 前後より扱き息も類を攻め然るも里見の伴當の悍いぶるあわねも大刀折れ
 勢ひは窮て名を思ひ恥と知るの敵と引組を刺達て屍を其首を曝き多くを餘名も
 る雑兵の命を免れぬ戦ひ越東果しり徳而願八盆作の素藤の逆早く義
 通を擒しりるも支の趣と本膳們のうらち聴て造化精妙と不勝の妙即使敵の馬武具を
 一隻も送さざり雑兵們の小奪合もしり常の路を走ると馳て凱陣を登時奥利本膳の預
 けれる隊兵を俱して又那大樟の朽唐より地道を潜りて俱に館山へ還りし里見義通敵
 合ひて伴當多く戦殺する後の話説甚麼をそ次巻の巻小解分るを聴ひか。

南總里見八犬傳第九輯卷之五終

南總里見八犬傳第九輯卷之六

東都 曲亭主人編次

第一百二回 伏姫靈と頭く敗損と補ふ

義成兵と制めて家訓と聴く
 單表殿臺の頭を諏訪の神社の神主の梶野兼光と喚做する。性老実見る
 且六國主の嫡男義通君の参詣ありとぞやより當社の栄ある時多りと思へば
 終ひ不堪むと豫受地子の莊客の幾名次第いさごとく専神意の準備せり。その参
 向と等々の既中て義通の當社詣あり折思ひけるは閉戦起りて里見の士卒の
 送る敷れ刺御曹司義通君の禽ありておとせられ。夏の謀劇は駭怖れて中央
 們と共に小艇を動静を現し小件の逆徒の大將は則是別人をこの地の領主館山
 る。墓田素藤であつて相ると分明なるれ。野心の所以を知られ左も右も思ひ

難う胸安くありける程小闘戦も支果て逆徒の退去りし中央奴們を誘ひ
 立てたるく少く多しければ斬り殺し里見の伴當若黨數を盡して皆是鳥銃
 劍戟の身も傷れ血も塗れる屍骸の社頭を累々登時葉門の思ふ草墓田主の
 逆謀の我身も干るるゆへに那人當社を修復して我を舊職にかせし神を故
 誠心をも里見殿と欺て義通君と禽ふと與りけり人みり加梅國主の士
 卒の敷系れも這社は是參詣の折られ里見殿の我も逆徒を思ひ始め
 勝負も重なる墓田の計畧の圖不當りて一旦勝利を得る勢ひ一城の未過
 ぬ里見の武威のいづれも多し房總二國の大軍を推寄る攻敷られ防が不徳の
 るるは墓田の滅亡疑ひし所詮の凶變も多し稻村の城へ訴て我身も干らぬ
 心の誠も表され倒れ後安かるべし救不沾と安房の治りて速電其暗く取身を
 闇くまて江湖上疎くるものも國主念奴酷ら當社を破却せられんは是も

亦知るべきに身も福を當社の神の程を似る眞四訓以後心の多し非除是
 等の趣を許ても身疑れて合は龍られぬそれまでの福福の時運不儘其の地方
 折られし後の汚名も思ふ那里影と躲免やと獨深念と決りしが鉄のあやも
 墓田殿の程も隊隊兵を這樹の朽虚の籠置りけり多しは多しは多しは多しは
 朽樟樹の頭へ舵を立寄りて朽虚の内をくると怪むむ。這箇の樹虚の最大
 此身洞穴の末で人の出入するべし洞の口足跡も原米館山の城内も地を這樹虚
 へ穿通して那隊兵を出しおけ奇も奇也とむりも足れて二重時立在し中央奴們も
 訝りと皆立寄りて我を駭に怪まざるの多し俱小云と評きと葉門の急推禁
 りて益も評議の時を程を酒家の安房へ赴て稻村殿へ告訴せ居居る多し
 人の亡骸も遣ると輒くも然りとすち棄置して社頭を穢しあんなに最も惶然
 するも願ふ和主們宿所還りてや村人を驅催して野まれ山まれ瘞めまらぬ

このまゝも。里見様の伴當のゆゑに館山の城共御前諏訪の社の頭也。里見義通君の
 伴當と戦て敷かれし神の鳥をさめりし。信濃守御前神の託宣の里見の
 伴當敷かれ後風を起し雨を降し敵射方の亡敵と撥遣ひのいり安房の富山不迹無在
 神女の靈驗を歎け然し神女の託宣今茲の義通災厄ありその天命免れり。故に八幡諏訪の神力も甲斐るに似たり。されども命の美事なり神の助あれは信れ敷かれ伴
 當り。命敷其首不盡る。四陽の時をわびし。里見殿怒り兼て克と一時の合んと
 欲其主卒と尋て喪て哀ふ益言の事。及て敵の辱し遇人の安房。赴く者あり。是を
 國主告より。宣示をのひと。父身們稻村あり。是をより。里見の殿おぼえ。あけ
 多分。深き言あり。思ひ駢一の。あや。疑ひある。解示して又走る。葉門のや
 と。喉禁めて再向んと。され。状形消て。今又信の奇異神。火不誰の敬。怖れ
 る。元家ひと。感嘆して。大なる。宣示現。報。九。及。所。あ。是。併。明。君。の。善。政。

徳義徹らむ。信る。神祐示現。あらんや。日暮春るとも。通宵走りて。國主へ。注進せん。快
 快といそ。急され。脚曳の山路。戦いで。捷足方。俱不安房へ。赴ける。休題再説
 今番里見義通の伴長。ける。堀内。藏人。貞。杉。倉。武者。助。直元。們。の。妻。の。死。穢。産
 穢。ふ。も。召。還。さ。る。う。ゆ。え。大。樟。村。も。辭。退。て。次。の。日。未。下。刻。時。候。稻。村。の。城。か。り
 先伴の若黨と。同僚許遣と。帰着のよと。報知。各々宿所へ。赴。不。貞。の。妻
 恙のあ。直元が妻の亦。異。る。この。ま。り。送。不。敬。驚。訝。り。その。故。と。問。ひ。回。る。不。あ。の。の
 席と退。て。又。ま。あ。ん。と。守。程。直元。們。が。召。不。志。と。帰。着。の。よ。と。も。寄。て。馳。對。面。と。う。と
 尋。る。直元。答。て。然。し。昨。日。脚。曹。司。の。恙。も。る。上。總。の。大。樟。表。到。ら。せ。り。折。大。城。も。遣
 され。那。範。内。葉。四。郎。が。馬。を。走。り。趕。鬼。來。と。い。て。奉。書。と。逸。與。ぬ。その。吉。の。趣。を
 堀。内。生。の。妻。の。身。故。り。児。が。妻。の。亦。難。産。艱。と。生。れ。児。死。胎。信。れ。忌。服。産。穢。の



宇佐の神主
 両社の神
 主路の怪
 異平遇

六



葉門

係り神夏の死伴不達（たつ）の只這兩人の（たつ）と貞の妻の親族の忌服（たつ）と夏（たつ）の母の貞の直元（たつ）と共侶（たつ）かかるとあるべしとある。死下知分明（たつ）のされ已とての支使と小森浦安（たつ）の告知と幼君守護の天任（たつ）を未だて其首より退る侍品五名（たつ）の其申某乙の今も目今（たつ）から来て夏（たつ）の相違（たつ）を敬馬（たつ）の二期の不覚（たつ）の上より。只是狐狸（たつ）の所為（たつ）を去秋怪し夏（たつ）のひびきを多く陳れ氏元（たつ）の嘆息（たつ）と約莫（たつ）今来（たつ）の奇異（たつ）の怪（たつ）の二條の和郎（たつ）の不覚（たつ）のひびきを藏人の崩基（たつ）以来我君三世（たつ）の股肱（たつ）の武勇（たつ）才略（たつ）の多（たつ）疾怪变化（たつ）與（たつ）の魅（たつ）されけは是非（たつ）と詞（たつ）の託（たつ）の貞の情（たつ）を地（たつ）の這里（たつ）の對面（たつ）と請（たつ）とすえ久（たつ）氏元（たつ）の直元（たつ）と俱（たつ）の兩室（たつ）の迎（たつ）れて實主（たつ）の席定（たつ）られ貞（たつ）の面（たつ）をひ（たつ）氏元（たつ）の對（たつ）て某（たつ）不覚（たつ）の顛末（たつ）の宿所（たつ）の選（たつ）りて初（たつ）知（たつ）既（たつ）不件（たつ）の趣（たつ）の今息（たつ）の夢（たつ）のひ（たつ）昨日（たつ）大樟（たつ）受（たつ）りたる各連署（たつ）の下知狀（たつ）と命（たつ）を出（たつ）て再見（たつ）てけある有（たつ）の似（たつ）素楮（たつ）の使（たつ）と稱（たつ）の那（たつ）那（たつ）内葉四郎（たつ）もその人（たつ）の中（たつ）に七（たつ）妖怪（たつ）のそめりの直示（たつ）鮮（たつ）く死（たつ）りもる罪（たつ）と怕（たつ）れ命（たつ）と惜（たつ）と獨（たつ）情（たつ）

悄地（たつ）不（たつ）あるのわ（たつ）は目下（たつ）就（たつ）ても郎君（たつ）の死（たつ）ま心（たつ）の事（たつ）乍（たつ）摩（たつ）の可（たつ）し教（たつ）めると不（たつ）樂（たつ）の一回（たつ）の氏元（たつ）の嘆息（たつ）と夏（たつ）の疑惑（たつ）の然（たつ）る目今（たつ）孩（たつ）兒（たつ）不（たつ）信（たつ）と解（たつ）示（たつ）えと思（たつ）ひ折（たつ）那（たつ）内葉四郎（たつ）昨日（たつ）の終日（たつ）衙所（たつ）の存（たつ）又今（たつ）中（たつ）不（たつ）疑（たつ）と下知狀（たつ）の二條（たつ）の照（たつ）据（たつ）を以（たつ）れも一層（たつ）の大奇（たつ）夏（たつ）の是（たつ）も和殿（たつ）の途（たつ）のりも夏（たつ）の知（たつ）ひと貞（たつ）の直元（たつ）の共侶（たつ）又夏（たつ）の死（たつ）も亦（たつ）甚（たつ）麻（たつ）る故（たつ）の秋（たつ）と回（たつ）の氏元（たつ）の然（たつ）とよけ亭（たつ）牛（たつ）の左側（たつ）の蒼（たつ）天（たつ）猛（たつ）不可（たつ）結（たつ）陰（たつ）の効風（たつ）颯（たつ）と吹（たつ）暴（たつ）て咫（たつ）尺（たつ）のりも怪（たつ）むべ。這大城（たつ）の東門（たつ）内（たつ）の市中（たつ）吹落（たつ）され俯（たつ）累（たつ）で士卒（たつ）百五十名（たつ）皆（たつ）氣絶（たつ）と地上（たつ）あり任（たつ）而（たつ）雲（たつ）奔（たつ）風歌（たつ）て照（たつ）日（たつ）隈（たつ）るなり。本番（たつ）雜兵（たつ）立（たつ）出（たつ）て敬馬（たつ）怪（たつ）を檢（たつ）せしは皆（たつ）是（たつ）御内（たつ）の士卒（たつ）を隔（たつ）昨（たつ）の朝（たつ）御（たつ）曲（たつ）目（たつ）俱（たつ）と上（たつ）癒（たつ）赴（たつ）る。毎（たつ）多（たつ）のりも小森（たつ）篤宗（たつ）浦安（たつ）兼勝（たつ）田（たつ）稅（たつ）逸（たつ）友（たつ）廿五（たつ）屋（たつ）京（たつ）能（たつ）這（たつ）宅（たつ）も都（たつ）て那（たつ）身（たつ）を重（たつ）倉（たつ）と肩（たつ）負（たつ）りてその中（たつ）篤宗（たつ）兼勝（たつ）逸（たつ）友（たつ）或（たつ）は其（たつ）項（たつ）乳（たつ）の側（たつ）面（たつ）の體（たつ）を酷（たつ）く敷（たつ）りて鐵砲（たつ）倉（たつ）も宜（たつ）小（たつ）夏（たつ）の傷（たつ）瘡（たつ）も幸（たつ）中（たつ）裏（たつ）を缺（たつ）は銃（たつ）丸（たつ）骨（たつ）の向（たつ）あり孰（たつ）も

情々地ま探まりまのまととま。各まそのま命ませられま而ま老ま臣ま們まをま召ま聚ま合まてま評ま議まをま疑ま
 まるま也まとま正ま可まとま認まめま一ま敵まをま殺ますま征ま伐まのま名ま及まれま任ま時ま詔まをまひまとま一ま五ま
 十まとま解ま示ませま未ま曾ま有まのま奇ま話ま怪ま談ま。貞ま約まとま直ま元まのま醉まるまとま醒まるまふま似まてま駭ま然ま
 たるま目まをま注ましま。且ま羞まてま後ま悔まのまあま速まくまわまれまがま歎ま息まのま外まさまりまけまりま姑まとま貞ま約まのま
 貌まとま更まめま恭ましくま氏ま元まとま對まひまてま思まひま子ま言ま奇ま々ま怪ま々ま倚ま伏ま糾まふま纏まふま似まてま中まのま
 吉ま事まのま不ま幸まのま中まのま幸まのまあまれまびまそま兒ま伴まのま毎まのま必ま死まとま那ま首ま免まれまてま賸ま當ま城ま返まされま
 たま天ま資ま神ま助まのま奇ま特まとま思まへま御ま曹ま司まのま恙ますま備まさま御ま歸ま館まのま目まのまあまりまとませまんま口ま面ま
 たるま我ま們まのま兒ま伴まのま人ま々まとま一ま戰ま殺まあまるまんま。甦ま生まのま舌まひまあまるまもま臣ま々ま方まのま稱ま
 んま薄ま情まやま女ま々ま妖ま怪ま魅まされま中ま途まよりま退まるま君まのま御ま先ま途まのま遇ま恨まとま争ま何まのま
 兒ま喘まりま益ま益またま所まのま一ま騎ま敵ま城まのま向まひま屍まとま那ま里ま曝まきま然ま然まとま糞ま糞ま肚ま
 極ま研まるま外まにま了ま簡またまのま。這ま身ま不ま測まのま罪まのま上まのま御ま憲ま斷まをま俟まとまてま心ま不ま

身まとま殺ましまるま不ま覺まの上まのま不ま覺まとまいまれま願まふま檢ま使まとま賜まりまてま自ま殺まとま許まされまるまハま
 そとま切まてまのまあまるま。大まのま美まとま馮まとまままとまままとま倍ま話まれま亦ま直ま元まのま親まとま自ま約まとまえまとま
 そとま某まもま同ま意ま覚ま期ま極まめま身まのまあまるま今ま更ま深ま念ま及まんまとまのま氏ま元ま嗟ま嘆まとまらま趣ま
 ありまるま堀ま内ま氏ま宿ま所まのま退まりま。兒ま下ま知まとま俟まとま孩ま兒まのま慎まとまえまのま賞ま罰ま君まのまありま
 臣まのま罪まのまとま自ま殺まとま急まとまとまとま御ま話まをましま慰まめてま辭まとま評ま議まのま席まへまとま
 いそまくま出まてまのま自ま約まのま直ま元まとま告ま別まのま伴ま當まとま領まてま情ま々ま地ま小ま宿ま所まへま退まりま。却ま説ま
 たるま日ま晡ま時ま小ま殿ま臺まのま頭ま。正ま八ま幡まのま神ま主まのま一ま騎ま稻ま村まのま城まへま馳ま着まてま有ま司ま就まてま任ま々ま
 とま昔ま田ま素ま藤まがま謀ま叛まのま趣ま里ま目まのま伴ま當まとま多まくま敷まれまてま義ま通ま橋まのまあまりまとまのま風ま
 聲ま紛まれまるま。且ま小ま訴ま稟まけまはま是まのま怨ま敵まのま正ま小ま素ま藤まのまあまりまとまのま疑まひまるま
 のまあまるま風ま聲まのまあまるま義ま成ま朝ま臣まのま心ま告まのま速まとまとま言まさまとま留まめまてま再ま度まのま
 注ま進まのまあまりまとま程ま小ま這ま夜ま子まのま比ま及ま城まのま門まをま敲まくまのまあまりま當ま番ま士ま卒ま誰ま

樹の枝の鼻うりとをせり賊徒の首級も又那怪し小娘も皆是他が幻術を御
 方小心と饒さる計策ひひつとや。あの疑心と推せし八幡諏訪の三神主
 真の忠訴るまじく。敵の間者飲料りかきり。緊く拷問仕へ実を吐くといふ
 公と義成推替あて否我も疑ひるはあねど。公も暴くせん。御向
 館山へと遣し。悄悄使の還る。他們が虚実も知らる。有司們の三
 個の神主と姑且獄舎敷き措ね然りと暴く。他們を呵責する罪の疑
 事さるる心と用以勅し。酒肉を與て慰めよ。最町守仰され有司ハ異
 議さるる果て候。その相計ひの徳而その詰朝義通の伴當の敷漏れる難
 兵四五十名刀鎗見と帮助てなり。昨日上總守あり。社頭の凶変逆徒の出没箇
 様々々と噂あけて小可們的阿容々々と命惜し。敵の鉄頭を免れ
 なるも俺我と母が捷と合さる。そのまはれ。還るまわて那凶變と告まらんと思ひ

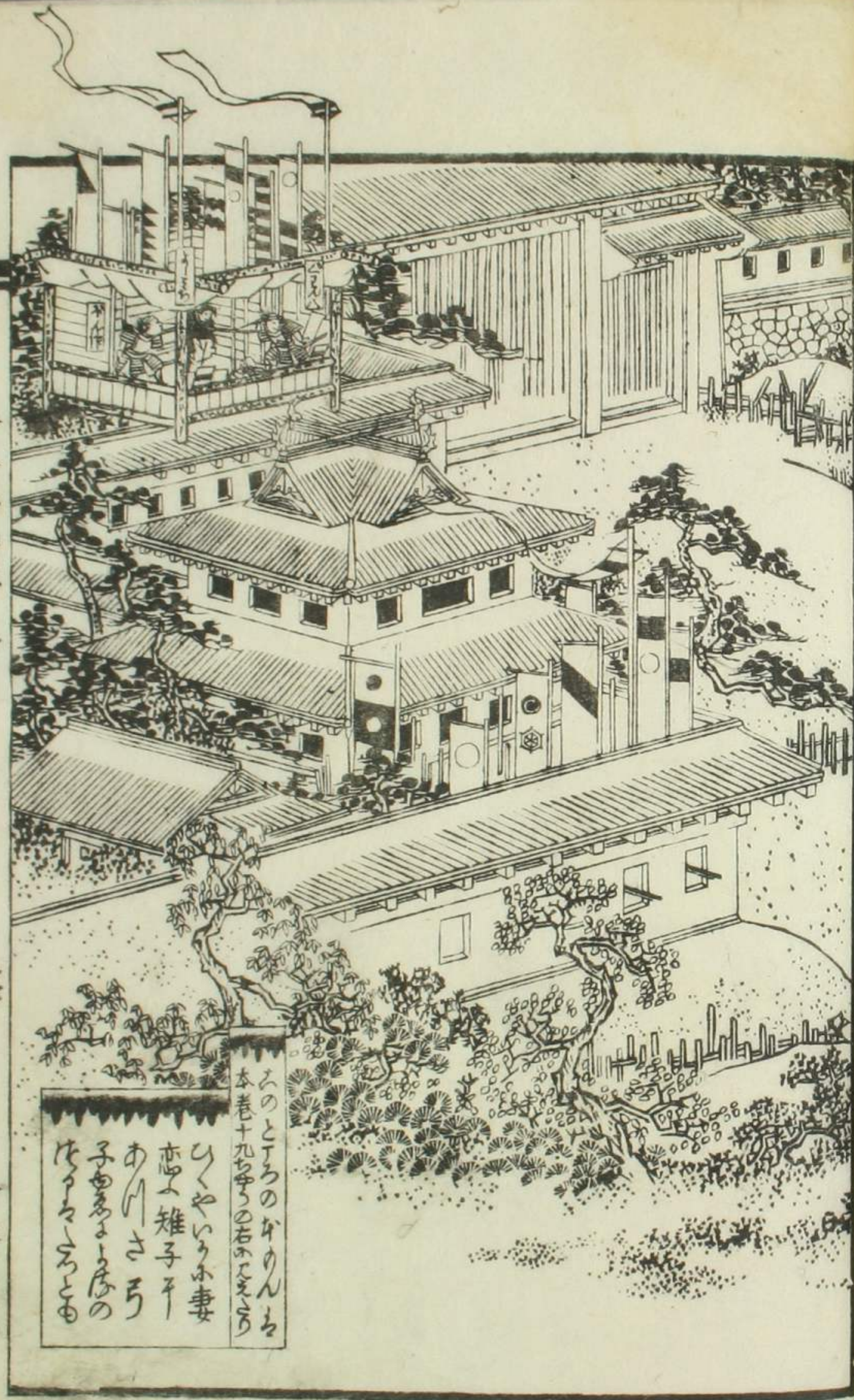
刀鎗見と肩を掖被て辛く退治し。小拾まぬ如く深瘡浅瘡の兵毎過半おへ
 昨夜通宵走りも左右路次の果敢り。目今歸着仕りぬ。我折折山
 蔭に退いて刀瘡見と勅も。程小猛可雷雨降を。鏡風烈りけり。大家
 樹下小立取ひ。赤羽や及び出。末娘小那諏訪の神祠より。十町許ある。路傍の
 並樹の枝の鼻。首級多くあり。折路も里の少女小遇ひ。その邊に
 喚留めて首級のを尋ねひ。小皆是賊徒の首級と神の鼻をせり。その故を
 箇様々と其首は近に里入。託宣さへ有。と云。其の趣と告知され安房へ退く
 是等の。里見の殿は。素藤と攻めよ。只實女形と。尚即功を
 會ひぬ。損ありて益あり。亦神の教へ。具小票。ねと。思ひ。件の小
 女の檢消を似くえ。我々。我們。微賤の小卒。御曹司の御先途。戦致も。其
 阿容々々と今。還る。罪と免る。処。神の示現あり。支祥瑞。注

八代傳九郎

女

進の與證據の爲の件の首級と此をう。齋とてよむるを皆不誤いば告訴と賊徒の
 頭顱と面級有司の実檢入れけり。本程不有司の件の言代趣と先杉倉東堂元
 川の三家老不修達と主君不守えあけり。義成をうめて二個の老と有司と俱か
 召近つけて宣ふ。初那神主門が許の支の趣怪談のく證據をけれ敵の間者で
 あらん然と思ひし是凡夫の疑心。今又躬方の雜兵們の還りまゐて稟せよの違
 那既の咄合を疑霧越不有て正の當家と守りせぬ神の冥助と感悟の然
 義通幼弱の敵の橋のりたりとも他と與不會社首の恥と雪ん易かべ。有司們の
 王社の神主と皆獄舎より饒出と姑且當城不置置又件の雜兵們的數も足らぬ小
 卒るも死を死に死を死に免れてかゝるもこれと外口にたのめわも況その毎疾を
 肩するも身と受け始りて逃るあつた。さ乃瘡見ぬ醫療を加えて後の課役の
 元元りのをうせよかと恨みぬ寛仁大度の君命も有司に申す三家老們も齊一職とぞ

感とてその中杉倉氏元始且と稟せよ。今來雷敷の海徒の首級と改修並附不
 鼻のれも風雨と起と御方の士卒と當城へ領て返されて過半甦生あ及び伏姫
 君の大神の冥助の功の他少那大將が必死の窮窮あり折伏姫上は明
 魂他們が影不立形不添て原救のせぬといふ。思ひ合はれ他一神共神まき下
 孝義心烈和漢不罕る。姫上され亡後も佳の賞善罰惡の神威折毎灼然に
 最有かすいへとの義成の我も亦如石思へも幽冥の事鬼神の出没ありとあり。則
 有り光と思へ則る。あ故不聖人の怪力乱神を語り奉といふ。壁意今番の神は冥助の
 我妹上の神の冥助の功の他少那大將が必死の窮窮あり折伏姫上は明
 奇不惑の神助と憑とて守り外不傲えの世大將たるもの。本意あはるが然
 躬方不祥瑞あれ敵の亦奇に死あり那素藤が伏兵と館山の城内より地道を
 潜りて諏訪の社頭の樟の榎へかゝるも。做らるる技多不風雨の折その洞の迹

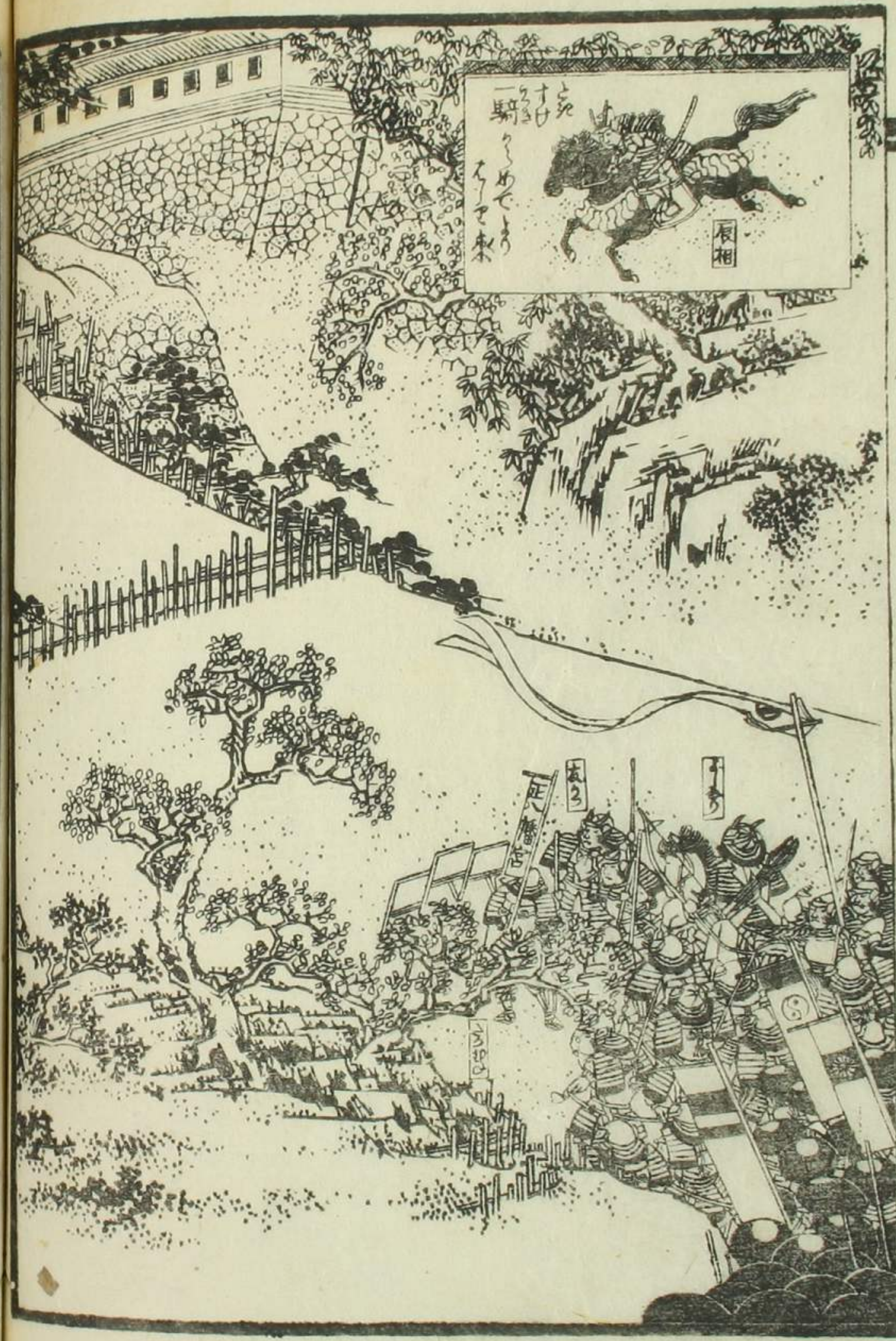


このところのなりんち
 本巻十九のちの右のてえり
 ひくやいふ小妻
 恋入雉子千
 わりさろ
 子あまよふ底の
 ぼろろととも

八幡七郎六

十七

八幡七郎六



一とす
 馬のひ
 ちめ
 ちめ
 ちめ
 辰相

八幡七郎六

八幡七郎六

里人馬を住め。今番の先鋒後陣多。貞の直元を中軍召取。伴の夏之趣。箇様
 箇様と鮮示と。我汝達。一千の精兵を授く。藏人武者助。副將と。這里より榎森
 城。推寄。快豊俊。攻敷。那里の城。抜くる。願南椎津の三城。降。い。易。易。易。
 て。機。臨。變。不。應。軍。慮。偵。旋。快。大。功。奏。せ。か。と。あ。る。さ。う。一。千。の。士。卒。と
 そ。隊。不。隸。軍。配。極。め。速。ま。る。貞。直。元。の。館。山。攻。の。先。鋒。後。陣。を。奉。り。と。あ
 日。よ。い。ま。素。藤。と。生。拘。り。先。度。の。恥。を。雪。ん。心。の。勇。れ。た。地。方。ま。東。小。今。や
 魁。の。本。人。も。豊。俊。を。討。と。と。他。一。城。向。向。の。望。々。と。い。ふ。も。素。藤。も。身。名。聞。か
 拘。り。の。忠。臣。の。せ。し。所。と。も。復。し。一。談。及。公。共。侶。言。兼。一。隊。兵。を。お。て。千。代。丸。豊
 俊。看。籠。る。長。柄。郡。榎。本。の。城。投。て。い。さ。だ。け。介。程。義。成。主。更。又。部。を。定。め。小。森。衛。門
 篤。宗。が。獨。子。多。小。森。但。一。郎。高。宗。と。浦。安。兵。馬。乘。勝。が。弟。は。浦。安。半。助。友。勝。と。先。鋒
 と。と。東。六。郎。辰。相。を。後。陣。と。定。め。次。の。日。新。戸。着。陣。と。地。理。と。擇。て。屯。固。く。一。日

人馬の脚と休めて。明旦館山の城推寄あり。然先鋒も。小森高宗と浦安
 友勝の快當城を攻破して。父の恥を雪んを思へ。衆の先とて。斬り埋め。榎森近江にて
 攻へんと欲せしが。も城の究竟の要害を。左右多攻も。及。落。れ。義。成。成。れ。亦。肉。と。然。の。も
 無謀の戦ひ。雑兵多敷。れ。せ。し。け。の。ま。か。限。り。の。快。と。制。め。新。戸。退。陣。と。次。日
 更。隊。配。と。却。城。の。後。門。の。東。辰。相。と。天。將。と。と。數。百。の。精。兵。を。差。向。の。又。前。門。の。義
 成。多。う。ち。向。ひ。て。二。千。有。餘。の。兵。を。我。れ。攻。敷。と。い。ふ。城。兵。們。も。亦。前。窓。と。用。に。懸。多。く
 矢石連發して。茲を先途と防ぐ。も。寄。隊。の。毫。も。氣。を。屈。せ。ず。數。多。く。躬。方。を。埋
 草。ふ。し。と。之。屏。一。重。破。り。の。登。時。前。門。の。城。樓。上。武。者。四。五。名。立。頭。れ。て。聲。高。叫。喚。す
 中。里。見。殿。の。の。ま。う。ま。入。是。の。暮。田。權。頭。の。年。來。仕。て。股。肱。腹。心。と。痛。心。れ。る。礪。時。願。八。葉
 當。平。田。張。益。作。與。冬。們。の。の。抑。我。主。君。權。頭。の。主。の。恨。み。根。柢。の。義。成。今。愛。濱
 路。小。姐。と。婚。嫁。の。も。も。只。曾。不。請。稟。せ。し。思。ふ。も。似。と。權。頭。の。前。功。と。空。せ。れ。て。許。容

未代を家の瑕瑾あざなをきりて。をれ林を放はなさざと。敦圉とんごに猛まうく弓ゆみをひて。左右さゆうを拂はらひて。誰たれ一人も退ひきく。云いふと諫いさなめる。相あい果はる。小程せうりやうの目城めじやうの後のち門かどへ寄より。東六郎辰相とうろくぢんさうの徳とくも知しる。在ある。然しかし。主君しゅきんを諫いさな難がたし。近臣きんしんが人ひとを走はり。支しけ。徳とくと報はつ。辰相ぢんさうも驚おどろか。只ただ二騎馬にきまを跳はし。主しゅの身邊みへを走はり。来きり。鞍くらをよ。下くだりて。王君わうきんの朝あつて。諫いさなめる。御ご慥たつ念ねんの趣おもひ。人ひと傳つたへ。美みのぬ。比ひよ。龍田りゅうでん大殿たいでん。任まかせ。と知し食く先ま。御出陣ごしゅつぢんの前まへ日ひの内うち輪りんを賜たまひ。御教諭ごきやうゆを美みま。素もとる。君きみの知しる。所ところを。合あひ誠まこと。前漢ぜんかんの賈誼がぎが策さくを。鼠ねずの投なげ。思おもひ。素もとる。君きみの知しる。所ところを。計かく。樹じゆの姑こ且かつ。任まかせ。新あらたの御陣ごぢんを。君きみの上下じやうげの幸さいひ。退ひきく。弟あにと。和わ解げ。躬みづかひ。義成ぎせいの馬うまの鏝えんと。楚そと。合あひ。牽ひ旋まじ。駿足せんそくの尻しりと。地ちと。鞭むち。馬うまの。挿されて。葛くわの地ち。退ひきく。主しゅの隊たいを。乱みだす。前まへ後のちの。從したがひ。諸軍しよぐんの。初はじめ。胸むねを。安やすく。新あらたの陣ぢん所ところ。俱ともに。退ひきく。

第百二回

里見源老侯富山さとみげんろうこうとみやまと七女ななむすめと吊たふ
大江親兵衛高峯おほえ親べゑたかね小勅寇せうたうこと拉ひく

單表たんへうの日館山ひくわんざんの城しろの後のち門かどへ。攻せうめ。東辰相とうぢんさうの先鋒せんぽうの頭人かぶとびと。田税でんぜい戸賀こが九郎くわにらう。時とき。登のぼり。桐山きりやま。良干りやうかんと。喚こゑ。武勇ぶゆう一ひと對たいの。壯さかけ。の。就あり。中なかつ田税でんぜい逸い時とき。日ひ諷ふう訪ぼうの。社しゃ頭かぶと。賊徒ぞくとの。鳥銃ちゆうじゆう。射やる。田税でんぜい逸い友ともの。從したがひ。兄あに弟あにの。一ひと族しゆくの。恥辱ちじよく。を。思おもひ。勇ゆう氣き。十じゆ倍ばい。東とう粉こな骨ほねを。竭あせ。小せう這隊ぢんたいの大將たいしやう辰相ぢんさう。主君しゅきんを。諫いさなめる。猛まうく。可か。小せう前門ぜんかどの。攻せうめ。口くちへ。赴おもひ。折せ逸い時とき。良干りやうかんと。招まね。近きんの。兵へい。支し。徳とく々々。其その。示し。し。馬うま。小せう鞭むち。馳はり。去さる。小せう後件ごけんの。兩りやう人にんの。喘あむ。躬みづかひ。方かたの。軍兵ぐんべい。小せう。退ひきく。退ひきく。聚あり。合あひ。辰相ぢんさうの。還かへり。小せう等とう。小せう姑且こかつ。躬みづかひ。方かたの。雜兵ざつべい。前門ぜんかどの。攻せうめ。口くちより。走はり。来きり。逸い時とき。良干りやうかんと。下くだり。知しる。館くわんの。既すでに。退ひきく。各おのれ。位ゐの。隊たいの。士卒しそく。を。推おし。纏まとめ。城しろを。繞めぐり。て。殿でんり。と。退ひきく。六郎ろくらう。殿でんの。指さ揮ゐ。と。よ。と。い。と。飛とび。似にく。走はり。去さる。登のぼり。時とき。田税でんぜい逸い時とき。桐山きりやま。良りやう。

八代傳し...

廿一

文藝堂藏

千小耳のくちやう。つふふ。這處を成る敵の頭人の奥利浅木の膳碗們。我々は酷く攻りまて臆病鬼の漏るん。退くととも。趕ふづ。前門の敵。これ異へ館の退陣。あつて。素藤必士卒。玉。吐留んと欲するん。今この勢。而箇分て和殿。その一隊を領て。東老と共侶。箇様々々。計。酒家の悄悄。地。間路。退。城兵。出。趕。前後より夾。敵の大將を敷。捕。あつて。違。良千。百餘名の隊兵。過。半。率。徐。前門の方まで退。却。辰相。逸。時。計。策。報。小。程。小。東。辰。相。苦。諫。幸。甲。斐。あり。義。成。軀。て。田。を。解。新。戸。退。陣。あつて。程。小。若。比。馬。ち。乘。一。時。其。方。目。送。一。騎。舊。處。在。浩。奈。後。門。の。殘。置。登。桐。山。八。良。千。門。四。百。餘。名。の。士。卒。と。俱。あつて。退。逸。時。の。報。り。と。辰。相。ち。合。笑。る。點。頭。の。異。議。及。び。良。千。門。と。共。侶。の。士。卒。と。併。て。遠。く。ぬ。義。成。の。殿。と。徐。程。の。城。の。大。將。素。藤。の。み。り。城。樓。の。

らち登り。這光景と迫り。看。て。原。來。義。成。因。恐。の。方。さ。逃。吠。あ。つ。田。を。解。新。戸。の。退。く。と。か。不。さ。り。遣。る。兵。每。數。留。め。と。喚。り。下。立。て。馬。を。跨。鎧。腋。夾。勢。ひ。猛。く。走。ん。と。ま。れ。主。劣。ら。ぬ。性。急。雄。の。軍。兵。約。四。五。百。名。金。鼓。鳴。吐。と。唾。吐。城。門。を。颯。と。推。ひ。返。反。橋。托。地。と。遣。返。く。葛。蔓。地。を。趕。あ。り。登。時。辰。相。良。千。門。の。敵。の。近。つ。思。設。け。る。れ。宅。も。噪。を。知。合。し。て。且。戰。且。走。る。と。素。藤。必。士。卒。と。隊。兵。と。找。ゆ。攻。着。々。様。ら。け。辰。相。們。の。ま。ま。く。怵。難。る。如。ふ。考。微。と。崩。れ。逃。走。と。素。藤。必。士。卒。の。不。漏。さ。と。趕。上。既。五。六。町。一。叢。叢。野。林。の。傍。を。憶。走。り。過。り。か。勿。忽。地。心。つ。れ。け。四。下。を。馬。を。駐。め。兵。每。端。敵。の。伏。兵。這。頭。小。在。躬。方。の。利。を。退。り。と。吸。る。果。さ。る。程。の。さ。や。回。道。より。退。る。件。の。樹。陰。に。埋。伏。あ。る。田。稅。逸。時。の。隊。の。士。卒。百。餘。名。田。と。發。る。勢。ひ。宛。脱。鬼。の。と。素。藤。必。士。卒。後。陣。の。う。ま。り。推。包。ん。と。競。ふ。と。鹿。れ。

故意走りて思ひの随小敵と勾引し辰相良干折てよけれと瞬息間小備を馳々
 建直してと名前後より巾夾まき息も類れど攻まられ城兵吐嗟と駭噪
 一人由敵不當るあまき将卒共不度を覆ひて敷きまのめを尋りけるそ中素藤を
 辛く一方と殺放りて城と臨て逃走る辰相看り馬小拍れ軒本と既小急めく前
 仍近き随小弓は箭刺して漂と射る窺錯る素藤左の肘と竹比深く射れて
 馬より滾落んとせし左右不從不殘兵小帮助られ命を免れて中な城近く程小
 城内よりこれを相て礮時願八平田張金作二百餘名の隊勢をゆるく走の必ま通
 大家ひとり逃籠り橋と引れ城門を閉るる俣一速るけれ入の後れ城兵を寄
 隊の為不敷されけり倍り一程辰相們的這勢いと抜ぎく快漏入のせよと七
 餘騎と一隊小あつ透間も軒菟れ敵の逃脚早る城より援兵也素
 藤と極ひ城門を閉て矢炮と飛をと般系るけれ辰相們的士卒と制め軒捨小

捷開と揚々徐引返まき城兵們的銃窓より看るといへども初度小懲りけん
 何容々々として軒がりけり然れども日の戦ひ辰相逆時良干們が隊小敷を捕る野
 城兵無慮二百餘名寄隊の刀槍戦殺の口是雜兵のまゝして十四五名小過さるけり
 現籌策合期して倍全勝とぬれども鈍逆將素藤と敷漏せと飽むとのみ
 めりされども這日城兵小曾平瀨十郎幸良井尻九郎と喚做る兩個の猛者あり
 近曾素藤が隊小屬て館山の城小竹竜りる夷瀨の野武士けり傳免時良干
 と戦て敷されけり這們を宗徒の兵として侍品の首干餘級鎗眉尖刀の尖小串は
 新戸の陣所へ入り素藤と逢まて殺る里人多る小程小義成主辰相小諫られん
 も田と解りて新戸へ退れぬ程小辰相們が隊兵の退後れられ城兵小啖留られん
 後陣小戦ひありとゆえく義成數馬に士卒小下知して合を返さんよとの戦ひ
 既小果て躬方十二分小克ぬと再度の注進安定への故小義成の馳て新戸小帰着

多て辰相們と等あり。後傳程を還りおければ義成の遠く辰相を召しあはせ
 せし快らも来ぬと邊一と設耳高申すやと兵部は素藤藤們が身許の舉動を察へ
 せしあはせられ我義通と笠前尖おはせて後安敵城を攻破せんと欲せしは疎忽とあや
 しい鉄獲汝が千万言向と犯して諫るとて名も羞むもさへ一歩も退く我をねま
 思ひけり家臣君の先見前知どうきと京もよりの輕くおはせし一言小力既ば
 遂小已と虚して敵と後陣を任せし素藤藤果して城戸を閉じて封殺せんとせし程小戰
 いありとすそその折我の過小と那隊小あり送恨のさ幸ひかく若們聊捷利を
 ゆるとゆけは外なるうもさゆるさる萬ふいら躬方輪を又但恥の上の恥異日凱陣
 ありとも我身何等の面目ありて大人小見参まうせん抑大人の御内翰小甚るるを寫
 せし御教訓の趣とすまほし其甚麼を怨む頻り小問ひ辰相の稍暫く額つた
 たる頭と拾けて御誼美りひいぬと憚りあるとさる御内翰の激かき非除臣們が

御許容ある時誼をねい己とせし權謀を御
 鬱念を推鎮めたり然大殿より御内翰賜りたるも御教諭を京まうり
 正の一言もいひて君御考約おはせ何支も大殿の御誼とあれ美を以て損益
 まれ賞罰罰され御意不儘せしと仰られ一朝のふあまをよめて云と京と諫
 めまうり果とく身辭及ぶとて立地御許容あり臣とて君と給く罪とせ
 折あはれ世の常言小躬を時親とせとのこある小似る拙東小をひるれ故
 列火のては御震怒と鎮めひて御退陣せし御方小三椿は大利あり第一御曹司の
 小命は恙をければ是より後御質として那城内小屏籠置れん是を利のつて又君猛
 可御圍解して當所小退はひこれこそ素藤藤みづる城より出て御方の大利をさ
 故の固様々とかの折田税逸時が毒策小より二隊小分ちて敵と前後小挾むと攻戰
 ひ支の趣素藤辰相小肘を射れて城内へ逃籠るる為体余の餘の城兵宗徒の

勇者曾平瀬十郎卒良井尻九郎と喚做すと逸時良干が敷を捕りし都て
 送るくやえあはて又京を去り既ふく戦殺の賊徒の毒慮二百餘名御方の刀を
 十四五名の素藤の惣の君と寧人とされども御曹司を害し給て那身の反て
 矢傷を受る是る利の二ツ又素藤と士卒と敷をて那身も痛瘡を負ひ
 是よりいよく胆落る縦を敏系と攻めればとも久々ぞと誅伏せし是る利の
 三ふ丁をひへ徳れ御陣を退けられ御名譽言ふて恥辱守あはせ是併御方
 勇戦就中逸時良干們が知計を圖ふ當りし故に但小臣の大功ありて及給
 まつて罪あり御刑罰の君の隨意毫も恨み給と憚る氣色も多稟あり義成
 熟うち听ゆひて且感心大々るを憶持する扇を抗て股膝を托地とち鳴りて
 通徹妙法六郎がけの拵を言くぬぐて又只汝のさるる我軍の後の或馬前小
 主と諫め或は後陣を敵と挫きて怨復一取を雪め忠信と云智勇といひ憑

かむと思ふめり然り孝経の争諫章子諸侯の争臣五人あり其圍を失はんと
 志され孔子の教の素讀の童蒙も知るをさるるにわが争臣と信まて我の
 言く持り分る過る幸いなるか因てあふはけは汝の家嚴君の御内意ありといひ一時の
 虚談をもそとが與ひ虚談するで即親の仰まを備ふその微りせの我のあて
 退くは誠は親の心ありもけ辰相が諫言と期せむ符節と合まるとさぞ胸苦しく
 這方の天を想像して在るに欲する所の義通と快より復一寇を夷はていぐ大人の
 心あるを休めたるんと思ふの必くは勢ひを我兒の所以折るる時の不祥を争何の
 せん儘せぬのへ江湖上の經のあれ禍鬼の昇來虚に遇る薄情さとのいひ書きで嘆
 息と咳は打紛りの辰相も感涙の找む骨を額つて現有かた御孝の實
 仁大度おすはまの御諫を兼らる君が千慮の一失を諫めまら臣子の職分
 その易く取らるる教る所を臣とせよと其諫を容めんといふ難に支るるべし定

臣們が大幸誠惶。かごと稱。君臣和順の會計。用談。あぞ及れけ。
 浩処。龍田より。老侯。義実朝臣の。使。きく。登崎十一郎。照文が。居。是。小荷。馳を
 牽。し。り。ま。り。り。と。ゆ。え。り。義成。辰相。們。兵。ふ。か。ぐ。これ。を。迎。へ。上。坐。お。登。り。謹。て
 来。命。の。趣。を。听。め。照。文。も。恭。く。使。使。の。よ。と。告。げ。て。い。ま。う。今。番。館。山。の。城。攻。を。以。て。亦
 強。敵。を。と。り。て。大。殿。に。あ。る。安。ら。む。軍。士。を。慰。め。ぬ。ん。と。美。酒。十。駝。乾。魚。百。疋。を
 御。當。陣。に。贈。り。せ。ぬ。り。就。く。戦。ひ。の。光。景。も。美。り。て。還。れ。と。ある。仰。を。照。文。奉。り。て。使。使。の
 申。り。を。願。ふ。敵。の。強。弱。を。仰。示。さ。る。べ。う。の。事。と。い。ふ。義。成。成。膝。を。找。め。て。そ。を。辱。せ。二。種。の
 恩。賜。諸。軍。兵。に。配。分。し。て。御。恩。を。預。め。せ。し。り。ん。着。陣。の。後。幾。日。も。あ。ぬ。使。使。出。る。を
 添。ら。れ。て。遠。路。を。敷。せ。ぬ。ぬ。ま。で。軍。士。を。慰。め。ぬ。い。ひ。義。成。が。身。を。執。り。謝。し。る。所。を
 知。ら。む。都。て。拜。戴。仕。り。ぬ。致。し。た。れ。の。優。り。も。却。り。合。ひ。足。す。と。又。城。攻。の。趣。を。一。朝。の
 解。盡。し。か。ら。り。そ。を。緩。中。の。相。譚。ふ。げ。れ。と。仰。し。照。文。あ。る。果。て。遠。く。身。を。起。し。然。而

下座。立。替。り。又。義。成。あ。ら。ち。對。ひ。て。か。そ。く。各。異。を。祝。し。辰。相。們。の。對。面。と。ま。れ。辰。相
 も。亦。致。び。を。述。て。長。途。を。勞。ひ。る。言。果。て。又。辰。相。の。照。文。あ。ら。ち。對。ひ。て。昨。今。城。攻。の。趣。を
 箇。様。々。々。ふ。い。と。敵。の。奉。勤。躬。方。の。進。退。義。通。君。の。光。景。を。首。より。尾。ま。で。い。ひ。詳。し
 解。示。せ。照。文。耳。を。傾。け。て。連。り。小。膝。の。找。む。覺。せ。或。は。敬。馬。を。或。は。終。不。嘆。賞。の。聲。を。出。す
 絶。ぞ。听。果。て。恭。く。義。成。主。勝。軍。の。壽。を。演。じ。稟。せ。り。約。け。の。免。進。退。も。不。用
 意。あ。り。大。利。と。り。身。御。運。愛。を。所。以。あ。れ。と。君。臣。具。し。て。臣。も。賢。る。忠。孝。兩。全。す
 虚。か。ら。む。德。誼。の。至。り。と。稟。せ。し。も。倒。し。惶。か。る。べ。し。然。し。退。は。ぬ。い。ひ。御。孝。行。の。所。以。あ。れ。も
 そ。を。兵。法。の。旨。に。稱。し。て。敵。を。驕。ら。せ。ぬ。い。ふ。素。藤。の。毛。を。吹。て。漫。小。疵。を。水。め。り。そ。の。一。條
 大。殿。の。御。感。悦。一。入。ら。ん。と。思。ひ。ま。る。と。い。ふ。死。家。裏。衣。ぬ。ひ。に。歸。着。の。折。に。す。ま。ま。か
 て。ん。恐。れ。る。臣。們。も。感。佩。の。美。ふ。い。と。只。音。稱。へ。く。已。ざ。り。と。義。成。听。け。合。笑。て。其。致
 意。を。ま。る。今。も。今。と。六。郎。と。大。人。の。お。噂。を。あ。ら。し。思。ひ。ま。る。免。使。を。賜。り。御。安

宣の甘よりありのせえ我後學子おせましく欲し有欲ややと叮寧と問れて照文然然の爲る
 比お夜勤の折唐山漢林楚の戦ひの宛物語と兼りし大殿の宣や昔漢の高祖が
 采陽の廣武山頂羽と田攻一折項羽の防衛術計盡て曩も虜小をりける
 高祖の父劉太公を緊しく細り屏よ登し漢王を降参せ今眼前太公を
 屠んと軍兵小啜らむるありけり憶ふ今番素藤も亦那項羽が頻單お做や
 義通を像の如く小計う奇隊と折く豫の計較るらんか。去らん其義成漢の
 高祖の胆勇ありとも敵と勢ひと同らるれば必難及びせん胸苦しんあめり
 との不樂しお仰せし小臣初てその美を曉得て然る其る計畧もて御曹司を
 救ひ合はる。まわらざるのや。と問なりし否我も亦機小臨ね思ひ合はる。一りまければ家
 系も二十な見神の教稱せせん是より外小樹のありしと仰示させぬと思ひ難

此二公の向まらんゆもさきかて惑ひい今解さる。の情由ひをんと報る。成ら
 聞き眉根と頻單ゆも又沈吟ゆもと既ゆも半响許忽地莞尔とら笑々十一
 郎はま悟らぬ我の御意と思ひ合はる。夫家やて承るれば則是山の字也二十
 又の廿七見き。あの三字と合はる。實の一字はまはる。寛の緩ゆる然る素藤と
 攻敵ゆも不性急おせせ實見ゆも計れと仰る。信語るん。の爰の豫備ゆも。神の託宣
 示現のゆも。お忘れらる。あわねども人信るれば然るゆも信用ゆも欲りせざらん。鈍や凡
 夫の狐疑かして方僅緩急の利害を知り神と親との教誨お恃る。みづろ帮助を
 失ふ我明日よの館山と遠巻やて急攻を徐便宜と等す。宛の帰城の折。これ
 らのゆも。おあはれと睿智の決断と正首示させぬ。照文深く感悦しと仰らけなり
 なる。取立かると大殿のまを。不娛く思召らぬ。今宵は且大樟村まで退れ明日の
 歸路をいそ身。暇と賜るべし。と稟し七駟。辰相們も告別し立程。當津の雜

兵居多し。照文が馬不馳と赤肩一を樽を運ぶ乾魚の苞も合入る。收納之
 くも支果一六照文の伴當といふが立。幾十足の馬を還して大樟の歇店を投て
 退りり。介後又義成主の辰相逸時良干們の感状を賜りて軍功の賞大か
 ら。這它小森高宗浦安友勝們的諸勇士も漏さず俱に召寄て或はその勇
 戦を奉め或はその忠諫を賞しめり。然而龍田殿より賜たる樽を開て乾魚を
 頒ちて隈る。合さるる。雑兵に至るも恩と拜徳と稱す。飲ひ勇さるる
 むらけの却説里見義成主の次の日二千餘の諸軍兵を隊部して未明より館山の
 城へ推寄めり。遠巻小しと攻め敷き去る。三町有餘究竟の地方を擇て一
 日陣屋を建連。兩露路を禦ぐ準備あり。夜に篝火を燒續けて夜敷朝蒐の用心
 懈らぬ。昨日敷捕る城兵の首級と梟並べんと武威と赫亦火とく敵城の咽喉を
 扼り。飛鳥も漏さず。沖對の堅陣濃きもの。館山城内の戰果前種

火并小医一にさるる。か。侍のけれも氣を屈せ。素藤の倒る攻敷れを幸ひりて
 矢傷を療養ある。既日自屬を辱る隨ふ。瘡痍瘻の果一が卒や寄隊の奴
 們の打腫と覺させん。士卒小下知く回る時多。鼓を鳴り。田の聲と賜を
 撃つ。入る勢を示し。時又義通君と城樓を吊登り。譴而苦。大音を士卒
 擇り。罵らる。初のぞ。寄隊を連り。招く光景。回遠けれ。朦朧。寄隊の陣へ
 聲届ひ。然り。そ。を。あ。れ。里見の士卒の怒。堪。攻蒐えんと。聞くも
 あり。と。義成緊しく。制さ。て。尙軍令。小。昔。くりの。首。と。削。られ。性。起。る。勇
 士も。猛。卒。も。俱。安。ら。ぬ。留。月。を。鎮。め。り。か。う。登。り。思。ひ。止。り。け。り。左。右。旁。程。の。春。の。良。二
 月。下。旬。の。あ。ら。る。素。藤。の。一。番。も。士。卒。と。出。て。敵。を。襲。つ。寄。隊。の。迫。り。城。を。眺。め。り。
 長。江。日。ろ。ろ。銷。し。難。く。樹。影。と。身。方。る。り。け。り。然。る。素。藤。の。折。る。風。の。夜。士。卒。と。出
 多く。寄。隊。の。本。陣。と。火。攻。せ。り。必。勝。の。勢。ひ。る。ん。他。の。奸。智。も。長。る。る。素。藤。の

六韜之畧の兵書を知りて、然る軍畧の思ひの如く、日を弥りたり。話分両頭、介程、瀧田の老侯、義実朝臣、部大輔、御高、磐崎十一郎、照文、新戸の陣所へ遣して、那裏の勝敗を听せ、始逆將、素藤が義通君を城樓へ登して、譴而安ら、寄隊を向ひ、非礼の婚媾を討め、折後、東辰相が素藤を射て、痍を負せ、その日、磐崎照文が老侯の使とて、新戸の陣所へ及びて、義成朝臣の如く、神と親との教を悟り、是後、火速、小寇を攻め、遠巻、ゆて、便宜の折を告ぐんと、宣ひ、支の越都て、分明なり、聊慰め、その事許、日を歴て、二月下旬、自ら、躬方、利あり、いづれ、義通君の存亡を知り、ととも、ろり、左、右、胸、の、安、く、熟、思、ひ、あ、ま、う、信、折、那、大、士、們、が、在、り、と、邦、助、あ、る、と、穗、北、止、宿、と、告、ぐ、を、徵、迎、ん、の、ゆ、え、當、家、の、武、德、の、衰、る、歎、と思、れ、せ、ば、恥、か、ん、初、義、通、の、伴、當、們、が、再、生、の、奇、特、あり、又、館、山、の、賊、徒、の

首級と樹抄、小鳥、る、の、猜、ま、る、我、亡、女、伏、姫、の、神、靈、の、冥、助、小、を、あ、り、と、列、女、の、魂、今、る、不、滅、び、那、里、靈、炁、も、灼、然、り、歎、介、後、の、義、成、を、帮、助、ん、と、せ、れ、と、今、の、至、り、て、義、通、を、拯、ひ、合、さ、べ、便、宜、も、る、躬、方、の、士、卒、の、い、づ、れ、城、を、睨、て、日、を、弥、る、と、の、人、傳、は、雪、く、ら、れ、ま、し、ま、し、傳、は、星、移、り、と、甘、稔、あ、ま、り、の、昔、あ、り、伏、姫、が、自、殺、の、後、那、里、の、山、河、水、十、倍、と、今、る、一、日、も、瀬、を、見、ま、さ、る、故、小、渡、せ、る、橋、は、推、流、さ、れ、舟、も、筏、も、棹、届、く、に、樵、夫、牧、童、も、登、り、の、跡、久、く、絶、り、と、我、も、亦、伏、姫、の、墳、墓、を、ア、る、よ、も、る、一、只、年、々、の、忌、日、毎、日、大、山、寺、へ、参、詣、し、て、他、が、菩、提、を、吊、ふ、の、如、く、然、り、明、日、件、の、寺、へ、詣、り、那、神、靈、の、冥、助、を、惜、々、地、に、祈、り、る、感、應、せ、し、ま、し、て、義、成、が、武、運、芽、出、し、十、全、の、勝、利、を、得、る、も、あ、ら、ん、鳴、呼、あ、る、の、と、心、ひ、と、小、既、小、尋、思、と、去、あ、り、く、その、宵、磐、崎、照、文、們、は、し、し、と、示、し、伴、狗、ま、せ、て、次、の、日、の、未、明、も、瀧、田、の、城、を、ぞ、せ、ぬ、と、徵、召、の、ゆ、え、あ、れ、が、伴、當、の、最、難、と、照、文、並、小、近、習、が、東、峯、崩、

三小水門目筋船目六郎と喚做る四五名の後生の。その餘雜色奴僕に至
 るまで四五十名不過されども大山寺で焼香の折の礼服及布施物も。都々照
 文が奉じて。西の固の柳宮ふ花も。伴の奴隷小駝。又老侯の茶辨當伴當
 割笠置る。脱落あるべからぬ。詩々。其具もせせ。却説里見義実朝臣へ走
 颯と命ける。三歳驪の駿足よりち跨て。那富山の麓路る大山寺。詣あり。住
 持の大家と領て。みづく出迎て佛殿。道守に。登時義実朝臣の準備の礼服。更
 めて。本尊と拜となり。次小伏姫の位牌。焼香して。祈念と凝。いふ。半時許既
 らせ。果子とまわらせ。住持も侍り。施の飲。舒。一。要時尉め。もう。た。る。
 語次。住持の。豫知食。當寺より。遠く。富山の腰。山河の流水。久
 々。淵を。做。人。皆。歩。る。と。泊。り。隔。昨。の。曉。より。那。山。河。の。水。猛。可。酒。で。砂

石を頭。また。ま。る。く。然。二。尺。の。童子。とい。とも。皆。濡。心。洗。ま。れ。ども。登。山。の。後。の
 その。水。の。又。推。來。る。と。あ。る。還。る。路。の。る。く。と。同。近。は。果。老。弱。も。沾。て。り。ま。る。
 涉。ら。ざ。と。の。風。聲。隠。れ。い。ま。し。檢。わ。り。淵。を。做。る。激。流。の。一。朝。の。涸。竭。せ。り。是。も
 亦。奇。し。の。あ。て。い。ま。と。い。を。義。実。ち。ち。所。の。く。そ。ち。幸。ひ。あ。る。る。ん。是。よ。り。の。後。木
 樵。り。炭。造。く。民。の。便。宜。あ。る。ぬ。と。回。答。て。馳。く。油。逢。く。告。別。と。出。立。住。持。を。亦
 復。大。衆。と。俱。に。委。園。を。送。り。ま。わ。り。却。説。義。実。朝。臣。の。近。習。們。を。從。へ。寺。門。を
 出。つ。登。深。く。馬。を。跨。ん。と。折。那。富。山。の。河。水。の。涸。ら。と。い。夏。の。趣。を。照。文。並。の
 近。習。們。を。辭。せ。さ。く。耳。に。知。し。て。我。は。是。より。富。山。を。登。り。て。絶。て。久。し。伏。姫。の。墳。墓。を
 見。り。欲。ま。の。ら。う。と。い。て。伴。せ。よ。と。仰。を。大。家。兼。り。雜。色。も。奴。隷。も。件。の。よ。と。下。知
 あり。那。山。へ。俱。一。ま。わ。り。せ。け。り。介。程。の。義。実。朝。臣。の。馬。の。脚。搔。を。名。め。馳。て。富。山。を。赴
 け。那。山。河。の。頭。へ。來。り。那。這。と。看。且。一。も。現。風。聲。不。違。と。云。く。這。川。都。々。涸

竭く。水の毫もろりけり。然るに昭文を尋ねて。死伴の毎の吟一不優る光景の
 驚に思ざるる。奴隷の俱舌を吐いて。奇也々と稱へたり。登時義実の馬より
 閃りと下立つ。準備の登見の尻を楯く。昭文は宣中。登山不伴當り。倒れ
 路次の煩ひる。且十一郎が親。登崎照武の當初八房の犬不伴れた。伏
 姫を封留んとす。這川より夏あられ。先蹤不祥。昭文は這里に留り。我
 かり束縛を待す。是より我身を後入の。東峯萌三小水門目。鮎船貝六們
 這三名より夏足りてん。その餘は姑且要す。とす。知し。鞋奴は持せ。草鞋の
 穿更さして杖を携。邊へ。身と起さんとあゆむ。昭文を尋ね時。林に稟さく
 御説け。なり。ひも。年居身人迹絶た。高峰に登りせ。あふ不及。絶れ。三個は
 死伴當り。物体る。いづも。切て十名二十名後ひ。さ。後安けん。餘人の左まれ
 右もあれ。小臣の那里までも。死伴をこそせ。ま。ほ。けれ。親が這里に身故り。と。

今ゆく不祥とせられん。心恐れる。本意のあふ。と。憚る。義実。あ。否
 這山の昔より。猛獸毒蛇ある。と。す。久。人跡絶。と。何。の。憚。あ。る
 且伏姫の亡魂。這山に留り。親の守り。ふ。り。や。せ。益。言。時。を。多。程
 去。但。人。馬。を。取。合。し。て。か。へ。さ。と。答。ふ。を。よ。め。れ。と。諭。あ。る。河。原。下。立。て。出。る。石。を
 踏。ひ。て。前。回。の。岸。に。登。り。あ。ふ。水。涸。れ。野。袴。の。裾。も。濡。さ。り。易。か。ら。る。是。より。と。義。実
 主。の。三。個。の。近。習。を。従。へ。て。み。づ。う。山。踏。を。表。あ。る。幾。町。ふ。及。程。忽。地。後。方。と。え。り。て。
 東。峯。萌。三。子。宣。中。の。心。屬。る。死。に。伏。姫。が。墓。に。水。を。向。る。折。石。滿。を。汲。合。る。
 東。西。を。く。て。あ。ら。う。空。う。ま。る。外。に。あ。ら。い。汝。の。快。く。走。ら。せ。馬。柄。杓。を。推。乃。走。ら。せ。且。奴。隷。を
 領。て。近。村。へ。赴。て。花。を。求。め。も。推。乃。後。より。東。よ。折。り。二。月。の。下。流。る。れ。這。山。も。花。の。あ
 れ。這。里。を。折。て。這。里。を。墓。へ。向。る。疎。畧。に。似。て。快。く。せ。よ。と。い。そ。が。あ。ら。萌。三。子
 応。じ。し。躑。と。旋。ら。し。て。今。東。路。走。り。け。徳。而。義。実。主。後。三。名。を。程。あ。伏

姫の墳墓と投て登りぬ三月は隣り峯上の櫻這里も那里も開初て花香寄き居
 春の風吹くより霞段め谷の紫鶴鳴珠り人來と鳴く我も亦經て讀め昔本
 参り路の小草も目も濁く現托美蓮華草道邊の佛の座心つぐも幾春も今ハ杉
 草木と堂室の女色美し草も木も竟も来心皆成仏の功德と徐々念ぢ山又山と向上げ
 奇品突立して造物天然の妙工と見へ嶮邊廻り直下せ白雲從起りて谷神宮然
 と去牝の門を開け然流氷小零る桃花ハ武陵の仙境遠くわむむ偃松ハ幽雅る藤
 葛ハ天台の石橋危は似し現眼も觀耳も听くめ皆悉浮世の塵と洗流せる靈
 場佳景むくむく小弥増る義実憶つむ杖を住めて一重時憩ひて伏姫の住捨ら
 品屈は稍近着んと去る程ハ左右小間る樹蔭より弦音高く射矢獵箭前
 先小立る近習の侍小水門目ハ高股と射られて托地と轉輾る程ハ由あり又二の
 箭前後方子從ふ鱗船目六あ亦膝と下叩射さて苦と叫び申あも仰反るし付

登時左右の樹間より頭れ魁見四五名をわく持る竹槍を頻搦て喚る声も奔一
 ちれ義実我々の昔年汝も亡され満呂安西及神餘の與ふを復も怨の槍尖を受
 てゆえやと罵りて右ひらゆる聲も鬼も義実怯る氣色も寄其敷く杖もち棄て
 刀の琫甘げと疾視て立ち浩然傍る樹の蔭に入あそ天地は响く聲も立や
 ちれ魁見見れとまる里見殿も宿因ある犬士の隨一とそ名ハ豫知れる大江親兵衛仁
 め小あり住れやと喚りて走り去る大童子是甚る打扮を但見る身の長丈四寸面の色ハ
 薄紅桃の花を連ね似肌膚白く肉肥で骨逞し勇吉相貌身ハ段々山樵
 衣の下ハ錦の襦袢を被てる素朴の櫛の自然棒を最も輕氣ハ腋挟し腰小
 一口の短刀と瑤下も帶做て振乱る額髪ハ年才より長ある神童の威風ハ駭く魁見
 們ハ舌と吐れ目と注しく左右を找難たりける段特ハ長ぢる集て天衣ハ巻を更て
 第七卷の首ハ解ん本集下帙も亦六卷あり看官姑且渴を忍びて續出まじと筆を止



神童再出世
 老侯小謁志
 厄小
 ちく
 ちく

南總里見八犬傳第九輯卷之六終

八犬傳上冊卷六

世三

八犬傳上冊卷六



八犬傳上冊卷六

世三

百三六

百三六

あち八

出来介

百三六

○曲亭翁手集八犬傳第九輯上函画工筆畊刷人目次

出像畫工

二世

柳川重信



總卷淨書

- 第一卷 朝倉伊八
- 第二卷 横田伊
- 第三卷 櫻木吉
- 第四卷 横田吉
- 第五卷 櫻木吉
- 第六卷 横田守

剖劔

○著作堂編演國字御史新舊畧目 書林文溪堂刷板

近世說美少年録

第一集四頁画 第二集第二集北漢画共二十五卷 先年發約第四集五卷明春出版相違る

開卷驚奇俠客傳

第一集より第三集まで共二十五卷先年追未出版 第四集五卷全般賣出第五集五卷明春發約

南總里見八犬傳第八輯

第一輯より第九輯上帙まで五十五冊の既出 第九輯第九輯後帙六卷此度推し近日出版之仕

水滸後画傳第一集

五冊水滸後傳を通俗譯文として三冊の画を加ふ 畧畧傳第一集五冊百八人の列傳傍像と新中巻の三書遠くを刷板

松浦佐用煖石云鬼録 全 書 前後二編共三十冊先年全部のり年々増りゆく

美濃舊衣八丈綺談 全五巻 駒才の演戯曲と翻案と奇談を画入るを本巻

○家傳神女湯 一包代百羽
 ○精製奇應丸 大包代五羽 中包代三羽 小包代一羽
 ○熊胆黒丸 子包代五羽 一包代五羽
 ○婦人つむしの妙茶 一包代十四文 羊包代三十二文
 製茶本家神田明神下町明野茶と下滝澤氏
 弘所 元坂田中坂下南側より高橋氏

本輯刊の書林文溪堂再拜頓首 四方賜顧の千百 君子に告ぐる作者曲亭翁翁君の筆力ひきくを本傳 結局近世より下函六巻を合し全部百十五回ある 九冊子物語の長巻を合し今昔の外なる一巻を 発販の上函六巻の楮敷例より志するを大江親兵衛の再 出の段をもとの終りあせせしめし作者の用意を再 下函六巻も推して合し今昔の外なる一巻を 費言と高評を希ふる人 刊行書林文溪堂謹白

天保六年乙未春正月黄道大吉日發販

心齋橋筋博勞町

河内屋長兵衛

河内屋茂兵衛

大傳馬町二丁目 丁子屋平兵衛板

書行

江戶

